

---

# 溟樓綺譚

上遠野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

溟樓綺譚

### 【ZPDF】

Z5840

### 【作者名】

上遠野

### 【あらすじ】

身代わりとして売られていった友を捜す為に、皇都隨一の遊郭“溟樓庵”を訪れた佐波。偶然居合わせた火事で一人の少年を救つたことから、佐波は國家絡みの陰謀に巻き込まれてしまい…異世界遊郭綺譚。

\* 見た目平凡系ヒロインが（肉体的に）痛々しい目に遭います。苦手な方はご注意ください。王道（？）ヒーローのようなヒロインがお好きな方向きかもしません。

雪が、散らついていた。

白い地面に膝を折り、薄い衣服を粉雪に濡らして、一人の子どもが、雪よりも果敢ない約束を交わした。

「必ず、私を迎えて下さると、約束して頂けますか。」

震える少年の手を、更に小さな手で包みながら、少女は固く頷いた。涙は既に凍っていた。少年の睫毛に降り立つた雪が、場違いに輝いていたその情景を

少女は、決して忘れる事は無かった。

夕闇刻をとうに過ぎた、闇夜ヶ刻。

その重たい闇を押し上げる極彩色の提灯が、其処彼処「モロカシヒ」に揺れている。

何処からともなく上がる喧噪、嬌声、笑い声。

荷馬車が10両は並列で通れそうな大通りに添つて、ビのよじにて建てたのかも分からぬ、豪奢な木造作りの軒がずらりと並んでいる。

自分の影さえ鮮やかに地面に広がるその場所で、硬直したまま動けないでいる少女の横を、安く見積もつて一陽期（一年）分の給金以上の呂物に身を包んだ恰幅のいい男性と、その腕にしなだれかかる、いと麗しき優艶な美女が、まるで少女に気付きもしない様子で通り過ぎて行った。

美女からふわりと香つたこの甘い芳香は、”ここ”特有の、媚薬効果があるといわれる”紫杏香”じあんこう”だろうか。

呆然としていた少女は、よつやく回り始めた思考をどうにか繋ぎ止めて、ぐっと顎を引いた。

立ち止まっている暇はない。

そう、一刻だって無駄には出来ないのだ。

今日という好機は、きっと一度と巡つてはこないだろう。ならば、

せめて精一杯。

横顔に決意を滲ませて、少女は「」、皇都隨一と名高い遊郭街に足を踏み入れた。

状況を整理しよう。

少女の名前は、佐波「さわ」という。年の頃は数えで17。かつては布津「ふつ」と詠われた名門貴族の子女だった。

それが没落したのは、佐波が12の冬。

当代一の賭博好きであつた彼女の父がこしらえた借金は、これもまた当代一であつた。

家や土地、株券を売り払い、一家一族、その使用人に至るまで全て離散。

当事者である父親は蒸発し、名高い貴族出であつた母親は、人に媚びてまで生きることを厭い、自害した。

他の兄妹たちは、それぞれに急ぎ嫁いで行つたり、またはどこかの貴族の使用人として雇い入れられることとなり、少女もまた家の伝手を辿つて、地方豪族の端女「はしため」として、どうにか今日まで生き延びる事が出来た。

佐波が世話になっている屋敷は布津の南にあり、ここに王都までは馬で2日半、馬車だと4日ほどかかる。

王都へは商談の為、一族の代表として長男と三男が遣わされて来たわけだが、約一星期「一週間」の滞在の最終日前夜である今日になつて、三男が遊郭に行きたいと言い出した為に、こうして佐波を含む数名が、急遽お付きとして従つたというわけだ。

長男と違い気性の荒い三男坊に付き従つるのは容易なことではなく、お役目の話が出た時は使用人同士で押し付け合い、一時は険悪な雰囲気にもなつたのだが、ここぞと手を挙げた佐波に、仕方なく付き

合つてくれる形で数名の雇われ用心棒がお供することになった。

佐波としては、これは願つても無い機会であったので、懐深い用心棒たちには大変申し訳なく思いながらも、実に潑刺とした思いで京都一と謳われるこの遊郭街へと足を運んだのだった。

そんな佐波を後押しするように訪れた好機 上機嫌の三男坊が、

佐波たち使用人に少しばかりの遊金を渡し、「好きに使え」と

そして「俺の後を付いてくるな。長兄へは決して告げ口するな」と言うなり、使用人を街の関所（遊郭街は高い堀と二つの門に挟まれている。そこでは厳しい身元の調査があり、武器となり得るあらゆるものを預けなければならない。）に置き去りにして一人、遊郭の灯りの中に消えて行つた。に、心踊らせ、思い思いに散る使用人達と同じ様に、佐波は遊郭街へと足を踏み入れた。

そしてそのあまりの豪華絢爛さに、呆然と立ち尽くした畠頭へと話は戻る事になる。

如何にも田舎から上つてきた使用人風の佐波は、誰にも視線を貰う事無く、ただ立ちそびえる遊郭を見上げては提灯の”印”を確認するという作業を、端から続けていた。

確か、めいろうあん、と聞いたはずだけれど…

何せ使用人同士が交わす、風より軽い噂話のことだ。ガセである可能性もある。

もちろんそんなことは百も承知しているのだが、それでもその僅かな希望に少女は懸けていた。

無事で、いるだろうか。

噂話が、本当に根も葉もない”噂”であっても構わない。  
ただもしそれが本当だとしたら、無事でいるのか、それだけでも確  
認したい。

以織「いおり」。

今でも、瞼の裏に描ける友の姿。  
名貴族一族の子女である佐波と、佐波の家の使用人の子であつた少  
年とは、身分も立場も隔てられてはいたが、心から信頼し合える友  
達であった。  
けれど。

あの冬、凍てつくような寒い日で、少年は”売られて”いった。

他でもない、佐波の身代わりとして。

## 1 (後書き)

はじめまして、上遠野です。

異世界ファンタジーが好きで、自分で書き始めたら  
どういうわけか剣も魔法もほとんど関係のないものに  
更新はかなりのんびりになるかと思いますので  
どうぞ気長にお付き合いください。

佐波の父親のつくりた借金は、家・土地・その他全てを売り払つても尚補えぬほどの巨額であつた。

当の本人はとつぐに蒸発していたが、借金取りは引っ越し無しに残された家族の元を訪れ、夫の裏切りに心身ともに疲弊していた母親にこう囁いた。

『借りたものを返さぬがお貴族様の礼儀ではないでしよう。家も土地も何もないこの家に残されたものといえば、”あなた”か、もしくは”子ども”か』

没落した貴族の婦人や子どもが遊郭に売られて行くというのは、割とよくある話だった。

だから佐波は、家が傾いた時からその覚悟を決めていた。けれど母親は違つた。名門貴族の出である母は、自分が辱められる存在となることを、決して受け入れられなかつた。

『私には無理です。私、には』

母親の視線が他の兄妹を越えて、佐波でピタリと止まつたのは、仕方がないことだ。

佐波は、父親の浮気に涙れを切らした母が、母とその愛人の間に作つた子どもだつた。

その事実は公には伏せられており、佐波は名門貴族の子として育つたが、内情は館の全ての者　　館の主である父でさえ知つていた。そもそもりん、佐波もそれを幼くして理解していた。

血を継がぬ子を疎む父親と、一時の気まぐれで作った罪の象徴である子を厭う母親。

兄妹の中で、一番最初に見切られる者が誰であるか、佐波に分からないはずがなかつた。

『母様、私が参ります』

母親の視線を受けて、佐波が一步前に出る。

途端に凍り付いていた室内の温度がにわかに緩んだのは、皮肉なものだつた。

『ならば、すぐに準備を』

それで話は決まつた。

仲買人である借金取りは、佐波の、貴族とは思えぬ地味な容姿に不満気な息を吐いたが、容姿よりもその幼さに渋々金を払つよつだつた。

どの時代にも、幼い子どもを好む性癖の金持ちはいる。

特に豊満な美女に飽いた金だけは持つ好色家などには、案外に受けがいい。

支度金として幾ばくかの手付金を貰つた母は、だがそのプライドがそれっぽっちの金を喜ぶ事を拒んだのか、つんと澄ました顔で佐波に支度を促した。

『貴方は今から、この家の子ではありません。我が一族から遊女が出てたとあらば、末代までの恥。よいですね』

母の言葉に、佐波は子女の礼儀通りに、屈んで頭を下げた。

支度の為一人、自身の部屋に戻ると、何故だか先に使用人の子であり唯一の友人である以織が部屋で待つていた。  
もちろん、普段なら使用人が家人の部屋に入るなど、有り得ていい

ことではない。

しかし状況が状況であるだけに、佐波が驚く事はなかつた。

『姫様が行かれるのですか』

どうやら、話が筒抜けだつたようだ。

きつと少年だけではなく、全ての使用人に伝わつてしまつたのだろう。

使用人には聞かせられないと、金銭に関わる事は全て家族内で話し合われていたのだったが、そんな虚勢はとっくに見破られていた。既に事情を察した幾人もの使用人が暇を申し出て家を去つていたし、佐波の記憶が確かなら、使用人であつた以織の家族もまた、数日後にはこの家を去るはずだ。

見送るはずの自分が、ここで見送られる立場になるとは。

佐波は、自分よりも幾つか年上の少年に、照れ笑いを浮かべてみせた。

『私が買われるなんて。向こうは美人じゃなくてガツカリしているようだつたけど』

請われて買われて行くのではなく、致し方なく買われて行くなんて、情けない気持ちにもなる。

けれど、そんなことを気にしていても仕方が無い。

買われる立場となつた少女よりも、更に青ざめた顔の少年の為に、

佐波は気丈に振る舞つた。

『でも、きつとどうにかなると思う。私、結構力持ちだし、逃げ足も速いし、それに、遊郭なんてちょっと面白そう』

後半は少し本音だ。

都の遊郭は、それはそれは美しい場所だと、昔館に滞在していた行人が話してくれたのを佐波は覚えていた。

遊郭つてのは、この世に存在するありとあらゆる道楽を一堂に介し、大皇都「だいこつと」に逐わす皇帝すら焦がれる、天人とも見紛う美男美女が麗しき微笑みで夜をも溶かす、まさに夜霧の向こうの黎明郷「れいめいきょう」でござあす。あつしも男に産まれたら、一生に一度はそこで美女と懇「ねんご」ろになりてえもんで。

かかと笑う行商人の言つ”懇ろ”の意味は理解出来ずとも、彼の言う”黎明郷”は幼い佐波の興味を引いた。

佐波は産まれてこの方、布津から出たことがなかつた。否、布津どころか、屋敷の周りから出されたこともない。

両親は不義の子である佐波を、周りに知らしめたくなかつたのだろう。

だから、遠方から貴族相手に行商をしてまわる人々が館に訪れるのが、佐波にとつては唯一の娯楽であつた。

出来るだけ心配させないように、無邪気にそう言つた佐波だつたが、もちろんその”黎明郷”が実際は腐臭を放つ汚泥の沼のような、恐ろしい場所だとも知つてゐる。

遊郭「そこ」に飼われた哀れな雀は、帰りとうて啼いても頬を打たれ、死にとうて啼いても頬を打たれ、蹂躪されるがまま、偽の極彩の羽を涙で濡らし、ただ骨になるまで啼き続けると申します。世にこれほど哀れな生き物がおりましようか。もしそれが業だとうならば、どのように恐ろしい行いを彼らがしてきたというのでしょうか。なんの罪があつて、あのよつに惨い仕打ちを受けるのでしょうか。

佐波が物事を自分の力で理解出来る様になつてきた頃に、館に訪れたやや身なりの良い行商人は、佐波に遊郭の話をせがまれて、哀しごとにそう語つた。

“黎明郷”とは明らかにかけ離れたその話に、当初佐波は戸惑い、“遊郭”とは一箇所あるのかと考えた程だ。

そしてその考えを正し、遊郭とはどういう場所であるのかを教えてくれたのは、他でもないこの友人の少年だった。

だから、佐波の虚勢を彼が見破らないわけがない。

それでも少年は何も言わなかつた。言えなかつたのかも知れない。

ただ、亡靈のよつたな虚ろな瞳で、佐波を眺めていた。

『…じめん、以織』

そんな少年を見ていたら、ふと泣きそうになつて、佐波は慌てて鞄を引っ張りだし衣服を詰めた。

必要なものなんて分からぬ。だから適当に荷物を詰めて、鞄を閉じ

『以織？』

鞄を持ち上げようとした佐波の手を、以織が掴んだ。

年齢の割には小柄だが、佐波よりも幾ばくか大きな手だ。

その手が震えている。震えて、佐波の手を握り、

『姫様』

いつもより低い、静かな声で、以織が言った。

『側を離れる』ことを

お許しあげたい』

## 2（後書き）

黎明郷

れいめいきょう

…桃源郷のようなものです。喜びと快樂の郷。 „夜霧の向こ

う

”という枕詞は吟遊詩人が広めたものと思われます。

文字ばかりで見難い文章。スミマセン…

ハツと顔を上げた。

遊郭街の中でも一際大きく絢爛な軒。  
その極彩色の提灯に描かれた印。

確かに、ここにくる前に確認していた。

この遊郭街では、どの軒にも屋号の看板は掲げられていない。  
代わりに、飾られた提灯に描かれた、屋号代わりの“印”を目印に、  
馴染みの店へと向かうのが常識とされている。

“めいりんあん”

どのように書くのかは知らないが、その印の形だけは、以前この遊  
郭街に訪れた事があるという年長の使用人に聞いて知っていた。

丸の中に、一羽の双頭の鶴「からす」。

多分、この軒がその“めいりんあん”なのだろうが

「お、大きい…」

思わず独白してしまつたが、この喧噪では誰の耳にも届かなかつた  
だろう。

確かに有名な老舗だとは聞いていたが、ここまで大きいとは…。

この位置では全容は見えないが、もしかしたら、佐波のお世話にな  
つている館よりも大きいかもしれない。

何処まで続くのかと不安になるような、軒下の提灯。その下の赤い  
格子の奥には、優艶な蠟燭の灯りと時折人が通るよつた影が浮かび  
上がつてゐる。

入り口すら、まだ随分先のようで  
心の板挟みにあつていた。

佐波は逸る心と、牽制する

いへり自由にしていいと言われても、三男坊がいつ“お帰り”になるとも限らないのだから、あまりいつかいつかするべきではないのだろう。それに、これっぽっちの給金では、きっとこのよだな老舗の遊郭では門前払いを食らひ「とになるだらう」とは知れている。

でも、ただ一日確認出来るだけでいい。この田で、以織が生きていると。

私が彼を諦めていないと、知つてほしい。

それでどうなる、と心の中の自分が嘲る。

約束した。必ず迎えにいくと。

けれど、あれからもう5年。

佐波が必死に生きて来た様に、以織もこの世界で、もし生きているならばきっと、多大な苦労と辛酸を嘗めてきたことだらう。

彼は、自分を恨んでいるのではないだろうか。

佐波の代わりに売られて行つたことを、後悔しているのではないか

『私が代わりに行きます』

佐波の身代わりとして名乗りを上げた以織に、佐波を含め全員が驚いた。

佐波が止める間もなく、仲買人が以織の体をじろじろと物色し、そしてにやりと下卑た笑みを浮かべた。

『そつちのお嬢ちゃんよりは、”売れそう”な顔だな。歳は』

『15』

『ふうん、細いな…。女みたいな面で、その形「なり」ならいけるだろ。よし、商談成立だ』

以織は、佐波よりも高く買われた。その金の半分は佐波の家に、もう半分は以織の家族へと渡された。

荷物を持たない少年はすぐに馬車へ連れ込まれ、どこかへと売られて行つた。

雪の降る、寒い日。

少女は何より大切な、大切にしなければならなかつた友を”身代わりに”してしまつた。

あんなに優しい友を、誠実な人を、佐波が穢した。闇に落とした。その罪深さに何度絶望しただろう。己の力のなさを嘆いただろう。けれど、どんなに嘆いても、その事実が変わる事は決して無い。だから佐波は決意した。必ず、必ず以織を迎えるに行くと。いつになるかは分からぬ。

佐波のような端女では、到底手に入れられないような大金が必要だと分かっている。

それでも、佐波は決意したのだ。

約束を、守る。

例え既に少年がこの世にいなくとも、恨まれてしようと

その

約束だけが、今の佐波を支えている。

「お客さん、こっちの軒に用かい？」

唐突に話しかけられて、咄嗟には自分に向けられた言葉とは気付かなかつた。

ようやく入り口の絢爛な灯りが見え始めた頃だつた。ぼんやりと振り向いた先には、小柄な男が一人。

衣服から見ると、どこかの軒の下男かあるいは佐波は男を警戒しつつ答えた。

「用といつほどではありませんが…。何か」

「いえね、お客さんのような人が”ここ”を田指してゐみてえに歩いてつから、少し心配になつてね。まあ、こっちの早とちつでしたら、許してくださいせえ」

「口づ、といつより一ヤリ、とした笑みを浮かべて言つ男。一見する年寄りのようにも見えるが、声は意外に若い。なんとなく身構えて、佐波はさらに問つた。

「私がここを田指すと、どうしてあなたの心配になるのでしょうか」

佐波の格好は、女と侮られない為でもあるし利便性の関係もあって、

男装と言える姿だ。

女の下働きがこのような格好をすることは、この国では珍しくない。確かに、どう見ても金を持つていそうには見えない貧相な姿だろうが、その分軒下から遊女や陰間に袖を引かれることもないから、楽と言えば楽だ。

だからこそ、なぜ今こうして見知らぬ男に声をかけられているのかが分からず、酷く不気味に思った。

佐波の言葉に、男は一ヤニヤしつつ、

「いやね、実は先日、”手引き”があつたばかりなんですよ。丁度お客さんみたいな目立たない格好でね、そつと遊郭に忍び込んで、お目当ての遊女と手と手を取り合つて逃げ出してねえ。いやあ、あれは大捕り物だった」

思い出すように顎を撫でる。

佐波は更に眉をひそめた。

「それと私と、どう関係があるのです？」

「関係というほどじゃございやせんよ。ただあつしは、ここを”監視している”端くれでしてね。一応確認をしておきたかっただけですみませんね、用心深くて」

「いえ…」

手引き、とは足抜けのことなのか。

遊郭がどうして高い塀と門に囲まれているのかは、語るべくもないだろう。

塀の向こうは深くて流れの速い川。ここを出るには、門を通る以外にない。

所詮は恋の真似事。そつと分かつていても、叶わぬ恋に身を焦がす輩は大勢いる。

中には、眞実の想いを交わし合つ仲になつた者もいる。

そうなれば、ここを出たいと願つのも当たり前のことで、もちろんそれを止める者がいる事も、至極当たり前のこと。

佐波の世界にも常識とされる撻があるよう、この遊郭の世界にも絶対の撻があるのだ。

つまり、男はここのお田付役で、佐波はその男に疑われているというわけだ。

男の視線が未だに自分に向けられているところを見ると、多分そうなのだろう。

確かに、佐波のここまで動きは慣れた者にとつては少し妙に映るかもしれない。

思い詰めた者の空氣を纏つた佐波が、何か一計を案じているのではないかと疑われるのは、むしろ当然なのかもしかなかつた。

佐波は、ため息をつきつつ頭を振つた。

「こちらこそ、疑われるような行動をとつていたならすみません。主が私たち使用人を置いて、どこかへ行つてしまつたものですから……」

「ほお。どちらかにお仕えしていらっしゃる方でしたか。道理で丁寧な物腰だ。しかしその口ぶりからすると、随分やんちゃな主さんで？」

「ええと……まあ……あ、もし、赤い羽織に黒い帯の、24、5の男が暴れていふようでしたら、私まで」一報頂けますか。主に何かあつたら私たちの首が飛びますから」

情けなく笑つて言つと、男はよつやく碎けた笑みを浮かべた。

「はは、そいつは大事だ。約束しやしょう。お姫さんも気をつけなさいな。ここいらは”外”と違つて、あつしらの目が行き届いてやすから、派手なもめ事は少ねえが、それでも何も無えとは言い切

れねえ。お客さんみてえな若い女子を鴨にしてやろうってな軒もありますからねえ。何かありやしたら、大声で叫んでくだせえ。あつしらの誰かが”正しに”向かいやすんで。”

言つなり軽やかに背を向けた男に、ふと思ひ立つて、佐波は慌てて問いかけた。

「あのー…そいついえば、一つお伺いしたい」とがあります  
「あつしにですかい?」

不思議そうに振り返つた男に、佐波は頷く。

「はい。あの、実は探している人がいて　　名前が

その時。

佐波の真後ろにあつた格子が、轟音と共に吹き飛んだ。

### 3 (後書き)

遊郭のモデルは江戸吉原ですが、異世界ファンタジー（といづり）にして（ノ）涙（ノ）なので、かなり自己流の設定になつております。どうぞ大目にみてやってください！

「…?」

「…」

危機一髪、その場を飛び退いて無事だった佐波と男だったが、田の前にバラバラと落ちる木片や、辺りに広がつていぐ混亂に、なす術も無くその場に立ち退くした。

壁に空いた穴から立上る粉塵と、そしてその穴から流れ出る甘い

”香”。

怒声、罵声、そのさらに奥から上がる女の金切り声。

どうやら内部で何かが起こっているようだが

「ルッカか…」

側で小さく呟いた男は、佐波に問う隙を『えず』にカラリと笑った。

「すみませんね。どうやらあつしらの仲間の仕出かしたことのようだ。たまにあるんで。まあ、言つた先から今回はその派手なやつみてえですがね」

言つなり、今度こそ身を翻す。

「お氣をつけ下せえ。ここにはこここの撃がありやす。素人さんが知らずに首を出したら、たちまちちよん斬られちまつような恐ろしい撃がね。どうせこの愛くだせえ。では、よい宵を」

「あ、」

男は、集まつてくる野次馬を上手く避けながら、悠々と入ごみに消えていった。

”以織”の情報を聞き出そうとしたのだけど、ビルやら機会を逃したようだ。

佐波は嘆息し、集まりだした野次馬に、ここに何かと厄介だと、とりあえずこの場を離れようと歩き出した。

「誰か！そいつ捕まえて……」

後方、壁の穴の奥から響いた女性の声に咄嗟に振り返り、そしてすぐ背後に迫っていた男に思わず 跳りを見舞った。

「えやっ

見事に腹部を直撃した佐波の蹴りに、一つ折りになつて男が地面に転がる。

周りからどよめきと歓声が上がつて、佐波はようやく自分が面倒なことに立ち会つているという実感が沸いて来た。

一通り苦悶しつつも、それでもすぐに立ち上がり逃げようとする男に、これはもう一度蹴りを叩き込んだ方がいいのかと一瞬思案した、次の瞬間。

素早く身を翻した佐波の頬を、白刃の巻き起こした風が撫でる。その鋭利な煌めきを目の端に捉えて、舌打ちした。

二人いたのか。

佐波は動きを止めずに、男が白刃を繰り出す為に伸ばした腕をすり抜け、その胸元に飛び込む。

間合いを詰められた男は一瞬鼻白んだが、すぐに手首を返して剣を横に払う様に難いだ。

？？？今！

がくん、と重心を一気に落とす。そして腕を軸にして男の足に一撃、鋭い蹴りを入れた。

ぐうっと唸つてバランスを崩した男。だが、屈強なその身体を倒すには至らない。

「…！」

今機会を逃したのは痛い。なにせこちらは丸腰。相手に刃物がある限り、どうしてもこちらが圧倒的に不利となる。

屈んだ勢いで後方へ飛び、地面の砂を一握り掘んで投げつけるが、それでも白刃の男は揺るがない。

すぐに体制を整えると、真っ直ぐ切つ先をこちらに向けて飛び込んでくる男。

この間合いでは、初太刀はどうにか避けられても二太刀目はどう考えても避けられそうにない。

ぐつと顎を下げる佐波の目は、それでも男から外れる事はなく。だから向かい来る男が、ドンッという重たい音と共に視界から消えた瞬間も目撃していた。

戸惑う暇もない。

集まっていた野次馬から悲鳴が上がり、見れば、白刃の男は群衆の方まで吹き飛ばされていた。

「…？」

何があつたのか頭で理解できず、周りの状況を確認しようと視線を動かし

「さやつ！？」

目の前にすつと差し出された巨大な手に、佐波は間抜けな悲鳴を上げた。

「あ、ごめんね。ルッカ、あんた怖がられてるじゃない」

巨大な手の向こうから、ひょいと黒髪の女性が顔を出す。  
訛りのきつい皇国語。

この国の妙齡の女性には珍しく、髪を頸に添つくらいの長さで揃え、前髪は短めだ。

少女のようなあどけない表情をしているが、キリッとした目元に彼女の聰明さが現れている。

彼女がフォローを入れてくれてようやく、佐波は手の主の姿を視界に捉えた。

というか、視界がこれは”人”だと認識した。

だが。

？？？に、人間…？

男の身の丈は、遊郭の軒一階部分程の高さがあつた。  
体格はそれに似合つて逞しく、恐らく実践で鍛え抜かれたであろう見事な筋肉をしている。

滅多に見ない大男なのは間違いないが、しかし男の特徴はそれだけではない。

男は頭部から肩まで、不思議な模様の入った白い布を被っていた。目のところだけは辛うじて見える様になつてゐるが、それ以外の部分は徹底的に隠され、ただでさえ威圧感のある外觀に淒みを加えている。

唚然として見上げる佐波の視線にも頓着した様子も無く、彼はただじつと、半分尻餅をついていた佐波に手を差し伸べていた。

「？？？どうやら、彼女達が助けてくれたらしい。

だが、そもそもこれはなんの騒ぎなのだろうか？

佐波は内心ドキドキしながらも、男の差し出している手を有り難く掴み、立ち上がった。

「あの、ありがとうございました。助かりました」

「イーのイーの。といふか私たちの方がオ礼を言わなきゃなんだから。オ陰でしつぽは掴んだわ」

「しつぽ？」

「こつちの話。ともかく、オ手柄ね。もしかしてどいかの用心棒さんだつたりするの？」

「え、いや…ただの使用人です」

「勿体なイわねー。あ、それともわざと隠してゐるの？オ忍び？」

「い、いいえ！本当に一介の使用人です。それに言われる程強くはありませんし」

佐波の世話になつてゐる屋敷は、仕事の内容で給金が格段に変わる。

端女と住み込みの用心棒とではだいたい三倍くらいの差が出るのだ。佐波はどうしても金が入り用だったこともあり、空いている僅かな時間で独学し、時間を持て余している気の良い用心棒に相手をしてもらつて、どうにか多少の武術の心得を得るようになつた。そして世の中には学問に秀でた頭を持つ者がいるように、佐波の体は武術に向いていた。

これは貴族の子女として生きていては決して見出されなかつただろう能力であるから、開発された時の複雑な心境といつたらなかつた。今までは給金の為にと、ただそれだけの為に鍛錬をしてきたが、こうした状況に置かれてみると、あの頃体中に痣と傷を作り、地を這いながらでも学んでおいてよかつたと本氣で思う。

それはともかく、佐波としては一刻も早くここを離れたい心境だつた。

大男が吹つ飛ばした白刃の男と、これまたいつの間にか昏倒していだ佐波が蹴り飛ばした男は、他の男達に縛り上げられ、どこかへ運ばれて行つた。

色々気になることはあるとしても、ここは佐波の世界ではない。

佐波には知らない事情があり、常識がある。

先ほどの小柄な男が言つた様に、素人が首を突つ込んでは怪我でまないだろう。

佐波は、一先ず大男と女性に頭を下げ、

「では私はこれで」

「え、もう行くの？才茶くらイイけそつするわよ。ルッカが」

「……」

大男がもの言いたげな空氣を発したのでビクリとしたが、結局彼は何も言わず、ただ渋る女性をひょいと肩に担ぎ上げた。

「あ、ちょっと…全く、あんたは力加減をしらなインだから。ビリツ  
すンのよこんなに壊しちやつて。また才給料減るわよ！しかもなぜ  
か私の…」

「ビリやら、彼女達は一人で一組のようだ。

語彙は豊富のようだが不思議な訛りの皇国語を繰る女性と、”ルツ  
カ”と呼ばれる大男。

？？？皇国「このへに」の生まれではないのか…

と、そんなことを考えながらそのやりとりを眺めていると、大男の  
肩に乗つた女性が、佐波を見下ろして言つた。

「「」めんなさイね。色々迷惑かけちやつて。貴方が女用心棒だつた  
ら、ここで雇いたいくらいなんだけど、ビリやらそれも出来ないみ  
たイだし…。惜しいなあ」

「ええつと、すみません…」

思わず謝つた佐波に、女性は可笑しそうに笑つた。

「謝る事じやないわ。そうね、まあでも、多分またすぐに会えるわ  
ね。そんな気がする」

そんな物騒な予言しないで欲しい。と本氣で思つた佐波だったが、  
とりあえず頷いた。

「まだどこかで」

それを別れの挨拶代わりに口にし ふと、今度も危うく忘れそ  
うになつた質問を思い出した。

「あの、そういえば私、人を捜してるんです」

「人？あなたの主？」

「いえ、あ、それも一応目をつけとかなきゃいけないんですが、私の探し人はまた別にいて……」

ようやく佐波がそれを口にしようとした時、開いた壁の中が俄に騒がしくなった。

「おい！誰か手を貸せ！遊女が……！」

壁の穴から顔を出した下男風の男が叫び、それにいち早く動いたのは、大男の肩から飛びおりた女性だった。

「どうしたの！？」

「サツキか！遊女が敬麻？「けいましん」を飲みやがった！今吐き出させてるが、意識がねえ！」

敬麻？とは猛毒だ。敬麻「けいま」と呼ばれる薬草の葉は病に効くが、？「しん」と呼ばれる根には猛毒がある。何処にでも自生しているワケではないが、栽培は比較的簡単なので、近頃では軒先で育てる家庭も増えているという。その毒を自ら飲んだというのは一体？

「つー手引きか！」

険しい声で女性が短く叫ぶ。

その言葉で、大体の事情は察せられた。

先ほど大男？？？ルツカに成敗された男達を手引きし、この遊郭に忍び込ませた者が、内部にいたということか。

確かに武器になるようなものは一切携帯できぬよう、関所で厳しく検査されるはずであるのに、男は一振りの刀を持っていた。内部の手引きでもないかぎり不可能なことだろ？  
だがそれが遊女となると

「客は？」

「東棟に避難させてる。遊女も…だが、」「うなぢやあ…」

「…仕方ない。番台はなんて？」

「とりあえず総主の指示を仰ぐと」

「ふん、まあ、妥当ね」

女性は佐波と話していた時とは打って変わった剣呑な雰囲気を放ちながら、男にテキパキと指示を出した。

「その遊女の交友を辿つて。中で何か洩らしてるかもしねない。男二人は生け捕つてるけど、情報は多方面からあつたほうがいい。それと当面の間、館内の東と西の行き来を断絶させるよう、番台から総主に進言させて」

「うげえ！ そういう心臓に悪い役を押し付けんなよなあ

「文句言わなイ！ ほらルッカも、行くわよ！」

女性の呼びかけに、大男は素直に付き従つ。

もしかしてこの女性、ここでは結構な肩書きがあるのかもしない。

ぽかんとその様子を見ていた佐波に、一旦は壁の向こうに消えた女性が再び顔を出して、笑顔で手を振つた。

「『めんね煩くて。楽しんで行ってね』」

それきり、女性は辺りの喧噪まで引き連れて颯爽と消えて行った。残されたのは遅れて騒ぎを聞きつけた野次馬が少しど、展開に取り残された佐波のみ。

”めいろうあん”の壁に空いた穴とその中で慌ただしく揺れ動く影を少しの間眺めた佐波は、やがて嘆息すると、ぐるりと踵を返した。

この様子では、金の有る無しに関わらず、”めいろうあん”の中にに入る事とも、ましてや内部を探ることなど到底出来ないだろう。変に動いて、今の主に迷惑がかかるようなことがあれば、切り捨てられても仕方が無い身の上だ。

再びこのような機会が佐波のよつな使用人に巡つてくるとは思えないが、それでも、今回は口が悪過ぎたよつだ。

せめて。

人垣をすり抜けて、来た道を戻る佐波の胸に、じんわりと寂寥が滲む。

せめて、無事だけでも、知りたかった。

脳裏に浮かんだいつかの友の姿に、やるせない気持ちだけを抱いて、佐波はただ俯いて歩いた。

「おーー！佐波！」

”めいりうつあん”の灯りがよつやく見えなくなつた頃。

自分に近寄つてくる男の存在に気付いて、佐波は立ち止つた。

「あ、霈[ひさめ]さん。」

「”あ”じゃねえよ。お前今までどこにいたんだ？まさか本氣で男でも”買い”に行つたのか？」

愛嬌のあるヒゲ面の長身のこの男は、佐波と同じ主に雇われている用心棒だ。

佐波が三男坊のお付きに手を挙げた時に”仕方なく”付き合つてくれた、気の良い男もある。

佐波は陰鬱な気持ちを振り払つて笑つた。

「残念ながら持ち合わせが足りなくて。霈さんは？」

「おー、お前と同じだ。やっぱり皇都は違うな！女の値段が一桁違つぜ。」

佐波たちのいる布津は、皇都からすればかなり田舎だ。

隣国と接しているお陰で、貿易や交易は盛んだが、良いものは全て皇都に流れてしまう。

佐波の仕える家も、皇都との貿易を主な収入源としていた。全ての資源を他州からの貿易で賄つてはいるだけあって、皇都の物価

の高さは恐ろしい程だ。

佐波たちのような田舎豪族の使用人くらいの給金では、一星期【一週間】の滞在だってままならない。

だから尚更、佐波にとつてこのような機会は滅多に訪れない好機だつたのだが：

佐波の顔に暗い影が過つたのに気付いたのか、男は励ます様に大きく笑つた。

「まあ気にするな。なんなら俺が相手になるぜ。まあ、俺も安くはねえがな。」

「奥さんに言いつけますよ。」

「うあ！言つなよお前！ここに来たこともだぞ！？」

「やましい事ないんだつたら良いじゃないですか。」

「夫婦の間にや、常に”誤解”といつも深くて長い川が流れてるつて言うだろ？」

「それは霈さんが疑われるようなことを口頃からしてるから。」

「だつて男だもの～！」

歌う様に叫んで、霈は笑いながら佐波の肩を豪快に叩いた。

い、痛い…

でも霈の気遣いが嬉しくて、佐波も思わず笑つてしまつた。それにしても。

「ところで、来栖「くるす」様はどういへん？」

主である三野の名を出すと、途端に霈の顔が曇つた。

「俺たちも探してゐるんだ。いくらなんでも、帰る時は一緒にない

と樋藍「ひらん」様に怪しまれるだらうしな。」

樋藍とは長兄の名だ。もの静かだが少々度が過ぎる堅物で、弟とは別の意味で扱い難い。

今日も奔放な弟に誘われていたのだが、断固として拒否していた。まあ、弟からしてみても、遊郭でまで兄の監視下にはいたくないだろうから、誘つたのもただの社交辞令だらう。

佐波たち使用人に弟の監視を厳命したのも長兄である樋藍だ。もし目を離したと知れたら、切り捨てられるか、それとも王都に捨て置かれるか。

とにかく使用人に明るい未来はない。

「でも確か、異芽「こうが」さんが後を付けてませんでした？」

関所で散り散りになつた使用人たちだが、それでもさすがに誰も主に目をつけていなかつたとあつては、本当に首を刎ねられかない。

使用者が散り散りに遊郭に消えて行くのを横目に、ため息をつきながらではあつたが、年長者であり一番の実力者でもある異芽が、何も言わずに三男の後を付けて行つたのを佐波は見ていた。だから今まで、真剣に三男の行方を探していなかつたのだが…

佐波の言葉に、霧の表情が”仕事”に切り替わる。

「それなんだが、どうもきな臭え。あの馬鹿三男坊はともかくとして、異芽とも渡りがつかねえ。あいつがそんな無謀をするようには思えないんだがな。」

「異芽さんとも？それは…嫌な感じですね。」

「だろ？で、さすがにそろそろ怪しいなと思いつめてたら、お前を見つけたってわけだ。」

霧はそつまつて、鋭い視線を辺りに向け、急に声を潜めた。

「 ついでに、お前、気付いてたか？」

「 え？」

「 つけられてるわ、お前。」

「 う」

慌てて振り返りうとした佐波を、霧がまるでからかうような仕草で髪の毛をぐしゃぐしゃにする、という動作で止めた。

「 気付いた事を、相手にまで気付かせる」たあねえぞ。」

「 は、い。」

「 よし。心当たりは。」

「 ……」に来るまでの間に、遊郭の監視役の男に目をつけられたようでした。

「 ふうん。それにしちゃあ、数が多いな。お前、何したんだ？」

「 な、何って、」

何も と言おうとして、ふと先ほどの騒動のことを思い出した。

遊女が客を手引きして、”何事”かを起こした。

その現場に偶々居合わせた、ただそれだけのことだが……

…いや…もしかして、あの一人の男以外にも仲間がいたのか？  
まあ確かに結果的に男達の逃走を阻止したことになるのだけど、まさか恨まれていたり…？

考えて、否、と頭を振る。

自分なら、とりあえず逃げる。仲間は心配だが、…に頭ではすぐ  
に足がつく。

無情だといわれても自分の身が先決だ。

だが、もし男達の組織が、佐波が考へてゐるよりもっと大きければ？

「」の失態を、雇い主に知られてはいけないとすれば？

自分のような一介の使用人でも、危険視されたり…するのだろうか？

黙り込んだ佐波に、靄はふーっと息を抜き、

「…まあいい。お前、俺の前を歩け。相手が誰であれ、こんな大通りじゃ手を出してはこれないだろう。まずは他の使用人を捜して、三男坊が見つかり次第、帰る。相手が渋ろうが”最中”だろうが知つた事か。俺たちの雇い主は三男じゃねえんだからな。」

言つなり、佐波の肩を掴み、ぐるりと回転させた。  
どうやら進めと言つてゐるようだが、佐波はぎょっとした。

「えつ…」うちに向かうんですか！？」

「そーだよ。俺があつちから順に探して來てるんだから、当たり前だろうが。それともお前、向こうの端から確認してきたのか？」

「…いえ。」

「なら行くしかねえだらう。確かに先は”渾樓庵”めいろうあん””があるんだつたな。まさかそこじやあねえだらうが…」  
「め、めいろうあん…」

またあそこまで戻るのか？

先ほどまでの喧噪を思い出してゲンナリしつつ、けれど、さすがにもうそれも収まつただらうという思う事にし、仕方なしに歩き始めた佐波の後ろから、靄の足音が続く。

辺りを気にしつつ、佐波は小声で問いかけた。

「…なんで”めいろうあん”じゃないって思つんですか？老舗で有名な遊郭だつて聞いてますよ。」

「だからだつて。いくら豪族の息子でも、所詮は田舎の商家の三男坊。皇帝も自ら足を運ばなきや会えない高級大夫「だゆう」がいる皇都随一の遊郭じや、下女一人買えねえよ。」

「皇都、一？」

「ああ。ちなみに済楼庵じやあ、両方買えるんだと。知つてたか？」

「両方？」

「女も男もつてことだよ。」

「ああ、それなら…」

”以織”がそこにいるという噂を聞いた時に知つた。

”めいろうあん”は東館と西館に分かれていて、東館では遊女を、西館では男娼が買えるのだと。

ふと友の顔が過つて、暗い気持ちになつた。

以織は、本当に”めいろうあん”にいるのだろうか。

もしいるならば、西館で、男娼として買われているのだ。

”必ず、私を迎えて下さると、約束して頂けますか。”

以織は、まだあの約束を信じてくれているだろうか。

信じてくれていたとして、未だ以織を迎えて行けるだけの甲斐性を持ち合わせていない自分に、失望してしまわないだろうか。

まだ会えるとも決まっていないのに、気持ちばかりが先走り、さらにな鬱々とした気持ちになる。

いけない。今はこんなこと考へても仕方が無いのに。

どつにか思考を”仕事”に引き戻そつと、佐波はぐつと体に力を入れ

れ

「…あ、れ？」

「どうした。」

「なんか…この匂い

」

ハツとした。

風向きと街中に漂う香の所為で気付くのが遅れたが、この焦げ臭さ。間違いない！

「火事です！」

「何い！？本当かよ！どつかでたき火でもしてるんじゃねえのか！？」

「たき火の匂いじゃないです…」の先から

「

視界にはまだ火の手は無い。だが、この先の軒が燃えているのは確かだ。

ざわり、と波が押し寄せるような人々のざわめきが広がる。

皆気付き始めた。“異変”に。

「おいつ 火事みたいだぞ！あっちの軒じゃ皆出払つて火消に追わ  
れてる！こっちにも来るんじゃないか！？」

「そりや最悪だ！こんな木造、すぐに燃え広がるぞ…」

「本当か！？どこが燃えてるんだ！」

「渕楼庵だ！渕楼庵の西館から火が

」

逃げる様に散つて行く人々の情報を脳内にかき集めていた佐波は、

脳天に雷がおちるような衝撃を受けた。

”めいりつあん”の、西館…！

「以織…！」

思わず声に出していたことにすら気付かず、佐波は駆け出していた。

「あ、おいつーおまつーちょつー…ええいくそー行きやいいんだろ行きやあ…！」

付けられていく身の上だというのに、勝手に一人で走り出した佐波を、言いたい事は山ほどある霈が頭を抱えつつも追いかける。

何にしても、三男坊むこの向ひへだ。

妙なことに巻き込まれてなければいいが

こいつの時の予感だけは当たるものだと、30数年生きてきて知らない訳がない。

背後から追つてくる幾つかの気配を感じつつ、霈は己の宿命を呪いながら走った。

## 5 (後書き)

ついやく少しづつ話が動き始めました。

「火事だ！」

「鎮火砂を運べ！」

「火に回られるぞ！早く逃げろ！」

溟樓庵に近づくにつれてキツくなる物が焦げる匂いと、人々が逃げ惑う喧囂。

それらを搔く様にして、佐波は走っていた。

以織、以織！

心の中には、友の姿しか浮かばない。

もし溟樓庵の西館にまだ取り残されていたらと思うと、居ても立つてもいられなかつた。

守らなきや、私が、今度は…今度こそ、私が！

体裁も、三男坊のことも、身分さえ今の佐波には関係ない。ただ心配だった。不安で、消えそうだった。

佐波が今ここに生きているのは、友との約束があつたからだ。それがもし無くなつてしまつたら。

無くなつて、しまつたら。

本当は気付いていた。

これは以織の為じやない。

以織への罪悪感をどうにかして消したいが故の、愚かな自己満足だ。でも、そうでもしなければ、生きて行けなかつた。

一番の友を、家族よりも愛した人を身代わりにした自分を、どうして許す事ができるだろう。

佐波が自分にそれでも生きる事を許したのは、優しい以織が最後に言つた、あの優しい約束があつたからだ。

側から居なくなつても、まだ彼の幻影に支えられている。その事実に打ちのめされる。

だから。だから。

佐波は、人ごみをかき分け、やがて視界に炎の切れ端を捉えた。

”めいろうあん”の西館！

既に幾人もの火消が屋根を伝い、大きな槌で燃え盛る炎と戦つている。

下からは流れ作業で鎮火砂を火元に投げ込み、遊女や陰間達を避難させる為の下男達が必死に立ち回っていた。

その中に知つた顔を見つけて、佐波は躊躇わず駆け寄つた。

「あのー」

「うるさいー今取り込ンでンのよー！」

「あのーーー」

「もう何、よーー？あれ、あなたーーー」

鬼のような形相で振り返つた女性は、あの時の黒髪の女性

サ

ツキで。

驚く彼女に、佐波は負けないくらい鬼気迫つた顔で、叫んだ。

「これで全部ですか！？」

「な、なに！？」

「これで、全員ですか！？」

館から逃げ出た彼らを、下男達が素早く誘導していくのを指差しながら問うと、女性は怪訝な顔をしながらも答えてくれた。

「イイえ！まだ中にいるわ！火の回りが早イの！奥の方は

助からないかもしね、そう唇を動かしたサツキの瞳が陰る。

以織。

焼け出された遊女や男娼、野次馬の中に友の姿を探す。

誰もが逃げ惑うこの喧騒の中では、一人一人の顔を判別することなど不可能だ。

もし、ここに居ないのなら…。

ぐつと顎を引いて、黒煙と炎の上がる遊郭を見据える。

火の粉が宵の闇に舞い上がり、恐ろしくも幻想的なままで美しいその姿は、夜に羽撃「はばた」く巨大な蝶の様であった。

以織。

佐波の心臓が大きく鳴った。

「え、ちょっと…あなた！？」

サツキが静止するのも待たずに、佐波は消火用にあつた水桶をそのまま被り、袖を破いて口と鼻に巻き付ける。

そして周りの静止を一切無視して、煙の充満する館の中へと飛び込んだ。

熱風に皮膚を嬲られ、煙にやられた目から涙が溢れる。

奥から逃げてくる人々に押し戻されそうになりながらも、佐波は一人奥へと進んだ。

以織：！

脳裏に友の姿を描く。

以織は色が白く、線の細い少年だった。

黒髪は女の佐波よりずっと艶やかで、長い睫毛に縁取られた濡れたような黒い瞳は、いつも真っ直ぐに佐波を見つめてくれた。

周りの大人は不思議と彼の容姿に気を止めていないようだったが、佐波は彼ほど美しい人を見た事が無い。

それはあれから5年経つた今でも。

5年。 5年間。

最後にその姿を見たとき、彼は15歳だった。でも今は、二十歳の青年になつているはずだ。

あのまま成長しているなら、きっと美しい青年になつていることだろつ。

ここ何年もまともに鏡を見ず、髪は適当に結べる長さに切り、剣ダゴと輝「あかぎれ」だらけの固い手のひらをもつ自分とはかけ離れた姿。

それを慘めと思う気持ちは、とうに捨てた。

もし彼を見つけ出し、いつか身請けできるほどの金が貯まつたら、自分の全てをかけて彼を自由にすると決めている。

その為の犠牲ならば、どんなものでも差し出してみせぬ。

下男に肩を担がれながら、幾人もの男娼とみられる若い男たちが運ばれて行く。

その顔を逐一確認しながら、佐波は頭の中に描いた二十歳の以織を探し求めていた。

どの男も美しいが、煤で汚れぐつたりした様子の彼らの中には、佐波の知る友の姿はないように思えた。

以織、無事でいて……！

佐波は、口元を布で覆つても尚息苦しい煙の中を、もがく様にして進む。

あまりの苦しさに立ち止まると、肺がゼイゼイと嫌な音をたてた。立ちこめる煙の向こうに、赤い火種がちらちらと燃えているのが見える。

どこかで柱が崩れたのか、轟音が響き、天井から木片が飛び散つてきた。

入った事も無い炎上中の建物に、居るかどうかもわからない人間を捜す為に入るだなんて、醉狂の極みだ。

それでも探さずにはいられないのだから、もしかしたら自分はこの5年で狂つてしまつたのかもしれない。

自嘲の笑みを布の下で浮かべながら、佐波はそろそろすれ違う人も居なくなつた廊下で息を整えると、

「誰かいないか……！」

「ううううと燃え盛る火の音に消されないように、一声大きく叫ぶ。叫びながら襖を開け、中に入る姿がないか確認しながら進む。

「誰かいないか！！」

喉が焼ける様に痛い。息を吸い込むと煙で咽せてしまう。これより奥に行けば引き返せないかもしないといつといつまで来て、佐波はようやく足を止めた。

ゼイゼイと荒く息をつく。流れる額の汗を拭つたら、べつと黒い煤がついていた。

……潮時か。

頭ではここまでだと分かっているのに、心の中の自分が引き返そうとしている自分を口汚く罵つている。

もしこの先に以織がいたら。もし助けを求めていたら。もし。

考えすぎて、頭が割れそうだった。

やり場の無い感情が弱つていて、心を強く叩いて、涙が出て来る。

ダメだ。これ以上は進めない。でも、引き返すことも出来ない。もう、どうしたらしいのか分からん……！

脆くなつた心が瓦解する寸前。

どこからか、子猫の鳴き声が聞こえた。

それはか細い、ともすれば聞き逃してしまってもおかしくないほどの小さな音。  
だが佐波の耳には、確かに聴こえたのだ。

…猫？

壊れかけた意識をもう一度積み上げる。

痛む頭を抑えて耳に意識を集中すると、また聴こえてきた。

子猫のよつな、甘い鳴き声。　呟、悲鳴だ！

「だつ、誰か…！」

いるのか、と叫ぼうとして咽せる。

煙が充満して来て、もう声を上げる事は不可能のよつだた。

佐波はしゃがみ込み、煙が少ない床付近を這つ様にして声の主を探す。

一つ田の襖を開けたところで、もう一度か細い悲鳴が上がって、佐波はようやくその声が廊下の少し奥、崩れた柱の辺りから上がっていることを知った。

慌てて這つて行くと、壊れた柱の下から男の手がだらりと伸びているのが見えた。

逃げる途中で柱の下敷きになつたのだろう。

もしや以織では、と一瞬で青ざめた佐波は、懸命に立ち上がると柱を必死で持ち上げた。

その途端、悲鳴が大きくなる。

ハツとして見ると、柱の下に、小さな少年が身を縮めていた。

質の良さそうな着物を来てているが、その幼すぎる姿からして男娼で

はないだろう。

禿「かむろ」か。

遊郭には遊女や男娼、下男下女の他に、いすれはお座敷に上がる幼い美童たちがいると聞いた事がある。

彼らは”姐や”、“兄や”の小間使いとして働いていふところ、恐らくこの少年もそうなのだろう。

佐波は持ち上げた柱を苦労して脇に退かすと、まず少年を引っ張り上げる様にして抱えた。

震えながらしがみついてきたその小さな身体に労りの言葉をかけたかつたが、すっかり煙でやられてしまつた喉からは掠れた息しか出てこない。

変わりに小さな背中を何度も撫で、佐波の首に手を回してしがみつく少年の頭に頬擦りをする。

そして煙の届かない床に彼をそつと下ろすと、涙で濡れた少年の目を見つめて「待つて」と目で合図をした。

年齢よりも賢いのか、少年は佐波の意図を解して泣きながら小さく頷いたが、その手はしっかりと佐波の服の裾を掴んで離そうとい。

仕方なく、そのまま身を低くして瓦礫の下にあつた男の手の脈を確認する。

…途絶えている。

男の腕より先は瓦礫にすっかり埋まつてしまつていて、掘り出すことは困難に思えた。

もしこれが以織だったら、と背筋が寒くなつたが、男の手に古い刀傷を見つけてその可能性の薄さに気付く。よく見れば、鍛えられた浅黒い腕だ。

男娼のものには思えない。

かといって下男の腕にしては逞しそうである。

用心棒の誰かだろうか、と検討を付けていた佐波の袖を、少年が引いた。

そつだ、早くここから出なくては。

埋まつている男には悪いが、自分は生きてこの少年を外に連れ出さなければならぬ。

頭の端にちらりと浮かんだ”以織”の文字を振り切る様に、佐波は震えながら再度しがみついて来た少年を前に抱え、破いた袖で彼の鼻と口を塞ぐと、ぎゅっと抱きしめる。

苦しいだらつけど、我慢して。

めきめきと音を立てて崩れよつとしている廊下を、佐波は引き返す為に猛然と走り出した。

## 6 (後書き)

サツキは『イ』『オ』『ン』の発音が苦手です。  
彼女の故郷は次回で明らかに…？

佐波が濛々「もつもう」と立ちこめる煙の中から脱出しそうやく建物の外に飛び出したその瞬間。

地面が揺れるほどいの轟音と共に、建物が拉「ひしゃ」げるよつて崩れ落ちた。

爆熱風と飛び散る破片に背中を強打され、悲鳴を上げる間もなく少し離れた地面まで吹き飛ばされる。

それでも意識が残っていたのか幸いして、腕の中の少年を守る為に辛うじて受け身を取れたが、地面に転がるようにして倒れ込むと、背中に感じる激痛に意識が飛んだ。

「おい、大丈夫か!? 誰か手を貸してくれー!」

アーティスト名

担架た！怪我人かしるぞ！」

地面に倒れる佐波の姿に気付いた人々が駆け寄つてくる。顔に冷たい水をかけられ、気が遠のいていた佐波の意識を浮上させ

た。

「…つあ…つ」

「あんた、生きてるか!? 今運んでやるからな……ん?」

男は、あまりの激痛に悶える少女の腕の中に抱え込まれたままの少

年の姿を見つけて、仰天したように叫んだ。

「真灯〔まほ〕じゃねえか！なんで！」

その大声に、腕の中の少年は糸が切れた様に泣き出した。自分を抱えたまま倒れている少女の胸に縋り付き泣きじゃくる。まるで母を亡くした子どものよつたその光景に、事情を知らずに見ていた野次馬は涙を誘われた。

「どうしたの！？」

このクソ忙しい時に一つ箇所に固まっている群衆に苛ついた女性 サツキが、殴り込む様に輪の中心に入つてくる。そしてその中心が先ほど自分の制止を聞かずに建物に入つて行った少女だと気付くと、周りに鋭く解散を叫びながらも、少女の側にしやがんだ。

「良かった、生きてたのね！あら、でも死にかけてる？」

「おおおいー女はともかく……！」

男に促されて、サツキはそのキリッとした目を泣きじゃくる少年に向け、やはり仰天したように叫んだ。

「ま、真灯！えつ でも、そんなはずは……！真っ先に助けが向かつたはずよ！」

「わからねえが、生きて助かったのは間違いねえ……。総主は？」  
「今は臥龍城〔がりゅうじょう〕に上がられてくるわ。耶灯〔かぼ〕も一緒にはず……。でも分からなイわ。真灯がここにいるぐらいだもの……確認して！」

「お、おうー！」

鋭く命令を下したサツキは、次いで泣きじゃくる少年に声をかけた。

「真灯、真灯、ここは危険よ。早く総主の元に行かなくちゃ。」

優しく言つても、少年は頑「かたくな」にこの場から離れようがない。

いつそ氣絶させて運ぼうかとも思つたが、今すぐに命の危機を感じているわけでもない以上、さすがに今後のことを考えて行動を慎んだ。

それにしても、こんなに感情を爆発させている少年をみるのは、これが初めてだ。

いつもお人形のように、その無機質なまでの美しさでただ飾られた少年。

子どもらしく泣く事もなれば、心から笑っている姿を見た事も無い。

きっとこの火事に相当のショックを受けているのだ

そう思い、もう一度優しく諭そとしたサツキより早く、血と煤と泥で黒く染まつた腕を持ち上げて、倒れたままの少女が胸の上にあら少年の頭を撫でた。

大丈夫。大丈夫。怖くない。怖くない。

佐波の意識は混沌としており、その瞳はもう何も映していない。それでも泣き続ける少年の頭を撫でたのは、母性という本能によるものだ。

サツキはその光景にぐっと喉を詰まらせた。

いけない、泣くところだった…！

泣いてる場合じゃないのに！と思ひながらもやつぱり泣きつつ、サツキは佐波の靈んだ意識に呼びかけた。

「大丈夫よ。あなたも絶対助ける。でも今は少し堪えてちょうどいね。」

佐波に頭を撫でられて少し落ち着いたのか、泣きつかれて脱力している少年を後ろから抱え上げると、サツキは自分の相棒を呼んだ。

「ルツカ！ルツカ、イる…？」

未だ砂埃と火の粉が舞っている道上から、大きな影がのそりと動くのが分かつた。

彼はその巨体を活かして、先陣を切つて鎮火活動に貢献していたのだ。

サツキに呼ばれた大男は、煤に汚れ、もう白とは呼べなくなつた布を頭から被つた姿で現れると、言葉も無く彼女を見下ろす。いつものように「汚れたんだし鬱陶しいからその布取つたら？」とでも軽口を叩きたいところだが、今はそれどころではない。

サツキは腕の中の少年をルツカに差し出して、

「大至急、真灯を臥龍城に運んで。総主には後で直接報告するわ。」

大男は一つ頷くと、軽く少年を腕に抱え、存外な素早さで未だ騒然としている大通りに消えて行く。

あの巨体で気配を忍ばせるのが得意だというのだから不思議だ。

サツキはその背を見送つてから、ぐつたりした佐波の姿を確認する。

煤で汚れて判別し難いが、恐らく火傷も一箇所や二箇所じゃ済まない。  
もしかして、と思い、そつと背中側に回ったサツキは思わず息をのんだ。

真っ先に目に飛び込んで来たのは、背中…肩の辺りに刺さった木片。深さの程も分からないそれは、下手に動かすと命を落としかねないだろう。

焼かれた背は、衣服がボロのようになじりついているだけの半裸で、血と煤で汚れて赤黒く変色し、全面に血が滲んでいる。

一見しただけで重傷とわかるその傷に、サツキは焦りを抱いた。

移動は無理ね…。ここで措置をするしかない…！

それでも助かるかは五分だ。

ここで助かっても後日感染症を発症する可能性を考えれば、生存率は三割を切る。

遊郭界隈の医者は全て集められているが、それでもまだ人の手が足りない状況を考えると、どう考えても自分で措置するのが一番早そうだ。

サツキは盛大に舌打ちすると、それでも受け止めきれない現実を呪うように、火の粉の舞う夜空に向かって吠えた。

『なんだって私、こんなサバイバルな異世界に飛ばされちゃったわけ！？』

早口で捲し立てたその言葉は酷く滑らかだったが、この皇国に

否、この世界に、その言語を理解出来る人間はほぼ存在しないのであつた。

「『溟樓庵』が火事だと……！？」

その頃、大皇都の中央宮・東塔の一室にて、早馬の知らせを受けた壯年の男がいた。

綺麗に整えられた灰色の髪と髭を持ち、やはり相応に威厳のある召物に身を纏つた男の、常ならぬ愕然とした様子に、早馬の使者は息を切らしながらも「は！」と短く答える。

「西館より火の手が上がり、乾いた風に煽られて炎上した模様です。あの勢いですと、恐らく東館も全焼でしょう。」

灯油「あかりゆ」を大量に使う遊郭街は火の回りが断然に早い。歴史上、かつて栄えた遊郭街が客の倒した行灯一つで消炭になったのも、一度や一度のことではないのだ。

「…何が原因だ。」

壯年の男の低い問いに、使者が肩を震わせた。

「…未だ不明です。ですが、火事の前に刃物を持った男が渕楼庵に押し入ったとの情報が。」

「刃物を持った男だと…！？」

「遊女の手引きがあつたようです。」

壯年の男は、冷や汗の浮かぶ額をぐつと手のひらで押さえた。

まさか…もしそうなら…どこから洩れた…！？

男はしばし苛立つたように窓の外 濱楼庵のある方角を見据えていたが、やがて重苦しく息をついた。

「…すぐに、皇帝閣下に謁見を申し込め。私が 左相「さそつ」が大至急お耳に入れたい事がある、と。」

「はつ…」

察しのいい使者は、直ぐさま部屋から出て行く。  
しん、と静まり返った部屋が、妙に白々しく感じるのは、身の内にある焦り故だろうか。

来るべき時にはまだ早い。だが、もし”そう”だとしたら…

男は眉間に深い皺を刻んだまま、苦渋の表情で謁見の支度にかかりた。



身体が、熱い。

まるで久遠の劫火「ごうか」に身を焼かれているようだ。  
過敏になりすぎた神経に巻き付いた茨「いばら」の蔓が、佐波の痛  
覚を限界まで痛めつけている。

もえ、る。

肉が、神経が、骨が、生きたまま焼かれて逝く。

いつそ身体を捨てて天津国「あまつぐに」に旅立てば楽になれるだ  
うつに。

身体の芯まで食いつきうつとする激痛から逃れようと身を捻つた佐  
波の身体を？？？

何者かの手がそっと宥めた。

…だ、れ…？

汗と苦痛の涙に濡れた佐波の頬を、冷たい何かがそっと触れる。  
何度も何度も、まるで大切な陶器を扱うような慎重さで、頬を、額  
を滑るその感触に、痛みが一瞬緩和した。

ほう、と熱い息を吐いて、僅かに身体の力を抜く。  
すると今度は頬に、ぽた、と雫が落ち滑り落ちた。

水…？

うつすらと目を開ける。薄い幕で覆われた滲んだ世界。  
薄い闇の中で、衣擦れの音がした。

姫様：

耳に涼やかな風が触れる。心の一一番奥まで染み渡る、柔らかな吐息。

姫様：

ああ。

ああ。

心が震える。

この時を、何度も夢に見ただろう。

再び霞み始めた意識を必死に保たせて、佐波は焼かれた喉を押し広げた。

「い、おり…」

以織。以織。以織。

心のうちに何度も呼ぶ。

指の一本も動かせない今の状態では、抱きついて喜ぶ事も、膝をついて謝ることも出来ない。

でも、確かに、以織がここにいる。

姫様：

もう一度、耳に吐息が落ちる。泣きそつた、哀しそつた声。

ああ、泣かないで、以織。泣かないで。

昔、まだ佐波が貴族の子女で、以織が使用人の子であつた頃。他の兄弟に苛められて物置で一人泣いていた佐波を、以織だけが探してくれた。

声を殺して泣く佐波を優しく抱きとめ「姫様、私があります」と安心させるように囁いてくれた彼に、その言葉に、どれほど救われてきたか。

母にも父にも兄弟にも、使用人にも相手にされなかつた佐波を、彼は一人で支えてくれた。

そしてそれは、最後の時まで

「いおり」

不思議と、痛みはもう気にならない。

その代わりに襲いくる、抗い難い睡魔に最後まで抵抗しながら、佐波は乾いた喉を少しでも潤そと唾を飲み込み、

「…き、た…よ…」

迎えに、きたよ

耳にかかっていた吐息が震えた。  
頬にもう一度雲が落ちる。

姫様…

吐息が頬を撫でる。

震えるそれが、脣にそつと押し当てられた感触を最後に、佐波の意識は再び闇の中に墮ちていった。

泡が弾けるような田覓め。

間「あわい」から現「うつ」へ、別の世を潜る様にして意識を浮上させた佐波は、無意識に身体を捻らせ、次の瞬間全身に走った痛みに「うつ」と悲鳴をあげた。

身体が燃える様に熱い。特に背中の痛みが尋常ではなく、少しでも動かせば大小の雷撃を喰らつているかのような鋭い痛みが容赦なく襲つて来る。

しばし痛みを逃がすように硬直していた佐波だつたが、痛みがじわじわと引き出すと、己の現状を把握する為にそつと目を開けた。

身体は動かせないが、どうやら自分は背中を天井に向ける形で、俯「うつぶせ」せに寝ているらしい。

真っ先に目に飛び込んで来たのは、頬の下にある柔らかな布の光沢。これほどまでに柔らかく、滑らかな布を佐波は知らない。

そして沈み込みそうなほどに柔らかい布団が身体の下に敷かれているのに気付き、狼狽えた。

「は…」

薄暗い部屋だ。だが風通しは良く、湿気はほとんど感じられない。

出来れば顔を動かして部屋の大きさを確認したいところだが、首に力を入れようとすると背中が刺すように痛み、仕方なく断念した。

少なくとも、佐波が世話になつてゐる屋敷にある端女用の泊り部屋 およそ10人が寝起きする よりは確實に広そうだ。

ぼんやりした明かりが閉ざされた障子から零れ、まだ新しい新緑色の畳を照らしている。

光の加減か、庭にある池の波紋や魚の姿が時折影となつて現れて、佐波を驚かせた。

：隨分と趣味のいい屋敷にいるらしい。

偶然にしても美しいその光景に、佐波はこの屋敷の持ち主は相当の金と家位を持つ人間だと判断した。

私は…

状況を整理しようと、目覚める前の最後の記憶を呼び起そうとした佐波の耳に、慎ましい足音が聴こえて来る。

思わず身を固くした佐波に構わず、足音の主は障子越しに影を落とし、そして部屋の前でピタリと止まるとなつて膝を折つた。

「失礼します。」

誰に対しての言葉なのかも分からぬまま、すつと音も無く障子を開く。

逆光で表情までは伺い知れなかつたが、入つて来たのが若い女性であることはその柔らかい影で分かつてゐた。

彼女は固い表情で目を瞬かせている佐波に気付くと、ハツとした様子で側に寄る。

「お田覚めですか？どこか、痛むところはありますか？」

丁寧な一介の豪族使用人に向けられるにはあまりに丁寧な女性の態度に、佐波は緊張を高めた。

いきなり斬り掛かられるとは考え難いが、それでも見知らぬ屋敷で無防備な、しかも碌に動けない状況では不安にもなる。

佐波の目に浮かんだ戸惑いに気付いたのか、女性は表情を穏やかにして語りかけて来た。

「すぐにお医者様を御呼びしますわ。その後でお着替えをしましょう。」

二ツコリと微笑まれて、女性が大層な美人であることに気付いた。年齢の頃は佐波より少し上…20前後だろうか。

艶やかな長い黒髪を後ろで結い上げ、花の簪を差している。

その女性の慈愛に満ちた笑顔に、思わず頬が熱くなつた。

同じ”女”だというのに、自分と彼女のこの差は一体なんだらう。

いや、今はそれよりも…

「…」

声を発しようとしたら、喉が鋭く痛んだ。

咳き込もうにも、身体が痛んでそれどころじゃない。

苦痛に悶える佐波に、女性は慌てたように覗き込んできたが、佐波の問わんとするところを汲み取り、

「ここは大皇都内にあります溟樓庵の事務処で、臥龍城「がりゅうじょう」と呼ばれている屋敷です。先日の火事で怪我をされた従業者はすべてここに運ばれておりますわ。覚えていらっしゃらないかと思いますが、あなた様が運び込まれてから3日ほど経つております。あれから丸々一日意識がお戻りになられませんで、随分心配いたしました。」

弾む様に言う。その言葉に、記憶がふわりと蘇った。

そうだ、私は火事で…………あれから……三日…?

愕然とした。

瞬時に浮かんだのは、火事の直前まで一緒にいて雇い主の三男坊を探していたひさめ霈のこと。

突然火の気の方角に向かつて走り出した佐波を、彼は後ろから追いかけてきたはずだ。

あの後…彼は…ほかの使用人達はどうなつただろう。

火事の混乱はあつたが、もし三男坊があの後見つかつたなら、直ぐさま彼を連れて宿に引き上げただろうことは容易に想像がつく。佐波が居ないことに気付いた使用人もいるだろうが、お目付役である本分を全うするのが彼らの役目。わざわざ探しまわつたりはしないだろう。

でもそうなると…

さあつと血の気が引いた。

あ、あれから三日つて…!…も、もしかして…私、捨て置かれた…!?

佐波の記憶が確かなら、あの宵は皇都滞在の最終日前夜。

あの堅物の長兄が、帰つてこない使用人を待つ為に滞在を延ばしたりなんか絶対にしないだろう。

考えたくないが、佐波はこの皇都でお役御免となつたと考えるのが妥当だ。

まさか、ここまできて職を失うなんて……！

自業自得とはいえたあまりに、『痛い』。

今更後悔しても遅すぎるが、ここでの失業はつまり、今後の生きる糧を失つたことを意味する。

これといって特技もなければコネもない自分が、これからどのようにして見ず知らずの皇都で一人生きて行けばいいのか……

完全に途方に暮れ、愕然としている佐波に、女性はおりおりと聞つた。

「如何されました？傷の具合が宜しくないのですか？すぐに最『さい』様をお医者様をお呼びしますわ。」

「お待ちください」と口早に言つて女性が立ち上ると、それとほぼ同時に廊下から軽い複数の足音。

そしてそれを追いかけるように、低い男の声が障子越しに聴こえた。

「いりーお前らは……にままだ立ち入り禁止だと言つただろう？」

男の声にも足音は止まらない。

たたたたた……と迷いの無い足取りで駆ける一つの小さな影は、佐波

のこる部屋の前でぴたりと止まった。

「あ、り……」

女性が少し困ったような声を上げる。

絶望の縁に辛うじて引っかかっていた佐波も、場の空気が変わったことに気付き、伏せていた顔を上げた。

障子を隔てて、二人の子どもの影が揺らめぐ。

同じく「うー」と背丈の一人は、中の様子を伺う為にか、しばしその場に佇み

そ、と襖が開かれる。

そこから部屋を覗き込んだ一人の子どもに、佐波が「あ」と小さく声を漏らすのと同時に、女性がため息をついた。

「真灯」「まほ」、耶灯「かほ」。まだ来てはダメだと呟つたでしょ  
う?」

柔らかな叱責に、まるで鏡に映したかのよつよよく似た子ども達が、全く同じ仕草で俯いた。

## 8 (後書き)

天津国…死した者が昇る、神々の国。現世の業と徳は来世にも持ち越される。

登場人物が増えました。名前が…

年の頃は、一〇に屈くか否か、といふくらいか。白磁の頬、長い睫毛、その下の黒曜の瞳。

良く似た？？？という言葉では足りない、瓜二つの容姿の一人の少年は、女性に嗜められながらもその場から離れようとせずに、ただ俯「うつぶ」せに横たわる佐波をじっと見つめていた。

？？？あれは…

佐波が少年たちに言葉をかけるより早く、女性が一人に近づき、その目線に合わせる様に屈んだ。

「こちらの方は大変なお怪我をされているのですよ。あなたたちの気持ちも分かりますが…今は安静に」

「あつ あの、構いません。」

考えるより先に声が出ていた。

慌てて身を起こそうとして激痛に阻まれ、結局情けなくも布団に俯「うつぶ」した姿のまま、佐波は一人の少年に声をかける。

「火事の時の…です、よね？」

燃え盛る済楼庵に取り残されていた、あの少年。

あの時は顔を確認出来るような時間も余裕もなかつたし、建物を出たところで記憶が飛んでいるから、実は少し自信がないのだけど…

しかしそれを裏付けるように、一人の少年は伏せがちだつた手をぱつと輝かせて同時に頷いた。

????ええつと…びつち…?

困つて女性を見ると、彼女は少し戸惑つように佐波を見返し、やがて諦めたように微笑んだ。

「…真灯」「まほ」、耶灯「かほ」、お礼を言いに来たのでしょうか？」中にお入りなさい。」

ただし、静かに。と言い添えて襖を開け放つと、二人の少年は恐る恐る、しかし期待の隠せない表情で佐波の横たわる布団の側まで寄つた。

そして同時に膝を折ると、

「真灯と申します。」  
「耶灯と申します。」

一人ずつ名乗り、子どもとは思えない優雅な動作で敬愛の礼をとつた。

『真灯を救つて頂きましたこと、心より感謝申し上げます。』

「え、あ、いえ…」

二人のあまりにも見事な口上に、佐波は間抜けな返答をして赤面した。

????皇都の子どもは大人びてるな…

などと場違いな感心までしていたのだけど、それよりも気がなることがあって口を開く。

「あの、真灯、さん。」  
「はい。」

敬愛の礼を解いて、一人が顔を上げた。

？？？こちらが真灯か…

白磁の頬に、真っ直ぐな黒曜の瞳。その無機質なまでの美貌は冬に咲く薔薇のように作り物めいていて、酷く落ち着かない気持ちにさせる。

はらりと頬に一筋柔らかな黒髪が落ちて、子どもだとこの辺に悩ましい色香を漂わせている彼を、佐波は何故だか直視できず田線を少し逸らし、

「け、怪我は…」  
「あなた様のお陰で、大事ござりません。」  
「そ、そうですか…」

それは良かつた、と呟くと会話が途絶える。

訪れたやけに重たい沈黙に、佐波は痛む背中に冷や汗が流れのを感じた。

？？？な、何か話さなければ…！

奇妙な焦燥感に押される様に口を開く。

「あ、も、申し遅れました、私は佐波と申す者で、布津の豪族の使人をして、あ、して、ました。多分。」

あわあわと言葉を訂正し、それでもみつともない形で着地した自分の言葉に、佐波は情けなくてかあつと赤面した。

10かそこらの子どもがこれほど落ち着いているといつのに、17の自分がこうでは情けなくもなるといつものだ。

色々な意味で自分に幻滅している佐波を、一人の子どもはじつと見つめている。

まるで佐波の人となりを全て観察してやんつとでもするようなその視線に、佐波は参つてしまつた。

「す、すみません、あの…」

本日一度目の助け舟を期待して女性を見ると、彼女はこつこつと微笑んでくれた。

「佐波様、というお名前でしたのね。私も申し遅れました。私はこのお抱え医師である最様の助手をしております、早音「はやね」と申します。佐波様のお世話を申し使つておりますの。御用の際はいつでもお呼びください。」

こちらも見瀉れるくらいの優美な仕草。佐波は余計に居たたまれなくなつた。

「あ、あの、本当に私などの一介の使用人にこんなに良くして頂いていて…。と、ところで、これはビタリ様の「ご好意でしょ」つか?」

一番気になつていたことだ。

いくらなんでも、あの火事での怪我人一人一人に、ここまで高待

遇は「えられていらないだろ。」

どこの誰とも知れない只の使用人風情に広々とした個室を「え、医師の助手までつけるだなんて、佐波の常識では有り得ないことだ。

「？？？では一体、なぜ？」

「総主の意向だ。」

その問い合わせたのは、女性？？？早音でもなければ、二人の子どもでもない。

いつの間にか開かれた襖の前に佇んでいた、黒衣の男だった。

黒地の着流しに、光の具合によっては限りなく黒に近い灰色にも見える羽織。伸ばした長髪は後ろで緩く括られ、背中に垂れている。30にも40にも見える年齢不詳の顔を陰鬱な影で覆っている彼は、さながら遙か東にあるという帝国の物語に登場する死神「ガロン」のようだ。

そんな男の視線が自分に真っ直ぐ向いて「お前を気に付く、佐波はぎょっとした。

男の光を反射させない暗い瞳で見つめられると、死神に「お前を迎えた。」とでも言われている気分になつて酷く落ち着かない。

蛇に睨まれた蛙よろしく硬直している佐波に、男は低く言つた。

「お前を迎えた。？？？と、言われそつだとよく患者に言われる。」

「まあロマンチック。」

今の台詞を全力で前向きに捉えた早音がのんびりと微笑む。だがもちろん笑えない佐波は、ひたすらに硬直して無表情のまま自分に近づいて来る男をだた見つめた。

少年一人が置をずれて、男の為に場所を空ける。黒鳥が羽を閉じる様に静かに膝を折った男は、大量の冷や汗を流している佐波に言つた。

「俺は最「セイ」ヒツジの医師だ。総主から言いつかって、お前の怪我の面倒を見ている。」

「俺は死神だ。溟王から言いつかって、お前の魂を攫いに来た。」と言われた方がまだしつくりくる男の陰鬱な表情に、佐波は唾を無理矢理飲み込み、ぎこちなく笑つた。

「や、それは、あの、お、お世話になります……」

「どうした。傷の具合が悪いか。」

顔色を悪くして震えている佐波に、男の顔がぬうつと近づく。起き上がる事もままならない佐波は「ひい！」と内心悲鳴を上げて、必死に否定した。

「だ、大丈夫です！ もう、殆ど全快かと……！」

「そんなわけが無いだろ。お前、自分がどんな怪我をしたか分かってるのか？」

「ど、どんな……？」

「背中全体に式度の温熱熱傷。肩甲骨のあたりに木材による代創【よくそつ】。腕を中心に度の熱傷と擦過傷、内出血に、他にもあるが」

「も、もういいです……」

「どうやら自分は結構な怪我人らしい。どうりで痛いはずだ。  
存在を知つて急に痛み出した背中の痛みを紛らわす様に、佐波は「  
それより」と話題を変えた。

「あの、先ほどここに私がいるのは、総主様の意向だと…？」  
「ああ、そうだ。お前は運がいい。」

男の暗い瞳が、佐波を見る。

そして死を宣告するかのような、暗い口調で言った。

「お前が助けた真灯は、総主の子だもだ。」

## 9 (後書き)

死神／ガロン／…遙か東にある帝国に伝わる神話に出て来る、死をもたらす使者。魔王に仕えている。皇国の神話には登場しないが物語としては有名なので、老若男女誰もが知っている

今田はじゅ出来ないと思つてたら意外と出来ちゃいました。やつてみるもんだ。

作者は医療関係さっぱりなので、記述に大変な間違があるやもしれません…

間違いがありましたらひとつそり教えて頂けるととても助かります。

そつくりな双子ですが、見分け方があります。

その話はもうちょっと後に出す、予定です。

「お前が助けたのが総主の子どもでなければ、こんな待遇は得られなかつただろうよ。」

どこか投げやりな黒衣の男 最「セイ」の言葉に目を丸くして、佐波は双子を見た。

総主の、子ども…？

白磁の頬の美童たち。その稀に見る美しさに、つま先を「かむろ」だと思って疑わなかつた。

だが…

何故だか訝然としない。

すぐにその理由に思に至つて、佐波は素直に問つた。

「総主様の、子息が、なぜあの晩遊郭に…？」

その問いに、最はわずかに片眉を上げた。が、すぐに元の陰鬱な表情になり、

「あの晩に限らず、総主が行くところは全て同行するよ」になつてゐる。それを言つなら、お前の方だ。」

「へ？」

「火事の時にお前を目撃していた者が言つては、お前は燃え盛る渾樓庵の中に単身で飛び込んだそうだな。」

何故だ?と暗い瞳で問われて、佐波は思わずぎくへつとした。

何故つて…私は…

意識が記憶を逆撫でる。その感触に背筋が震え、いつのまのかも定かではない朧げな光景が閃いた。

???姫様…

「つ わ、私はいお、人を捜して…!そ、それより、あの、ここに、以織といふ名の男娼は…?…!」

「落ち着け。傷に響くぞ。」

ぐつと起き上がりつとじた佐波を、最は面倒そつに押さえる。その腕にしがみついて、佐波は言った。

「お、お願いです…!教えてください!私は、人を…『以織』を捜して遊郭[ここ]に…!」

ここに、いるはずだ。

あれが熱に麿「うな」されて見た幻でなければ。そうじやないと言いきれない。でも、そつだと言つてはあまりにも生々しい吐息と、以織の…?

「いおり…？」

佐波の言葉を聞き止めた最が、一瞬表情を動かした。  
それに気付いて、背中の引き攣れるような痛みを無視して更に詰め寄る。

「以織をご存知なんですか？あの、今年20になる、美しい、えつと、布津から…」

「…いいから落ち着け。お前の『いおり』が、俺の知る『いおり』だとは限らない。」

「い、いいんですつ なんでも、以織の情報なら、なんでも…」

必死に言い募ると、最は何事かを深く思索するよつて黙り込み、やがてため息をついた。

「…分かった。だが、まずはお前の話が先だ。」「えつ？」

「はつきり言おひ。お前は疑われている。」

「う、疑われて…？」

なんだか不穏な方向へ進んでいる会話に不安を覚える。

最は腕にしがみついたままぽかんとしている佐波の手を離しながら言つた。

「回つ番が言ひこな、お前はあの晩、一いつの現場に居合わせているな。」「一いつの…現場？」

回つ番、とこひのな… 濱楼庵の周りをうねりうねする佐波に話しかけ

て来た、あの小柄な男のことだらうか。

そういうえば、と佐波はあの晩のことと思い起した。

「……需「ひさめ」さんと合流した時、私は誰かに……しかも複数名に付けられていた。それらも皆“回り番”……？」

あれは確か、突然吹き飛んだ渕楼庵の壁から飛び出してきた男を、偶然通りかかった自分が加勢して捕らえた、その後のことだ。もしそうなら、やはりあの時から目を付けられていたのか。他に『居合わせる』ようなものには思い当たるものがないから、恐らく一いつ田の”現場”はそれだろう。

「……だが、一いつとは……？」

困惑氣味に眉根を寄せた佐波の表情を、その暗い瞳で見つめていた最は、ふ、と口元を歪ませた。

「まあいい。俺の本分は医者だ。お前が何者であろうと、処遇が決まるまでの怪我の面倒は見る。それに、俺がせずとも警吏と回り番がお前を尋問する」とだらう。「

「じ、尋問！？」

「心配するな。一応お前は総主の恩人だ。眞偽の程が定かでないうちは、死に至る程の尋問は受けないはずだ。」

「そ、それは拷問というのでは……！？」

細かい事は気にするな、と真顔で言つて、最は心配そうに佐波を見つめていた早音に視線をやつた。

「早音、お前は先に食事の準備をしてくれ。こいつは丸一皿何も食べていないからな。」

「あ、はい。畏まりました。」

ハツとした表情で我に返つた早音が、楚々と礼をすると立ち上がる。そこにもう一度、最は言葉をかけた。

「ああ、ついでにこの双子も連れて行け。診療の邪魔だ。」「はい。…真灯、耶灯、行きましょう。」

早音に優しく促され、双子は少し戸惑つように佐波と最を交互に見る。その目に浮かぶ訴えかけるような光に、佐波は思わず声をかけていた。

「…もしかして、私に何か？？」

「…何か、話があるのだろうか。

目が覚めるのを待つていたかのように部屋に入つて来た双子の様子を思い出しながらそう問おうと口を開いた佐波を、最がきつぱりと止める。

「全では診察の後だ。真灯、耶灯。外に出る。」

揺るがぬ口調で言われて、双子は渋々といった様子で立ち上がり、静かに部屋を出て行く。

が、部屋を出る直前に一人が振り向き、佐波に小さく手を振つた。

「…真灯、かな。

反射的に小さく手を振り返す。すると、無表情に近かつた少年の顔

がぱつと華やいだ。

？？？か、可愛い！

二口二口笑いながら足早に去つて行った少年を無言で見送りながら、内心で少年の可憐さを褒め讃える。

佐波にはかつて幼い弟がいた。一家離散でどこかの貴族の養子として貰われていったはずだが、無事に生きていればあれくらいの年齢になつてゐるかもしだれない。

他の兄弟には徹底的に苛められていた佐波だが、一番下のその弟とは彼がまだ幼いこともあって比較的良好な関係だった。というよりは、接点があまりなかつた、というべきなのだろうが。

そんなことを考えて癒されていた佐波は、すぐそばで地に沈むような暗い空気を醸し出す男の存在を思い出してぎくへつとした。

？？？そういえば、診察つて…

もしかしなくとも、彼がするのだろう。

別に、今更恥ずかしいとかそういうんじゃない。

今の自分の様子を見れば、意識のない自分の怪我を治療してくれたのはこの男なんだと理解も出来るし感謝もしている。

でも、なんとなく不安な気持ちになるのは…この男の醸し出す黒い氣の所為か。

？？？出来れば早音さんといないし…

いつの間に部屋を出たのか。すでに姿の見えない早音の姿を部屋の中に探すが、もちろん何処にもいない。つまり今は、この男？？？最と一人きり…

「…行つたか。」

「ひつ」

「どうした、と低く呟いた言葉に過剰に反応した佐波を、最は訝し気に見た。

「どうした、別に獲つて食つたりしないぞ。切つて貼つたりはするかもしないが。」

「そ、そそそそれが怖いんです……！」

男の、どじまでが本気で冗談のかはつきりしない暗い真顔で言わると、怖さも倍増だ。

若干本気で怯え始めた佐波を、最は暫しじつと見つめた。そのまま数十秒が経つ。

「… つ あ、あの？」

溜まらずに震える声で言葉をかけると、最は「ああ…」と視線を置にずらした。

そして、

「お前、『いおり』を探していると言つたな。」

「…は、はい…」

思わぬタイミングで得られそうな情報に、恐怖などどじかく行つてしまつた。

代わりに、体中に緊張が走る。出来ればこんな俯せの状態ではなく、ちゃんと座つて話を聞きたいものだが…

どうにかして座れないかと模索している佐波に、最は静かに言つた。

「一つ言つておぐが、『いおり』と『うな』の男娼は渕楼庵にはない。

「…え？」

ショックで思わず小さく叫んだ佐波の様子を、男の暗い瞳が捉え、そのまま言葉を続ける。

「これほどこの遊郭にも言える事だが、遊郭「ここ」に来て遊女や男娼になる者たちは、それまでの名を捨てて、ここでの通名」とおりな」を持つようになる。場所により様々だが、渕楼庵では遊女には”鳥”の名を。男娼には”花”の名前を付けることになっているようだ。『いおり』もまた、ここでは別の名を持つている。

「通名…」

言われて、佐波は自分の無知さを痛感した。

使用人同士の風の噂で以織が渕楼庵に売られていったと知ったのは、もう随分前だ。その時は確かに『以織』の名前は出さずに、布津の没落貴族の姫の代わりに売られていった使用人、という呼ばれ方をしていたように思つ。

佐波にはそれが以織のことだとすぐに分かつたが、あの頃すでに遊郭「ここ」では別の名で呼ばれていたのだ。

「…以織の通名を」存知ですか…？」

恐る恐る問うと、最は僅かに目元を緩めた。

先ほどの歪んだ口元といい…もしかしたら笑顔のつもりなのかもしれない。

「…お前の言つ『いおり』が、俺の知つている『いおり』だとしたら、知つている。」

「つ……い、以織は、以織は今……！」

「焦るな。一つずつだ。……『いおり』の通名は『君影』[きみかげ]」

といつ。

「きみ、かげ……？」

「知らないか。冬の最中に咲く、小さな白い花のことなんだが。」

「……し、知つてます！」

君影草「きみかげそつ」。確かに、家が没落する前まで、家の裏の花壇でこつそり一人で育てていた花だ。

控えめな星形の花がいくつも咲く宿根草。冬の最中に雪を割つて顔を出す、少し珍しい花。

あの花の種を買って来てくれたのは以織だつた。家から離れられない佐波の為に、彼は珍しいものによく買って来たり拾つて来たりして佐波を楽しませてくれていた。

？？？間違いない、以織だ……！

歓喜に打ち震えた佐波が、更に詳しく以織の情報を聞き出す、その前に。

黒衣の男は、その陰鬱な表情で淡々と言つた。

「『君影』は、2年前に流行病で死んだ。もつ、ここには存在しない。



君影草は現実に存在しますが、それとは別なものだとお考えください。（でもモデルはその花なので、基本は同じかも…）

今暫く待てだと……！？

大皇都内、宫廷庁の渡り廊下を、左相「やそう」は肩を怒らせながら歩んでいた。

吟遊詩人が、天津国の天女もその美しさに惹かれて舞い降りると謳つた美しい庭園には一切見向きもせずに、彼は無意識に立派なあご鬚を撫で、先ほどの皇帝との謁見を反芻「はんすう」する。

その大事な御身の命にも関わることだとうのに、まだ若き皇帝は左相の話にまともに取り合つた様子も無く、のらりくらりと言葉を躲「かわ」し、『審議の結果が出るまで今暫く待たれよ』の一点張り。

最後には『憶測で騒ぎを大きくするな』と釘まで刺され、謁見の時間は半刻もたたずに終了した。

多忙な皇帝の偉大なる業務を邪魔するつもりはない。だが、厄介払いと言わんばかりに追い出されれば腹も立つ。

帝「みかど」は解つておられぬのだ。もし事が起ければ、ご自身の命はあるか、永き世の皇帝家に幕を引きかねぬことを……！

腹から胸にかけて蟠「わだかま」る感情を持て余し、ずんずん廊下を進む左相は、ふと前方から近づいてくる人影に気付いた。

あれは…

ぐっとわき上がりつた嫌悪感を飲み込むと、左相は平然を表情に貼付けて、極めていつも通りに振る舞つた。

「これは左相閣下。お久しぶりですね。」

宫廷の礼儀としてすれ違い際に一応の礼を取らうとした左相に、若い男が揚々と声をかける。

壯年の左相からすれば、まだ子どものように見えるその若者は、聞いた話だと今年で27。

二コ二コと如才ない表情をその整つた顔にのせ、穏やかな声で歌う様に語りかける様は、一見するだけではただの若い貴族議員、否、議員にすら見えない。

だが、この男がその並ならぬ才覚で、僅か数年でこの地位まで上り詰めたことを知っているだけに、左相に油断はなかつた。

「久しいですね、右相」「うそつ」殿。本日は如何されました。」

にこやかに、友好的な笑みを浮かべて左相が問つ。議員になれば、誰しもこれくらいの技術は身に付くものだ。

左相のその問いに、右相　　「皇國」「このくに」で皇帝、左相の次に大きな権力を持つこの若い男は、まるで裏のない笑顔で言つた。

「皇帝陛下のご機嫌伺いに行くところです。閣下は、今お帰りですか?」

「ははつ　執務が忙しいからと追い出されてしまったのですよ。本日は退散致す所存で。」

「おや、そうですか。では私も止めた方がいいかもしませんねえ。」

「

男は「ふむ」と一つ頷き、「そりいえば」と軽く続けた。

「先だての渕楼庵の大火をご存知ですか?」

「…勿論。皇都内に知らぬ者などおらぬでしょ。」

「ははつ それはそうですね。失礼致しました。」

では、その

大火が、何者かによる放火の可能性があることはご存知ですか?」

声色を一段低くして、どこか楽しむような口調で言つ右相に、左相は平然と応えた。

「そのような噂があると聞いてはありますな。なんでも、事前に刃物を持った男が押し入ったとか。」

「さすが左相閣下。お耳が早くていらっしゃる。今警護方で調べさせているところですが、何分、全て燃えてしまつてますからねえ。証拠は殆ど、上がつていなうそですよ。」

情けないことです、と嘆くこの優男が、まさか皇国内の治安を維持する為の司法機関・警護府の”実質の”総司令官だと誰が信じられるだらう。

警護府とは、軍部総統司令府と権力を一分している国家機関だ。

大体の議員は警護府や軍部から担がれた、家位の高い者たちが選出される。

もちろん議員になる者は機関からの脱却が条件とされているから、現在の総司令官は別に存在する。

だが、それは表面だけのこと。実質的には、権威の下に身を寄せるのはどこの機関も同じ事だ。

左相は、ぴくり、と眉を動かした。

「ですが、聞いた話では押し入った男は回り番が捕らえたと。」

「ああ。確かに、一時は捕られたようなのですが、火事のどさくさで…。手引きした遊女も服毒死したそうで…面白もない状況です。」

ほとほと困った、という顔の男に、左相は内心で毒を吐く。

抜け抜けと…黒幕の第一容疑者が何を言つたか。

けれどももちろん表情には出でず、同じ様に残念そうな顔を取り繕う。

「それは難儀ですな。では、現在はその輩を手配中なわけですか。軍部「ひり」も、何かお役に立てると良いのですが。」

左相である彼も、右相と同様国家機関　　軍部からの担ぎ上げだ。国内でのことはどうしたって警護府に分があるが、国境付近ならば軍部にも指導権が与えられる。

もしこの男が黒幕だとすれば、わざわざ実行犯を逃がすためだけに国境を冒すようなリスクは負わないだろうが、事を”成し損ねた”輩が身の危険を感じて国外に逃げ出す可能性はある。

それを捕らえられれば、一気に全てのカタが付くのだが…

だが、そんな左相の含みに恐らく気付いているであろう男は、何も知らない無垢な若者のように笑つて、

「あ、いいえ。輩の身は確保しているんですよ。まあ、骸「むくろ」としてですが。」

遊郭沿いの川で上がりました。と、さもアッサリと言い放った。

そして思わず口を開いた汐甫に構わず、独り言のよつて囁く。

「不可解なのは、上がった骸が”三つ”だったこと。そしてそのうちの一人の身元は判明しているところですかね。」

「…ほう。そういえば、押し入ったのは一人でしたか。もう一人とは？」

「もう一人の骸は地方豪族の使用人らしいのですが…どうにも、そちらも不可解な話で。」

言いかけて、ふと男が顔を上げる。

それと同時に、右相の後方から若い男が音もなく姿を現した。

「右相閣下。」

「景林「けいりん」か。」

景林と呼ばれた右相の部下は、その感情の読めない能面のような顔を伏せると礼をとった。

「お話し申しそうありません。査問の準備が整いました。」

「…ああ、もうそんな時間か。」

皇帝陛下にござ挨拶する暇もない、と右相の青年は肩をすくめて笑うのに対し、左相は鋭く目を光らせる。

「右相殿。査問とは？」

「はい。その渦中の渦中渦庵より、参考人として総主を召還しているのです。状況は不可解でも、怨恨の線が一番疑わしいですから。」

「ほう。しかし、右相殿が直接査問を会す程のものですかな。」

「ははつ 私も参つてゐるのですが…曲がりなりにも、あそこは皇府公認の遊郭街ですからね。」 万が一 があつてはならぬと、

皇帝陛下の勅命でござります、と右相は手を組めた。

「皇帝陛下の」

思わず表情を固くした左相が、次の言葉を発するよりも早く、今度はまた別の男が渡り廊下を駆けて来るなり声を荒げた。

「左相様…」おひらこおいででしたか あつ これは右相様も…」

中年のその男は左相の側に右相の姿を見つけると、慌てて膝を折り礼をとった。

それを軽く手で制して、右相の青年は一ヶ口笑つ。

「愚ました礼など不要ですよ。私はここで失礼しますから。」

言つて、左相に慇懃に礼をした。

「おひらくお弓を止めてしまい、申し訳ござりませんでした。」

「ああ、おひらこで、貴重な時間を頂きましたな。」

出来る」となが、ここで全てを問いたいといつも気持ちに駆られるのを、左相はぐつと顎を引き耐えて同じく礼をとり、けれどやはり我慢なげず、横を通り過ぎる右相に言葉をかけた。

「…そういえば、右相殿は渕楼庵の先代の総主と懇意の仲であったと伺っております。奥方との縁「えにし」を結んだのも、先代総主の仲立ちだと。いやはや、羨ましい縁故ですな。」

彼の正室は、皇家とも繫がりのある貴族の娘だ。婚姻を結ぶことで現在の地位を得た”成り上がり”の右相を揶揄するように言う左相に、彼の足が止まつた。

そして穏やかに振り返り、

「ええ。私のような何も持たぬ男を受け入れてくれた妻には感謝しています。もちろん先代総主にも、色々とお世話になりました。嫡養子としての立場は、まあ、納まりが悪くはありますが。」

贅沢ですよねえ、と笑う右相。

その姿はどこから見ても年相応の、ただの若い男だ。

揺さぶりも効かぬか。…忌々しい。

左相が考える限り、今回の黒幕として一番疑わしいのがこの男であることは間違いない。

ただの一仕官だった男が、あつという間に頂上まで上り詰めて来て、次は更に上　　左相の地位まで脅かしている。

…否、左相の地位ばかりではない。男の野心一つで国家が揺らぐ。それほどの才覚をこの若き右相は秘めている。

今回の件、その布石として起こした騒ぎだとしたら…

左相は、内心で舌打ちした。

この男の底知れぬ腹を探つたところで埒があかない。

軍部からの叩き上げである自分と同等に渡り合つ男の度量には感歎すらするが、敵となるならば全力で潰す覚悟でいかねば、こちらまで引きずり込まれてしまう。

左相は気持ちを切り替え、今度こそ別れの礼を述べた。

「詰まらぬ詮索をしましたな、失敬。では、私もこれで。」

後ろに今しがた来たばかりの中年の下士官を引き連れて、左相は風を切つて去つて行く。

その背を見送つて、右相の青年は踵を返し、背後から静かに付き従う下士官に言つた。

「総主は。」

「閣下の執務室に通しております。」

「そうか。 にしても左相様も、お人が悪いな。」

ふふ、と楽しそうに笑う男に、主に忠実な下士官の男は無言で返す。それに構わず、男は続けた。

「気付いてはおられぬだろうが、いい線を突いてきた。いつそ手を貸してくれるなら、話は早いのだが。」

「それは無理な相談でしょう。閣下の個人的な願いなど、受け入れられるどころかそれを盾にされかねません。」

「わかつてゐるさ。だからこうして、面倒なことにわざわざ首を突っ込んでいる。」

至極詰まらなさうにそつとして、ふと思ひ立つて下士官に告げた。

「今日は帰らぬと、家に伝えてくれ。」

「：先月期から一度もお帰りになられていませんが。」

「他人の家のことには口を出すもんじやないよ。」

「ですが、奥様が」

つい言い募つた下士官に、男は振り返つた。

男の本質を表すよつた、穏やかな笑顔を消した冷たい表情。

その口元が微かに歪んだ。

「僕の妻は、彼女じゃないよ。」

下士官はさつと膝を折り「失礼いたしました」と頭を下げた。  
それを一瞥して、男は再び踵を返す。

全てが、酷く面倒だつた。いつそ地位など返上して、一人で行動した方がいいのではないか。

もう何度も考えた思案が過つて、その度に首を振る。  
身分も肩書きもない自分がこの世界でどれほど卑小な生き物である  
か、知らぬ訳でもない。

動かせる手駒は、多ければ多い程いい。

早く。一刻も早く。

最愛の妻を脳裏に浮かべた青年は、小さく微笑むと、未だ膝を折り  
頭を下げる下士官に告げた。

「 参りつけ。」

青白い月明かりが、部屋の薄闇を照らしている。

多くの人間がこの屋敷に滞在しているのには、どういうわけか物

音一つしない。

まるで冥府の前にあるといつ、惜離「せきり」の谷のようだと、耳鳴りがする頭で佐波はぼんやりと思つた。

惜離の谷は、死人と生者の夢の通路とも云われている。思いの強い死人が、冥府の門をくぐる前に、この谷を通つて生者の夢枕に立ち別れを惜しむのだと。

”青く静かなる谷、時を刻まず。されど止「どゞ」ある」とは許さず。己「おの」が愚欲を制し、歩き通した者だけが、再び輪廻で見「まみ」えることを許される。”

皇國「このくに」の吟遊詩人ならば誰でも謳える『冥府不迷異「めいふまよわざのこと」』の一節を思い出し、佐波は硬直していた頬を僅かに歪ませた。

昔、佐波の屋敷に訪れた吟遊詩人が、この謳を詠んだことがある。まるで死の世界を行つて帰つて来たかのように、すらすらと謳「そら」んじる男に佐波は感歎し、以織にその話を聞かせた。

すると以織は、いつもの穏やかな笑みを消して、真面目な顔で言ったのだ。

『冥府などという存在は、私は信じません。死ねば人はそれまでです。』

その言葉は、佐波の知つてゐる以織の姿とはかけ離れた、酷く冷たいものだった。

それに驚いて言葉を失つた佐波に、以織はよつやく自分の言葉の威力に気付いたのか、小さな声で付け足した。

『…冥府に行けば、人は業と徳だけの存在になり、現世での記憶を全て失い新たな生を受けると聞きます。私は、そんなのは嫌です。』

『…どうして？』

『……私にとっては、姫様のお側にいられる、この世こそが天津国です。思い出すら失って、どうやって新しい生を受けられましょう。』

それくらなら、全てが無に帰す方がどれほど心安らかか、と言つ真剣な顔の以織に、佐波は一瞬固まって、そして破顔した。

『以織は吟遊詩人になれるね。いや、見世芝居の演じ手もよそう』

『』

「コニコニ笑つて応える佐波に、彼は少しだけ物足りなさそうな顔をしたが、すぐにふわりと笑つた。その笑みが大好きで、思わず抱きついた佐波を、彼は大切なものを囲うように柔らかく抱きとめる。

まるで幼い恋人同士のような、密やかで穏やかな、閉ざされた世界。風が舞い、雲が流れ、やがて別れの冬が訪れた、その後も枯れる事のないあの日の光景を頼りに、佐波は長い長い冬を一人で歩んで来たのだ。

焦点を失った瞳が、じわりと滲む。

瞼が爆ぜるように瞬いて、ぽろりと珠の涙が溢れた。

黒衣の医師 最は言った。

『2年前の冬。』君影は流行の病に倒れ、三日三晩の高熱の末に死んだ、と。

『あの年は例年よりも流行病による死者が多かつた。渓楼庵だけでも一ヶ月（一ヶ月）で十数名の死人が出ている。もちろん、俺も全

ての死人の名前を覚えていいるわけではない。だが、君影の死は別だ。君影は太夫「たゆう」だった。ここに来て2年足らずで、遊郭の最上位まで上り詰めた。最後の顧客は、前皇帝だ。』

弔いも、埋葬も、歴代の太夫一絢爛だった。と最は静かに語つて、茫然自失している佐波を見た。

『死んだとき、君影は18だった。死ぬ3年前、布津の方から流れてきたとも聞いたことがある。しかし、お前の“いおり”が、君影だという証拠はない。君影の念写も、姿絵も、顧客の履歴さえ前皇帝が徹底的に廃棄させたからな。だがもし”そう”なら…』

残念だ、と呟いて、彼は佐波の怪我の措置もそこそこに部屋を去つた。

人払いをしたのは、治療をする為ではなく、このことを知った佐波が受けける衝撃を想定したことだったのだろう。

実際、佐波は男が部屋を去るまでの間、一言も口がきけなかつた。「嘘だ」と繰ることも、「それは以織じやない」と笑い飛ばすことも、何一つ出来ない。

ただ穴の開いた肺で呼吸をするような、底の無い桶で水を汲むような、果てしない無力感と脱力感が佐波を支配していた。

もし。

青白く光る障子を眺めながら、佐波は思つ。

もし、最の云う“いおり”が、自分の探ししている“以織”だとしたら。

否、本当は気付いている。

同じ時期、同じ出身、同じ名の男娼が遊郭に売られてくるなんて物語よりも奇妙な話より、死んだその太夫が以織だったと考える方が遥かに自然だ。

”いおり”が”以織”である理由を探すより、ない理由を探す方が困難であることに、とっくに気付いているはずの頭が、けれど受け入れる事を拒否する。

それを受け入れるということはつまり、佐波が本当に本当の意味で、全てを失ったことを意味するからだ。家も、家族も、仕事も失い、約束まで絶たれた人生に、一体なんの意味があるだらう。

2年。2年も前に、以織は逝ってしまったというのか。佐波との約束を待つことなく、一人で、旅立ってしまったというのか。

記憶の中の以織の姿が幾つも瞬いて、肺から震える熱い吐息が溢れ、かつと目の奥が熱くなつた。绝望の雲が、次々に力無い身体から滑る落ちる。

悔しくて、全てが煩わしくて どうしようもなく寂しかつた。会いたい。ただ一目でいい。言葉を交わせなくとも、罵られても、恨まれても、殺されたって構わない。

ただ、ただひたすらに、以織に会いたい。

思い通りにならぬ身を捩つて、佐波は泣いた。

溢れた涙は、伏せた枕に吸い取られて消えていく。

嘆きも慟哭も全て受け入れる、青い月明かりの部屋で。

佐波は絶望に終わりなどないと 知つた。



サツキは、田の前で半身を起こし、死んだような顔で薬湯を啜る少

女 佐波を観察していた。

彼女は、じつにも失礼だが、取り留めて特徴のない平凡な顔立ちをしている。

前回の見立てでは、背丈は17という歳程にはあつたはずだ。  
どちらかといふと肉薄で、さすがに男と比べると丸みはあるが、中世的な体つき。

髪を結っている時は一田で女子だと分かつたが、火事で焼かれた髪が肩ほどで長短散らばり、そして現在のやや齧「やつ」れ鋭さを持つ表情から、14、5の少年のようにも見える。

年齢的には年頃と云えるのだから、化粧の一つでもすれば随分印象が変わるだらうに、思いながらも、この素朴さがある意味彼女の魅力であり、無害さの象徴かもしれないと思い直した。

しかし、見た目では人は推し量れない。

見た目の怪しさで云えば最上級のルッカといつも一緒にいるだけに、  
その辺りは抜かりない。

：抜かりない、はずなのが。

佐波の尋ね役として選ばれたサツキは、ここに来る前に、面会の許可を得る為に医務室を訪れた。

昨日は佐波の体調が思わしくないといつことで断られたので、もしかしたら数日は無理かもしないと覚悟していたが、今朝はあつさりと許可が下った。

ただし、条件付きで。

『あの娘は今、不安定な精神状態にある。今後もアレから情報引き出したいなら、あまり急かさないでやれ。』

いつ見ても不気味な黒衣の医師・最は机に向かい、黙々と書き物をする手を休めずにそう言った。

彼もまた、その死神のような容貌に似合わず意外と細やかな気遣いをする、見た目では推し量れない人物だ。

『不安定…って、火事の事で?』

思わず、サツキは問い合わせていた。

壁に開いた穴から飛び出して来た男に、躊躇無く的確な蹴りを入れるような少女だ。

白刃を恐れるどころか、素早くその胸元に飛び込んだり、燃え盛る火の中に飛び込んで行つたりと、年頃の娘にしては”少々”雄々しい姿も目撃しているサツキからすれば、それくらいで今更精神が揺れるようなヤワな子じゃないだろ?と思わずにはいられない。

サツキの訝し気な問いに、最は手を一回止めて、ゆっくりと振り返る。

その光を返さない黒々とした瞳は、ただ静かに「詮索無用」

と告げていた。

仕方なく引き下がつたものの、釈然としない。

第一、急かすなと云われても、そう悠長にはしていられない。

今のうちに何がどう悪いのか知つておかなければ、言葉を選び損ねてしまうかもしれない。

勿論それは尋問を有利に進めたいという回り番「こちら」の驕りであり、佐波の心を土足で踏み躡「にじ」りたくないという気持ちの現れである。

情報を仕入れる為に次にサツキが向かったのは炊事場だった。

朝一番の大仕事　　臥龍城に滞在する全ての人間の朝餉の支度との片付け　　がようやく終わつた其処「そこ」は、既に昼食の準備に取りかかっていて、酷く混雑していた。

溟樓庵ではサツキも時々加勢に呼ばれたことがあつたが、厨房はまさに戦場の名に相応しい場所だった。

それまでは夜通し客の相手をする姐さんや兄さんの体力に勝るものはないと思つてゐたが、昼夜問わず食材と格闘し続ける厨房人はその上を行つてゐる。

サツキは慌ただしく動き回る厨房人の邪魔にならないところで目を走らせ、目的の人物　早音を見つけた。

臥龍城「ここ」での彼女は主に病人食の担当で、朝から忙しく働いている。

その合間に佐波の世話をしているといつから、彼女も相当タフだ。呼ぶと、彼女はその優し気な面差しでサツキを見留め、すぐに駆け寄つてくれた。

まるで仲の良い姉妹のように接してくれる早音は、突如殺伐とした世界に放り出されたサツキにとつて、オアシスのような存在だ。忙しい彼女にまず謝罪をしてから事のあらましを告げると、早音は「まあ」と頬に手を当てて困った顔をした。

『私も、最様から詳しく述べ聞きしていないのです。昨晩、食事をお持ちしましたが、その時から既に佐波様のお心はここに在らずで…。出された食事にも全くの無反応で、まるで身体を残して心だけが冥府に行つてしまわれたようなお顔をしていらっしゃいましたわ。』

佐波の様子を思い出しているのか、早音の表情が翳る。

そして、少し躊躇つような間を見せた後、そつと声を潜めた。

『…実は、そのご様子がどうしても気になつて、最様にお伺いしたのです。そうしたら最様は』

あの娘の探し人が、すでにこの世にいなかつた。それだけのことだ。

静かにそう答えて、早音を下がらせた。

『では、それだけ』と言しながら、彼も佐波の様子を気に掛けている事を、長年側で仕える早音が気付かないわけがない。

『きっと酷くお心を痛めていることでしょうね…』と気遣わしく咳く早音に対し、サツキは脳天からわあつと血の気が引いていくのを感じていた。

探し人が、すでにこの世にいない。

それは、サツキが最も聞きたくない言葉だった。

「…あの、…ありがとうございました。」「えっ？」

この之間にか思案に耽「ふけ」つていたらじい。  
目をぱむぱむさせて焦点を合わせると、薬湯を飲み干した佐波が、  
血色の悪い顔でサツキを見ていた。

ちなみに薬湯は、早音から持つて行く様に頼まれたものだ。朝食に  
手をつけられなかつた佐波の為に作られたものらしい。  
その顔を伝えると、佐波は青白い顔に申し訳なさそうな表情を浮か  
べ、素直に薬湯に口をつけた。

あれだけの怪我をしたのだ。最は許可を出したが、まだ体調が思わ  
しくないのかもしねない。

？？？否、体調よりも、心傷が彼女から生氣を奪つてゐるのだ。

佐波は赤く充血した目でじつとサツキを見つめ、そして不意に頭を  
下げた。

背中の怪我の所為で殆ど礼とは云えない程の首の動きだつたが、そ  
れが何事か畏まつた行為であることは明らかだ。

「…早音様からお聞きしました。あの火事の夜、私の怪我を真つ先  
に見て下さつたのは、サツキ様だつたのですね。」

「…ああ、そういえばそんなことも…」

その後があんまりにもじたたしていいたので、すっかり忘却の彼方  
だつた。

しかし、畏まつて礼を言われるまでの事でもない。

結局サツキがしたのは止血と傷口を水で洗う事くらいで、その後は  
重傷だと聞きつけて応援に来てくれた他の医師達に任せたきりだつ  
たのだから。

謙遜と取られてしまうかもな、と思いながらも「大した事はしてないわ」と応えると、案の定佐波は首を振った。

「最様から、最初の処置が早かつたから、この程度で済んだのだと教えていただきました。サツキ様には、医術の知識が…？」  
「ええっと…まあ…怪我の具合は？」

元の世界では、確かに看護を学んでいたけれど、戻る出来る程の経験はない。

なんとなく後ろめたくてサツキが早々に話を逸らすと、佐波はふ、と口の端を歪めるだけの笑みを浮かべた。

「大事「じ」じこません。皆様の「じ」尽力のお陰です。」

そう言つて、おもむろに睫毛を伏せる。

「…」こちらの方々には、本当に良くして頂いております。ですが、このような厚遇は、私のような使用人風情には過ぎたものです。幸い、身を起こせるまでに回復いたしました。これ以上…こちらでお世話になるわけには参りません。」

彼女は再び、今度は可能な限り深く頭を下げた。

「「」恩は生涯忘れません。治療代、宿代、食事代は、必ずお返しに参ります。どうぞ、離宿のお許しを、進言しては頂けないでしょつか。」

静かな声だった。平坦で、熱もなく、それ故に聞く者を頷かせてしまうような。

だが、もちろんその願いを聞きとめるなど、土台無理な話だ。

「それは出来ないわ。」

サツキは出来るだけ冷たく、ハッキリ言い放つた。

「あなたをここから出すことは出来ない。そして他の者と同じ待遇に置く事も、外部の者と接触させることも出来ない。どうしてか、わかる？」

頭を下げ誠意を見せる彼女に対し、自分のこの高慢な態度はどうだ。と心の中で自分を罵倒する。

それでもサツキには、佐波の提案を叶えてあげる事も、受け止める事すら出来ない。

回りくどく断ることよりも、今彼女が置かれている現状を正確に伝える事が”誠意”だと、サツキは信じた。

「病み上がりの貴方に、こんなことは言いたくない。でも、貴方はこの騒動の容疑者の一人なの。現場に居合わせてくる以上、全てが明るみに出るまでは、解放することは出来ないわ。」

「…騒動とは…あの晩の…白刃を持った男達のことですか。」

まるで断られることを知っていたかの様な落ち着きで、佐波は尋ねる。

搖さぶりをかけられていることは明らかなのに、なぜ今、こんなにも真っ直ぐな目で見つめて来る事が出来るのか。

常人ならば、全く身に覚えのない罪の容疑者だと言われば動搖して当然のはず。

では彼女が?まさか…

いつの間にか公平を忘れ、佐波に肩入れしようとしている自分に気が

付いて、内心慌てた。

しかし表面には、あくまでも仕事の顔を貼付ける。『れぐらーのことで、呑まれるワケにはいかない。

サツキは顎を引いた。

「そういうのも言えるし、そうでないとも言える。」「…？」

「因果関係が明らかでないの。結論を出すには情報が足りない。でも、あなたの現在の嫌疑はハツキリしているわ。」

その表情の変化一つ見逃すまいと、目を凝らす。

『何も信じるな。人も、己も。俺たちの仕事は只一つ。『そういうのみと知れ』

そう教えてくれたのは、サツキとルッカに仕事を与えた男だった。彼は無情な撃を口にした、それと同じ口で言った。

『忘れるな。お前が気を許した数だけ人が死ぬ。『疑うこと』で、守れるものもある。』

なんて世界だ、と思つた。

だが、これがサツキが今生きている世界の現実。

受け入れるか否かは問題ではない。生きたければ、受け入れるしかない。

サツキは、理性の命ずるままで、表情を凍らせて言った。

『あなたへの嫌疑は？？？総主の御子の誘拐未遂よ。』



12 (後書き)

今回はサツキ視点です。ある意味ダブルヒロイン。  
最先生が意外と優しい人で私もちょっと吃驚します。

体調、ほぼ完治です。熱も引きました！  
励ましのお言葉、本当に嬉しかったです。  
ありがとうございました！ラブ！m(ーー)m

「誘、拐…？」

佐波の表情のない顔に、少しの動搖が広がった。

その瞳孔の動き、仕草、口調に人間が嘘を付く時の癖を見つけようとしている自分がいる。

サツキはやるせなくなつた。

「…あなたが、火の中から真灯を助け出したのは事実よ。でも、それが偶然か故意か、私たちに判じる事は出来ない。それに」

「待つて下さい。」

初めて佐波が言葉を遮つた。

「なぜ”誘拐”だと?私には、どうにも突飛な話に思えてならないのですが。」

緊張の影を表情に落として言つ。

その言はもつともであるが、疑いの心を通してみれば、白々しくもある。

サツキは視線を下げ、冷静である為に一つ息をついた。

「順を追つて話すわ。四日前の夜…」

四日前の、あの火事の夜。

サツキは班長から、不審な動きを見せて いるらしき 漢樓庵の油役「あぶらやく」を見張るようにとの命を受けた。

油役とは行灯に灯油「あかりゆ」を注す役目のことだ。

基本的に世間とは真逆の時間感覚を持っているのが遊郭というものの。陽の入り、夫々「それぞれ」の遊郭から松明を片手に飛び出した油役たちが、街を彩る極彩色の紙燈籠に灯りを点したのを合図に、客を迎える大門が解錠される。

油役たちはその後も各客間を回り続け、灯りが決して絶えぬよう日夜通し働くのだ。

彼らには他にも、防犯や脱走防止、そして闇「ねや」での遊女男娼を客の横暴から守るという仕事がある。

回り番が外の警護ならば、油役は内部の監視役といったところか。ただ回り番は遊郭街全体で組織されたものであるが、油役は各遊郭が雇い入れている使用人だ。

班長が受けた報告によると、近頃その油役の一人に、勤務外の外出が増えているという。

自分の休憩時間に郭の外に出るのは自由だが、使用人や行商人の為に昼時解放している小門を通りの者は、誰であろうと逐一身元の確認と手荷物の検査を受け、それは事細かに台帳に記される。

その台帳を見れば、どこの遊郭の使用人がどのような用件で市井に出かけたのか、また、月に何回、どれくらいの時間かなどが分かるようになっている。

台帳役の調べによると、前月に比べて、その油役の外出回数は約一倍にも増えていた。

出向く用件も明確ではなく、それに気付いた他の油役が試しに後を

付けたが、撤かれてしまつたらしい。

普段真面目で実直な男であるが故に、疑いは深まり、ついに回り番の出番と相成つたのだ。

先日大きな捕り物があつた為、警戒を怠らない意味を込めて、本當ならば数人体制で見張りたいところだつたが、その日は月に一度の総主回樓「かいろう」の日。

遊郭街に軒を並べる郭の主たちが一つ箇所に集まり、総主である溟樓庵の主と会談する為に集められる日だつた。

溟樓庵は最古にして最大の郭「くるわ」だから、その主は自動的にこの遊郭街全てを束ねる”総主”となり、故に回り番の元締めも溟樓庵の総主ということになる。

遊郭が独自に雇つてゐる用心棒達の警護はもちろんあるが、さらにその周りを固め見回りに徹するのが回り番の仕事だ。

万年人手不足の回り番としては、月に一度のこの日が一番頭が痛い。回樓に掛け切りで警備の薄くなるその日を狙つて事を起こそうとする輩は大勢いるわけで、そちらの警戒を怠る事なく 時に力で解決しながら 街の秩序を守らなければならない。

この手の仕事に回されることの多いサツキとしてもさすがに「あと二人は融通して欲しい！」と班長に直談判したのだが、宛てがわれたのは公認相棒として認められているルツカただ一人。

もちろんルツカで不服な訳ではないが、体格からして規格外の彼とどうやつて”見張れ”というのか、サツキには酷く疑問だつた。

こうなればいつそ直接問い合わせてやろうかとも考えたが、回り番は遊郭で働く者たちの受けが頗「すこぶ」る悪い。

密告・囮「おとり」・尋問・拷問、その他必要であればどんな事でも躊躇わない、遊郭街の私警吏ともいうべき存在なのだから、鬱陶しいを通り越して恐れられるのも道理だ。

面と向かつて行けば不必要に怯えられ、掴みかけたしつぽを切られる可能性がある。

それにサツキは 非常に「都合主義だと分かつてはいるが その拷問紛いの尋問がどうしても好きになれない。

出来れば、何かしらの証拠を掴み、それを元に相手を自由に追い込みたかつた。

そうしてサツキが後手後手に回っている間に、この騒動は始まった。

恐らく当初より疑われていていた男は、回り番であるサツキの目が自分に付いていることに気付くと、突如懐から白刃を抜いてサツキに襲いかかつたのだ。

包丁、剃刀「かみそり」、簪「かんざし」の一本に至るまで厳重に管理された遊郭で、ただの油役が白刃を所持出来るはずもない。驚いて初太刀を避けながら、その間合いと刀身の長さから、白刃が狭い建物の中での斬り合いを想定した得物だと気付いた。

用意周到。その割に、男の動きは素人で、緻密に練られたであろう計画とのアンバランスさが際立つ。

闇雲に白刃を振り回し、壁に、柱に、障子に無惨な跡を残しながら何事かを狂ったように叫ぶ男に気付いて、部屋から遊女が顔を出す。悲鳴。それに呼び起こされるように次々に騒ぎが広まり、辺りは騒然とした。

騒ぎがこれ以上大きくなるのを防ぐ為に、サツキは相棒の名を叫んだ。

呼び声に返事はない。だが、確実に意図を汲んだ大男は、その巨躯に似合わず得意な潜伏を破り、白刃を振り回す男そのものに強烈な拳を打ち込んだ。

どんづ という重い音。

横の障子が男と共に吹き飛び、ついでにその向こうの壁格子を破壊したのが見えた。

いつもの通り容赦も思慮もない力加減に、騒ぎは一段と酷くなる。

内心ルツカに『物の大切さとお金』の再教育を本気で考えていたサツキは、いつの間にかすぐ側に迫っていた別の男の白刃に気付くのが遅れた。

真っ直ぐ突き出されたそれは、サツキに届く直前に、騒ぎで駆けつけた他の回り番の懐刀によつて防がれる。

礼を言う暇もなく、傾れ込むように打ち合いに突入するそちらを一旦思考から外して、ルツカが吹き飛ばした男を回収しようとするも、一足遅かつた。

運良く軽傷で済んだのか、男は転がるようにして外と繋がる大穴

壊された壁格子

に飛び出したのだ。

逃がすか！

サツキは自身もその後を追いかがら、咄嗟に叫んだ。

『誰か！そいつ捕まえて！…』

「……………そしてあなたが居た。あなたは丸腰で男を伸ばして、その後飛び出した白刃の男にも怯まなかつた。」

じつと佐波の目を見つめる。

疑われている事への嫌悪も、自身の功績に対する賞賛の色もない、ただ静かな瞳。

自分が何か巨大なものに挑んでいるような気分になつて、サツキは苦く笑つた。

こんな若い子に雰囲気で呑まれるようじや、まだまだね。自嘲したおかげで幾分か楽になつて、少し肩から力を抜く。

「これは火事の後にハツキリしたのだけど、あの時敬麻？」「けいま

「しん」を飲んだ遊女は、油役の男と懇意の仲だつたそつよ。白刃の男との因果関係は分からなイけど、”白刃”の手配は手引きを図つた遊女と油役の仕業と考えるのが妥当ね。」

「…恋仲、だつたのですか。」

ぽつり、と言葉が返つて少し驚きながら、サツキは頷いた。

「言葉も十分に交わせなイつてイイのにな。男女つてのは不思議だわ。」

内部の者であつても、行動を須「すべから」く管理された遊女・男娼との間に、逢瀬の隙など「えられない」。

油役の男と東館の遊女”鷦「かもめ」”の接点は、男が行灯に油を差しに来る、その僅かな時間だけだつた。

客に組敷かれ端べ愛しい女と、油差しの合間にそつと田線を交わす。たつたそれだけの、やるせない、辛いばかりの逢瀬は一陽期（一年間）以上続いていたそつだ。

事を起こすまでに思い詰めるのも、仕方のない話なのかもしれない。否、恐らく一人とも、その報われぬ恋に”油”を注いだ何者かによつて利用されたのだ。

一つ瞬いて、サツキは本題を切り出した。

「あの日は総主回樓の日だつた。月に一度、街に軒を連ねる遊郭の主達が、溟樓庵の総主と会談するの。

基本臥龍城「じこ」に滞在してイる総主が溟樓庵に訪れる時は、その御子である真灯と耶灯も同行するのが通例。あの晩も、もちろん揃つて来てイたわ。

ここから先は、真灯の証言よ。

真灯と耶灯は、総主が主達と会談してイる間は、いつも別室で作法

や学術を習つてゐる。

二人が講師を待つてゐると、『油役』の男が、部屋の行灯に油を注しに現れた。

男は渕楼庵に雇われて五年以上になる古株で、真灯や耶灯とも顔見知りだつた。

その油役に『総主が呼んでいる』と言われて、真灯はそれに従つて部屋を出た。

用心棒達も、油役の男の実直さを知つていたからつい氣を許し、真灯を率先する彼を見送つたそうよ。

一緒に働いていた他の油役達も未だに信じられない様子だし、よっぽど人望のあつた男だつたンだと思つ。

ともかく、真灯はその後すぐに階段下の物置に猿ぐつわで閉じ込められた。

男は『傷つけたりしないから大人しくここで待つていてくれ。次にここを開けて入ってきた男の言葉に従つて欲しい』と言つてすぐに立ち去つた。『

油役の男の顔を思い浮かべる。

細面で小柄な男。混乱で揺れる瞳は、泣きそうに歪んでいた。

サツキはその男を知らなかつた。

遊郭街に流れ着いて2年経つが、数千人規模の従業者・使用人達全てを把握しているわけではない。

でも、回り番にとつては知らない方がいい時もある。人となりを知つていれば、斬る時に躊躇いが生じるからだ。

知るなら最低限、名前と役目だけでいい。

どれだけ実直だらうと、勤勉だらうと、傾くのは一瞬だ。一度傾けば、もう元の位置に戻る事はない。

それを学んだからこそ、サツキはようやく『疑う』といつぱの仕事を受け入れる事ができたのだ。

「 時系列でいうとこの直後、男が何食わぬ顔で仕事に戻った。その時から、命を受けた私達が見張りだし、それに気付いた油役が取り乱して白刃を抜いた。

その後はさつきの話の通り。もう一人の白刃の男と共に捕らえて、二人とも遊郭街の地下牢に連行され、人手が集まり次第尋問を開始する予定だった。 火事が起ころまではね。」

そうだ。あの火事さえなければ、今頃は全てが明らかになっていたかも知れないのに。

こんな風に、傷心の少女を問いつめる事もなかつたかも知れないのに

思わず緩みそうになる心をぐっと引き締める。

まだ、ここからが本番だ。

### 13 (後書き)

更新、大変遅くなりました。（土下座）  
もう少しサッキ視点が続きます。

「私たちが白刃の男達を捕らえてすぐに、西館裏手から火が上がった」

最初にそれに気付いたのは、やはり灯油を各客間に差して回っていた油役だった。

男が戸の隙間から流れ込む黒煙に驚き、慌てて戸を開けた時には、既に一部屋丸ごと火の海と化していたという。

火は瞬く間に燃え広がり、火事に気付いた者達の悲鳴や怒声で辺りは混乱に包まれ、サツキ達回り番は須「すべからく従業者と客の誘導・救護に充てられた。

「火事を起こしたのが真灯を攫おうと画策した輩達かどうかは、今のことろ確証はないわ。でもそう考えるのが妥当かもしれない。男達は火事の混乱に乗じて真灯を街の外まで連れ去ろうとした…。どちらにせよ、とんだ失策ね。真灯が言つには、真灯を連れ出そうとした男は、崩れて来た天井の下敷きになつたみたい」

「…天井の下敷き…」

今まで黙つて聞いていた佐波が、ふと言葉を洩らした。  
彼女はまるで自分へ問い合わせているかのように、ゆつくりと数回瞬き、

「私が真灯さんを見つけた時、すぐ側に崩れ落ちた柱の下敷きにな

つた男の死体がありました。：腕に古い刀傷が

「…多分そいつね。燃えちゃって何も残ってないインだけど」

腕に古い刀傷。もし彼女の話が本当なら、ピースの一つになるかも

しれない。

確りとその情報を頭に叩き込みながら続けた。

「真灯が煙に撒かれて動けなくなつていったところに、あなたが現れた。あなたは真灯を火の中から連れ出し、その際に怪我をして、臥龍城「こい」に運ばれた。？？？「こい」までが今分かつている現状。ここからは、推測が混じるわ」

サツキは息を吸つた。

「三日前、三体の他殺死体が川から上がつたわ。そのうちの二体は、火事の晩に捕らえた白刃の男達だつた」

「…！」

「誰かの手助けがあつたのかもしれなイけど…火事に紛れて地下牢から脱出したンだと思う。でも結局、何者かに斬り捨てられた」

見張りとして回り番の人員を割いて一人置いていたが、こちらは燃え残つた地下牢で死体が見つかつてゐる。

雇われて日の浅い男だったが、気の良い陽気な性格が皆に好かれていた。

脳裏に浮かんだ彼の笑顔を胸に刻んで言つ。

「問題は三体目の死体よ。

あなた、布津の豪族家の使用人ね

？」

「は、い…？」

「調べさせて貰つたわ。三つ目の死体は、家印の帶宛「おびあて」

をしてイた。　これに見覚えは？」

サツキは、懐から懐紙を取り出すと、そつと畳の上に置いた。佐波の視線がそれを見留めるのを確認してから、懐紙を開く。その途端、

「　　っ！」

今まで戸惑いの表情だつた佐波の顔色が明らかに変わつた。驚愕。そして困惑。まるで哀願するような視線を向けられて、サツキはそれをしつかりと受け止め、言つた。

「これは、川から上がつた死体が持つてイた帶宛よ。これが何か分かるわね？」

「……わたしの仕えている……豪族家の家印、です……」

崩せんと答える佐波の目が、事実を拒むかのように何度も瞬く。

帶宛は、誰しもが持つ衣服の装飾品の一つだが、特に”家”の使用人達にとつては身分を証明する為の唯一の物でもあり、もし失くしたり、盗難にあいでもしたら、即お役御免とされるほど重要な物だ。その為帶宛は、普段から肌身離さぬように、家印を象つた輪の中心に開いた二穴から帶を通して、身体に固定出来るようになつてゐる。命綱とも呼べるその帶宛を、売買するような輩も時にはいるようだが、裏に掘られた番号から個人の特定が可能な為、そのような危険を冒す者は少ない。

もちろんそれを知つてゐるからこそ、これが物証になりえるのだ。

佐波が唇を震わせて、言葉を絞り出した。

「これは…誰の 誰の持ち物ですか？なぜ、死体が…」  
「…身元の確認はまだ済ンでイナイけど、時機に分かるわ。宿の方にイたあなたの雇い主 豪族家嫡子と使用人達は、警吏の方で足止め中よ。事件当日遊郭に来てイた三男と数名の使用人が行方不明になつてゐるみたイだけど。」  
「行方不明…！？」

佐波の声が震えた。

ようやく自分の置かれている状況が読めて来たのもあるだろうが、その言葉には仲間を純粹に心配する響きがあった。

サツキは同情心を抑えるのに苦心しながら、平然を装い言つ。

「正直、状況だけ見ればあなたもあなたの雇イ主も限りなく黒に近イ存在よ。他所の使用人が火の中に飛び込んで命がけで子どもを救うより、それが崩れた”計画”の一部だつたと考えた方がしつくり来るわ」

「…つまり、私が白刃の男達の仲間で…真灯さんの誘拐の一役を担つてゐると…？」

「トイうより、あなたの仕える豪族家が”主犯”じゃナイかつて話ね

「な、なぜ！」

「なぜかは私も知りたイわ。？？？それより、あなたよ

佐波の動搖に揺れる瞳を、ひとり、と見つめた。

「あなたがこの計画に加担してゐる証拠を探すよりも、加担して”イナイ”証拠を探す方が遙かに難しイ… 分かるわね？」

悪魔の証明。サツキの世界では、時にそう呼ばれる”消極的

事実の証明”だ。

“ある”ことよりも“ない”ことを証明する方が困難を極めるのは、どこの世界でも同じらしい。

数秒、数十秒の沈黙が二人の間に落ちる。

じりじりとした緊張感に包まれた部屋は、驚く程静かだ。

「ぐ、とどからかの喉が鳴る。

言葉を発しようと口を開けた佐波が、やはり思い止まるように口を閉じ、それを数度繰り返した後、ようやく喉を押し開いた。

「…私には…私には、サツキ様の意図が…分かりません」

吐息のような、掠れた声だった。

言葉の意味が分からずに眉根を寄せたサツキに、佐波は責ざめた顔で微かに笑つた。

「…あなたのお話から察するに、私は嫌疑の渦中にあるようです。しかも、状況的に私が疑われるのは道理。なのに、あなたはきちんと状況を説明してくれて、更には私の身には不相応なこのような好待遇を許している。…正直、それが善意なのか、何か作為あつてのことなのか…」

言いかけて、ハツとしたような顔になり、すぐに首を垂れた。

「お許し下さい、疑つていいのではなく…。ただ今の話を聞いてます…私がこんなに良くしていただいている事に疑問を…それに、サツキ様のお気遣いにも…? ? ?」

「…“善意”は信じられない?」

どうやら、自分が思うよりも佐波は色々と考えを巡らせていったよう

だ。

そう問うと、彼女は更に申し訳なさそうに頭を垂れ、

「…私の生まれ育った布津では、旧体制の身分制度が未だに根付いているところが多いのです。私のお世話になっていた豪商家のよう、皇都との取引がある裕福な商家などはかなりマシですが、未だに使用人を”縷る”として家畜同様に扱う家もあります」

「…」

知らぬ単語に思わず問い返すと、佐波は一瞬固まり、すぐに「ああ」と納得の声を上げた。

「サツキ様は、皇国「このくに」の生まれではなかったのでしたね。」縷る”は身分階級の最下級の別称です「最下級…」

つまり、奴隸か。

佐波は「クンと頷いた。

「今は身分制度は解消されていますが、皇帝のお膝元である皇都を離れると、使用人を”縷”と扱う場所も多く…ええっと…だから、サツキ様を疑うわけではないのですが…どうしても…その」

「…自分が”力技”の尋問も受けずに、怪我の治療を受けていくことが不思議だと…？」

「…ハツキリ申しますと…不思議です」

サツキは思わず呻きそうになつた。

正直、そこを疑問に思われる少々…困る。

実際、佐波の身元が割れた時から、回り番の中には「指の数本でも

落としてやれば”本体”について何か喋るのではないか」と口にする者も少なからずいた。

確かに、ここまで状況が揃っているのなら、その方が確実だろう。もし冤罪だとしても、所詮は一介の使用人。潰してもどこからも文句はでまい。…それが皆の概ねの意見だつた。

だがサツキにはそれを是と出来なかつた。

サツキは佐波が火の中に飛び込んだ姿も、大怪我をしながら真灯を助けた姿も知つてゐる唯一の人間だ。

あの時、怪我で意識の朦朧としていたであろう佐波が、真灯の頭を撫でた場面がどうしても頭から離れてくれない。

それだけで彼女を白だと言い張る気はない。だけど、拷問の末に潰れた彼女を見たくなかった。

悩んだ末に、班長に「仮にも総主の恩人である」ことを進言して、新たな証拠が出るまでは”実力行使”を控えるように求めたのはサツキだ。

班長はシドロモドロで説明するサツキを鋭く見据えながら、けれど最後には「ならお前が全ての責を受けろ」と尋ね役を一任したのだ。  
???多分、班長も私の甘さに気付いてる。気付いていて、それで  
も任してくれた。

だからこそ、佐波には自分の甘さを見抜かれたくなかった。  
死んでいった仲間の為にも、サツキたちの関係は対等ではなく、あくまでも佐波は疑われる立場なのだと、心に刻んでもらわねばならない。

「…次からは警吏も含めての尋問になるわ

複雑な顔でサツキがそう言つと、佐波は今度はしつかりと???泣きそうな瞳を歪めて微笑んでみせた。

全てを分かつているような、深く屈いた瞳。

「はい。覚悟は出来ております。ただ？？？」

その瞳が翳る。

「私がその…三人目の死体と面会する」とは…出来ないのでしょうかね」

「…それは無理ね」

その方が身元の確認は早いだろうが、もし本当に犯人側だった場合、変に情報を搔き回されても困る。

佐波は何事かを考えるように黙り込み、そつと問つてきた。

「…他の使用人達は、どのように過しているのでしょうか  
「軟禁状態だけど…今のところ、不審な点はないそうよ」

サツキがそう言つと、佐波はホッとしたように肩の力を抜いた。  
そして数回、自分を落ち着かせるように瞬いた後、背中の傷を庇いながらゆっくりと頭を下げる。

「私の証言で、彼らの処遇が良くなるのならば、どんなことでもお話します。どうぞ宜【よ】しなに」

「それはもううん…」

望むところ、と言ひかけて、ふと外の様子が賑わつてゐることに気が付いた。

佐波の部屋は様々なことに配慮した結果、臥龍城の離れに用意されている。

ここまで賑わいが聽こえることは、そろそろ食事時なのかも

しない。

どうやら、随分時間が経っていたようだ。

「…でも、とりあえず一旦私は下がるわ。診療もあるだらうし…」

診療の邪魔はしない」とは最初に最と約束している。

一先ず一旦下がつて出直すかと考えていたサツキの耳に、廊下の向こうから女性？？？早音の高い制止の声が届いた。

「深【しん】様…！お待ちください…」

ドカドカとした足音にハツと顔を上げたサツキは、事態に気付くと思いつきり顔を顰める。

よりもよつて、あいつか！

瞬時に浮かんだ”出来れば絶対会いたくない”顔に、腰を浮かした、その瞬間。

障子がぴしゃっと音をたてて開かれた。

「公務である！罪人を引き渡せ！」

元の世界でサツキが一番嫌いだったものは、勉強だった。資格の為に学校に通つてはいたが、生まれもつての行動派であるサツキは、教科書よりも実地で学ぶ方が性に合つていたのだ。だがそれを口にしたところで『勉強が出来ない人間の僻み』にしか聴こえないことは、9年間の義務教育+3年の高校生活で骨身に染みていた。

試験然り、就職然り、結婚然り…。

兎角「とかく」人間とは紙に縛られて一生を終えるのだな…と軽い絶望を感じながら、それでもサツキは平凡に生きてきた。ある日、突然その平凡を奪われるまで。

この世界に来てからのサツキの奮闘は筆舌尽くし難いものであり：長くなるので割愛するが、この世界に来て、サツキの”嫌いなもの”ランキング”の順位に変化が起つた。歴代一位の『勉強』を蹴落とし、見事トップに輝いたのは

「お前だな。件『くだん』の使用人というのは」

警吏「『いつ』のような、『権力者』だ。

聞く者を凍らせる、”権力”を深く染み込ませた高圧的な物言い。公服である灰藍色の詰め襟を纏い、短髪を清潔に切りそろえた、つり目の中。

男はその鋭い眼光を、部屋の中の一人 サツキと… 主に佐波に向けると、確認ではなく断定してそう言い放ち、止める間もなくずかずか部屋に上がってきた。しかも土足で。

突然の来訪者に佐波は驚きで瞠目していたが、反対にサツキは怒りの所為で痛み出したこめかみを押さえて目を閉じた。自分を落ち着かせる為だ。

良くも悪くも直情型のサツキは、怒りに冷静な判断力を奪われることも暫しある。

言つてはいけない言葉をつい口走つてしまったり、口が出る前に手が出たり…。

小学校中学年頃、そんな自分が嫌で幼なじみに相談したら、その彼はサツキに良い方法を教えてくれた。

”怒りを感じたら、まず目を閉じて10秒数える事”

その間に呼吸を意識してゆっくりにし、怒りを感じる相手や事柄をしつかりと見つめる事。

どうして自分が怒ったのか、その原因となつたものは何なのか。いつまでかかってもいいから、目を背けずにきちんと原因を探す事。本質で氣の短いサツキには算数のテストより難問だったが、諦めずに何度も何度もそれを繰り返すうちに、少しずつコツが掴めてきた。自分の怒りのポイントと原因さえ分かれば、対処する方法も事前に考えていられる。

我を忘れる直前にそれを条件反射で思い出せば、事態を悪化させずにする。人を傷つけずにすむ。

『自分の怒りに他人を巻き込んじゃいけないよ。サツキさんが怒っているのは、サツキさんの為なんだから』

嫌になるくらい、自分とは正反対の冷静な幼なじみのその声を思い出す度に、サツキは自分の感情制御力の未熟さを思い知った。

それは離ればなれになつた、今でも。

しかし、何事にも例外といつものがある。

例えばこのように、10数える暇もなく男の手がサツキを横切り、唚然とする佐波の着物を引き裂く様にして暴いたりしたら？？？それは明らかに”例外”だ。

「ゴッ！」

サツキは迷わず男の顎に拳を打つた。

男が呻いてよろめき、膝をつく。脳震盪を起こしているのだろう。女の力で男を一撃に伸すなんてことは難しいが、知識さえあればやれないこともない。

痛む拳をもう一度握り直して、サツキは怒髪天を突く勢いで叫んだ。

『死に晒せこの変態！－！』

「さ、サツキさん…！？」

突然現れた男に着物を暴かれて一番動搖しているであろう佐波が、開けた着物を怪我をしてない方の腕でかき抱きながら驚愕の声を上げる。

それはそうだ。サツキが今殴つたのは、皇国「このくに」の公職…警護府の警吏「けいり」。

つまり権力を行使する権限を「えられた『権力者』だ。

彼へ振り上げた拳は、そのまま皇国に対する反逆とみられておかしくない。

しかし。

だからといって警吏達「このくら」の粗暴を見て見ぬ振りすること

は、サツキには出来ない。

正義感なんて高尚なものじゃなく、感じているのは胸が焼けるくらいの激しい怒り。

サツキは、佐波の為でも、他の誰の為でもなく、『自分の為』に怒っているのだ。

「… つくれつ！ ばんじん蛮土人ばんじんが… ! !」

頭を抑えて呻く男は、それでも鋭さの落ちない眼光でサツキを睨み上げた。

ちなみに『蛮土人』とは、皇國の人間がよく使う、他國の人間を表す蔑称だ。

比較的文化も國の機能も他國より発達して文明的な生活を送っている彼らは、暫しこのように自分より劣るモノを卑下する。否、それが劣っているかどうかではなく、自分たちと違うというだけで差別の対象とするのだ。

他国から流れ着いたサツキも、もちろん彼らの中では”差別”の対象であり、『「イコール」自分たちよりも劣る生き物』という解釈になるのだと、同じ様に他国から流れて来た回り番の先輩から教えてもらつた。

『オレはそんな当たり前のこと聞くお前さんが不思議だがねえ。それとも、お前さんの故郷「くに」じゃあ違ったのかい？』

老獴な彼に笑つてそう言われて、サツキは己の浅はかな問いを恥じた。

サツキの世界にも”差別”はあった。

だが、サツキは自分が差別される側に立つたことが一度もなかつた。つまり、そういうことなのだ。

見下されれば悔しく、嗤われれば苦しい。当たり前な事實を、サツキは我が身に降り掛かるまで考えた事も無かつた。

サツキは、自分を激しく睨む男を睨み返す。

「女の子の胸[元]じじ開けるなンてビリイリつもり！？」

「女かどうか分からなかつたから確かめただけだ！」

「ふつざけんじやなイわよ！どつからどう見ても女子でしょうがああ！？」

「見ても分からなかつたと言つてゐるだろつ！？」

怒声が飛び交い、今にもお互ひ殴り掛からんばかりに罵合ひを詰める一人を、完全に取り残された佐波が呆然と見ている。

内心男の『見た目じや女と判断出来ない』発言に小さくショックを受けていたりもするが、そんなことよりサツキを止めなければと我に返り、叫んだ。

「そ、サツキ様！ダメです！相手は警吏様ですよ！？」

「警吏だらうとさつきのは完全アウトよ！てかあなたも怒りなさい！怒るべきよ！！」

「いいや分別を弁「わきま」えてないのはお前の方だー身の程を知らんのか！？」

「じゃかああしイイイー！痴漢が身の程を語つてんじやなイわよこの『ボケなす』！」

「『ボケナス』……なんだ『ぼけな』……いや違うー痴漢だとー？お前、公職の俺を痴漢呼ばわりするとは」

「『お巡りさん』！痴漢ですーー！」

「痴漢じゃない！……くそつなんなんだ『オマワリサーーン』って！」

「あんたとは真逆の人よ！」

「そんな口クデナシを呼んでどつするー！」

「口クデナシはお前じやあああーー！」

どんづん下らない応酬になる一人を、かける言葉も無く佐波は眺めた。

そしてそろそろ「ぱーかばーか」と最低知能レベルの口喧嘩が始まりそうな頃合いになつて、ようやく口を挟む機会を得た。

「あ、あの！…警吏様？」

「イイのよーにンな馬鹿に”様”なンか付けなくとも…」

「貴様…どこまで俺を侮辱する気だ！？今ここで斬り捨てる」と  
だつて出来るんだぞ！」

「その前に私があんたを『なます切り』にしてやるわよ…」

「だから蛮土語を使うな！妙に気になるだろうが！」

再び始まつた口論…といつよりも掛け合い漫才に、佐波は困り果てながら次の機会待つていたが、ふと耳を澄ませた。

部屋の怒声で聞き取り難いが、廊下を歩いて近づいてくる足音がする。

気付いて慌てて一人にそれを知らせようとした瞬間、開いたままの障子から、男の姿が現れた。

「警吏、どうなつている…」

言いながら、こちらも土足で上がり込んできたのは、中年の男だった。

小肥りな身体を立派に誂「あつら」えられた上級の公服に包んでいるその男は、じりりと部屋の中を見渡すと、ぴたりと口論を止めて硬直している警吏とサツキに視線を向けた。

「なんだ。さつさと罪人を引き立てんか…こちらも暇ではないのだぞ…」

男は苛立つた口調でそう言つて、次に再び呆気にとらわれてゐる佐波に田を向け、そして、ふん、と鼻で笑う。

「その男か女か分からんやつが、そうだな。おい警吏、早く捕らえろー。」

「ちよつと……ちよつと誰よあれー。」

突然現れたあからさまに嫌いなタイプの男に、サツキが慌てて警吏の男の胸ぐらを引き寄せ囁く。

男の登場は警吏にとつても好ましいものではなかつたのか、彼は小さく「だから早く差し出していればいいものを……」と愚痴りながらも、サツキにだけ聽こえる様に低く囁き返した。

「…清州「きよす」様だ。皇国国護府の役員らしき…」

「いやぐうふ？」

「軍部だ」

「軍部…？」

国内の事件に、なぜ軍部が絡んでくるのか…。

第一、仲の悪い代名詞としても使われるくらい険悪な警護府と軍部の人間がなぜ行動を共にしている…？

極めて不審だが、とりあえずは田先のことだ。

サツキは 本当に死ぬ程嫌だつたが 膝をつき形式的な礼をとつた。

「清州様。本日は「足労頂き、感謝いたします。しかしながら…」  
「ふん。お前、売女か？」

いつもよつと割増で整つた声を発したサツキの言葉を、男 清州が、まるでサツキの言葉など耳に入らぬという風に遮つた。

「…………は？」

「売女かと聞いていい。」

敢えて聞き返してやつたといつのに、ずけずけと問い合わせ重ねて来た男は、サツキの身体を嘗める様に見定め、下碑た笑みで口を歪ませた。

「売女なら、買つてやるか。丁度獵犬に雌犬を死てがおつと考えていたといつよ。先頃は盛つて煩いからなあ。」

よつにもよつて、そんな卑猥な会話から切り出すとは、恐れ入る。

怒り故に一瞬で血の氣が引き、次いで燃え上がる様に血流が早くなるのを感じながら、けれどサツキは懸命に平静を装つた。

「こんなところで不興を買つても、いかには何の利もない。とにかく今は男を機嫌良く喋らせ、ここに来た理由と目的を聞き出す事が先決だ。」

額に青筋を立てながらも、10秒ルールで怒りを押さえ込んだサツキは、苦労して笑みの形にした口から次の言葉を切り出そうとした。とりでいたはずの佐波だった。

しかし、サツキの代わりに男に答えたのは、先ほどまで呆氣

「『売女』は蔑称でござります。清州様、溟樓庵[ミンロウナン]では、『遊女』または『娼婦』と。」

静かな声だった。

責める色もなければ、怒りの色もない。

ただ事実のみを伝える彼女の言葉に、清州は一瞬、ぽかんとした顔をした。

しかしあがて佐波の言葉が意味するところに思い至ると、足先から頭の先まで這い上がつて来たであろう怒りにみるみる顔を赤くし、咄嗟に懐に差していた扇子を佐波に投げつける。

「売女を売女と呼んで何が悪い！ 罪人の分際で俺を愚弄するとは！」

引き攣れた声で叫ぶ男。

扇子の飾り金を受けて出来た佐波の頬の傷からうつすらと血が流れる。

それを見て、彼女の台詞で硬直していたサツキはようやく金縛り状態から解かれると、信じられない展開に目を剥いた。

な、何事！？

隣で同じ様に警吏が目を剥いている。

「正気か！？」と今にも叫びそうな口をぱくぱくさせて、同意を求める様にサツキと視線を交わした。

ちよ、何この最悪な展開！

混乱で打ち震えながらも、サツキが慌てて男の怒りを鎮めようと謝罪の言葉を口にしようとした、その直前。

再び佐波が口を開く。

「悪い悪いの問題ではございません。ただ、間違つてると申し上げていいのです」

毅然とした物言い。

頬の傷に触れる事もなく、彼女は厭に据「す」わった田で清州と真っ向から対峙していた。

今度はサツキが呆気にとられる番だつた。

先ほど警吏に着物を暴かれた時ですら文句の一つも言わなかつたといつのに、なぜ直接自分が受けた訳でもない清州の言葉にこうも反応しているのかさっぱり分からぬ。

分かるのは、今、とんでもなく拙い方向に話が転がつていつているということだけ

男は怒りに顔を赤く染めながら怒声を上げた。

「警吏ー！」の塵虫の腕を斬れ！

やはり、とこゝか、この上なく権力者としての腐り具合を發揮した清州の台詞に、サツキはぎくりと震えた。

笑い事ではない。冗談でも、脅しでもなく、清州は本氣で言つている。

だとすれば、もしかして本氣で、今この場で佐波を斬り殺すつもりなのかな。

そこまで皇國「！」の威力の権力は 権力者は腐っているのか。

あまりに理不尽な清州の態度に愕然として声も出ないサツキの代わりに、こちもよつやく不穏な事の流れに気付いたのか、警吏が慌てて返答をした。

「ーしかし上部から

「煩い！生きてさえいればいいのだろう！腕を……いや、耳も、鼻も、全て削げ！今すぐだ！」

口角に泡を飛ばし、顔を怒りの赤で染め上げた清州が、駄々をこねる子どものように地団駄を踏む。

「付いていけない……！」

自分で手を下さず、人にやらせようとしている時点で既にムカつきを通り越して呆れてしまつ。いや、自分をされても迷惑だが。

と、とにかく、今はこの男の怒りを鎮めないと……！

佐波と共に土下座してどうにか許してもらえないものだろうか、と現実逃避にも甘い事を考へたサツキを裏切る様に、地団駄を踏んでいる清州をじつと見つめていた佐波が、その視線を男から外す事もなく、静かに、けれどよく通る声を上げた。

「警吏様。どうぞお斬りください」

ギョシとして佐波を見る。名を呼ばれた警吏も同様だ。

彼女はその言葉の意味を吟味出来ないでいるサツキたちなど眼中に無い様子で、不思議な程暗く澄んだ瞳で言った。

「私の腕を斬れば……顔を削げば、私があなた様に謝罪し命を乞つとお思いですか？ならば、お斬りください。あなた様にはその”権利”がある。そうでしょう？」

でも、と佐波は目を細める。

“権力”では、私に謝罪をせることは出来ない。“権力”では、私を殺すことは出来ても、意志を変えることは出来ない

「お、おのれ……！」

これまた一瞬呆気にとられた男は、しかし今度はすぐに佐波の言葉の意味を“正しく”理解すると、サツキが反応するより早く佐波の胸ぐらを掴み上げた。

「塵虫の分際で、何をほざくか！」

無遠慮に持ち上げられた佐波は、背中の怪我を意識してか一瞬痛みに顔を顰め、しかし次の瞬間、見る者を震え上がらせるような鋭い眼光で清州を見上げ、叫んだ。

「“権力”では何も傷つけられない……！」

「何！？」

「売女と蔑まれようが、犬と交わろうが、遊女が誇り高き女ひとであるように！何者にも、その尊厳を奪う事は、出来ない……！」

既視感。

サツキは呆然としながら、どこかどこかのこのような光景を見た事がある気がしていた。

あれは確か 風路十「かざると」のどこかで遭った、戦士の最期。

命果てるまで戦つた男は、最期に咆哮を上げた。

まるで歓喜に震えるような、それは命を燃やす者の叫び。

戦う事で「」の存在を明らかにする、生まれもつての戦士の気質

「し、痴れ者が」

サツキ同様、佐波に呑まれた清州が掠れた虚勢を張つた。  
しかしそれを、佐波は決して逃がしはしない。

「清州様」

佐波に名を呼ばれて、男がびくりと身体を揺らした。  
怯えている。

男の三分の一程しか生きていかない小娘に。  
奴隸とそつ変わらぬ、一介の使用人に。

胸ぐらを掴んだまま硬直した男の顔を至近距離に見据えながら、佐波はうつすらと、甘い笑みさえ浮かべた。  
場に酷く不似合いな、蕩けるような眼差し。  
その場にいる全員を呑み込んで、彼女はそつと囁いた。

「私を殺しなさい」

そして思い知ればいい。  
己の誇る”権力”の無力を。  
の重大さを。

## 15 (後書き)

警吏の彼はサツキの『』(日本語)をどのように変換して想像しているのでしょうかね(笑)  
なんだかんだでまだ続きます!

4/12後半改正しました(汗) 内容は変わっていませんが…

まずい。明らかにまずい。

唾を飲み込む音まで聴こえてきそうな、酷く緊迫した空氣の中で、サツキはようやく我に返った。

そして必死に己の冷静さをかき集める。

何度瞬こうが覆されない、目前の光景。

男に胸ぐらを掴まれ、身体を半分宙に浮かせながらも、佐波は決して相手から目を逸らせない。

食らいつく様に、とは少し違う。相手が食らいついて来るその一瞬を狙う、老獴な獣のような目だ。

サツキの場所からでは男の表情までは伺えないが、その肥えた身体がぶるぶると震えているのが”怒り”の所為なのは明らかだった。

考え方、考え方、考え方…

なぜ警吏が軍部のお偉いさんと一緒に来たのかなど、今はもうどうでもいい。

問題は 大変腹立たしいことに 一の部屋にいる全ての命の与奪権を、この頭の悪い鬼畜セクハラ親父…もといお偉いさん、清州「きよす」が握っていることだ。

どうすれば男の手から佐波を取り戻すことが出来るだろうか？

男の腰ある飾りのような豪奢な刀をチラチラ見ながら必死に考える。

あれに男の手が伸びたら、お終いだ。佐波は切られる。元より怪我人なのだ。死なない理由を捜す方が難しい。

ならば、先に刀を奪うか？　そんな事したら、明日を待たずにならぬ。

自分が晒し首だ。

では口で説得する？…あれだけ激昂した男を？無駄に氣位が高く、見るからに陰湿そなあの男を？…何と言つて？

自分の手の先から熱が消え、小刻み震え出したのにも氣付かず、サツキは額にだけ意識を集中させていた。

…そもそも、なぜ佐波は男に逆らつた？

権力者を嫌う自分ですら、ここに生きる為には彼らに平伏さねばならないことくらい知つていて。

佐波はその年齢に似合わず、礼儀正しい謙虚な子だ。その常識は身に沁みているはず。

気が短いと自負する自分ならともかく、彼女がキレるなんてよっぽど…

ふ、とサツキの脳裏に、これまでの佐波の行動や言動が過つた。

氣落ちした、生氣の薄い顔。

容疑者だと突きつけられても動搖をみせず、自分が拷問を受ける可能性ですら、青い顔で笑つて受け止めた。

まるで……そうだ、まるで、この世のことなど、もはやどうでもいいと言わんばかりに

あの娘の探し人が、すでにこの世にいなかつた。それだけのことだ

「う、」

りん、と過った、早音が聞いたという最の言葉。

それから閃き導き出した答えに、サツキは思わず小さく呻いた。

まさか…まさかあの子、ただ単に血棄「やけ」になってるだけ…！？

よ、と足下がよろけそうになる。

だがそう考えると、彼女の今までの行動が理解出来る気がした。佐波はサツキがこの部屋にきた当初から、多分、冷静といわれる状態ではなかつた。

恐らく最初から、キレていた。

でもそのキレ方があまりにも静か過ぎて、他からはただ氣落ちしているかのように見えていたのだろう。

地下をたゆたうマグマのような激情を一気に噴き出させた切っ掛けは、間違いなく清州の言動だ。

その何が彼女の逆鱗だつたのかまでは分からないが…

きっと佐波は、全て分かった上でやつてこいる。上に逆らひ事の意味も、その後の自分がどうなるのかも。

だから尚のこと質が悪い。

いつの間にか思考が佐波を助け出すことからずれていふことにも気が付かず、長考していたサツキは、廊下から聴こえて来る幾人もの足音で我に返つた。

しかし、その音で我に返つたのはサツキだけではない。

「…お、のれ…痴れ者があああ…」

佐波の胸ぐらを掴んでいた男が、硬直から解き放たれ、佐波を

佐波を、力任せに障子に投げ飛ばしたのだ。

声を上げる暇もなかつた。

佐波の軽い身体は障子に叩き付けられ、その衝撃で障子の枠組みごと廊下に投げ出された。

どこからか甲高い悲鳴が上がる。足音がバタバタと近づき、騒ぎを聞きつけて現れたであろう使用人達が、壊れた障子の上に力無く横たわる佐波の周りを囲んだ。

「それを殺せ！」

助け起こそうとした使用人達を、清州の恫喝が止める。

びくりと動きを止めた使用人達を横に放るようにしき飛ばし、ド力ドカと佐波に近づいた男は、呻いて意識を浮上させた佐波の腹に激しい蹴りを入れた。

「がつ」と空気を吐き出して、佐波の身体が廊下を飛び出し、そのまま向こうの中庭に転がり落ちる。

乾いた芝の上に落ちた佐波が、身体を折り曲げて激しく咳き込むのが聴こえて、サツキはようやく震える身体を動かせた。

「佐波……！」

駆け寄りうとしたサツキの腕を、横で同じ様に放心していた警吏が掴んで止める。

驚いて見上げると、彼も驚いたような顔で自分の手を見て、そして忌々し気にその手を振り払い言った。

「お前が行つてどうする！もう取り返しがつかないことくらい」

「関係なイわよー」

「聞け！」

警吏がぐいっとサツキの肩を掴んだ。

力加減の無いそれに苦痛で顔を歪ませるサツキになど構わず、男は低く諭す様に言ひ。

「…お前が出ても、死体が一つから二つに増えるだけだ。それくらいは分かるだらうー」

最後の言葉は、懇願のようにも聽こえた。

緊張と動搖を隠しきれない警吏の表情に、サツキは体中の血が一気に下がるのを感じる。

たすけられない。

女の悲鳴が上がる。中庭に降り立つた清州が、地面に転がる佐波に更なる暴行を加えているのだ。

騒ぎで集まり出した使用人達は、何事かと口々に叫びながら、怒り狂つて少女を蹴り殴る清州の姿を認める。皆石の様に硬直した。男の召物から彼が公職であると察した全ての者は、彼に逆らうことの意味を知っている。

そしてその怒りを買つた少女を、もう助ける事が出来ないことも。

なぜ、こんなことに。

庭から男が佐波に暴行を加える音が生々しく聽こえて来る。

呆然と震えながらそれを聞く事しかできないサツキの横から、幾ばくかの躊躇いの後、警吏が飛び出す様に清州の元に駆けた。

「清州様…どうかそれ以上は…上部から罪人を”無事に”運ぶ様にと申し使つております！」

警吏は芝の上に膝をつくと、平伏して叫んだ。

同じ公職といえど、その位は格段に違う。

さすがにここにいる他の者と同じ様に斬り捨てられたりはしないだろうが、それでも自分の職を失う覚悟は必要だつた。だが、震えながら頭を下げる警吏の言葉も、男の激昂を治めることは出来ない。

「知つた事か！」

吠える様に叫んで佐波の髪をぐいっと引っ張り頭を上げさせると、思つままに殴る。

もはや受け身も取れない佐波の身体は、人形のようじてしゃりと地面にたたき落とされた。

再び警吏が声を上げる。

「清州様…これは左相様のお言葉であったはず…どうぞ、お言葉を違えるようなことは…！」

その言葉に、男の動きが一瞬止まった。

そして苛立たし氣に地面を何度も踏みしめると、また佐波の胸ぐらを引っぱり上げ、ぐつたりしている彼女に唾を飛ばして叫んだ。

「命を乞ふ…俺の足を舐め、己の指を噛み切り差し出せ…お前のような屑でも、これが最後の慈悲である」とくらべ分かるだろつ…」

…例え命を乞ふたとして、今の佐波には己の指を噛み切る程の力も残つていまい。

一日瞭然の少女の痛々しい姿に、誰もが言葉を失い、緊張して成り行きを見守るしかなかつた。

けぼ、と佐波の口から赤い血の固まりが流れ、その口元が震える。

「…と、は…」

荒い吐息のよくなが細い声が、この地獄のような光景には酷く不似合いな、明るく美しい庭の中に落ちた。

「…ひと、は、…み、な……とう、…とい…」

サツキは己の耳を疑つた。

今、佐波はなんと言つた？

掠れていて、苦痛に歪んだ声は聞き取り難かつたが、全神経を集中させていた耳には、確かに聞き取れたはずの言葉。だが肝心のその意味が理解出来ない。

いや、意味は分かる。分かるはずなのに

…ひとは、みな…

目の前の光景と、今しがた佐波が放つた言葉を完全に合致させるのに数瞬を要し、

理解した瞬間、ガツン、と頭を叩かれたような衝撃がサツキを襲つた。

人は皆、尊い

佐波の言葉は、命乞いでもなければ、男を呪う言葉でもなかつた。それは、酷くシンプルな思想。

勉強は嫌いだつたが、その思想を表す名詞くらいは、サツキも知つてゐる。

『人間が、一人の人間として人生をおくり、他者とのかかわりをとりむすぶにあたつて、決して犯してはならないとされる権利』

「…『人権』…？」

でも、なんで今、この場でそれを…？

あまりにも場違い過ぎる佐波の言葉に、当然のように浮かんだ疑問。それに、更なる疑問が重なつた。

そういうえば…今まで考えた事もなかつたが、この国には…この世界には、『人権』という言葉は存在するのだろうか。殺人、窃盗、詐欺、差別。それらが平然と行われるのがこの世界の”普通”なのだと無理矢理自分を納得させていたが、だがでは『なぜそなうなのか』…というところまで考えたことは…確かに今まで一度もない。

自分の世界とこの世界では何が違う？  
生まれ育つた国が、なぜ平和だった？  
なぜ市民は守られ、当然のように法に統治されていた？

あまりにも当たり前過ぎて、考えた事もなかつた事実。

この世界との折り合いを付ける為に、必死に考えないよつとしていたこと。

もしかしてこの世界には、人権は確立していないの…？

互いの尊厳を認め、身分の差なく権利を主張する”権利”。サツキにとつては当たり前の思想が、この世界では馴染みの無い、じくマイノリティの思想だといつのか

「戯れ言を…！」

サツキが思考を飛ばしている間に、恐らく佐波の言葉の本当の意味など理解してもないだろう清州が、佐波の胸ぐらから手を離し、遂に腰の刀に手をかける。

抵抗する力も無く再び地面に崩れ落ちた佐波を見て、サツキは咄嗟に懐にいつも忍ばせている一振りの小刀に手を伸ばした。

男が刀を抜けば、斬るつ。

不思議なことに、今までの緊張と迷いが嘘の様に、ただ自然とその考えが浮かんだ。

何故だかは分からないが、漠然と、今彼女を死なせてはいけない、という激しい使命感に身体と思考が支配されている。

この感情をなんと言うのだろう？ 熱く、冷たく、まるで世界の全てが見渡せるような爽快感。

よつやく巡り会えた何かに、心震えるような 泣きたくなるような、絶対的な想い。

佐波。

この世界にその言葉があるのかどうかは知らないが、佐波のようないい人間を、サツキの世界では『思想家』と呼んでいた。どの時代でも激しい弾圧を受け、謂われない暴力と偏見に身を晒しながらも、決して諦めずに己の思想を貫く。

剣や力ではなく、己の才覚のみで戦う、歴とした勇敢なる戦士

守らなければ。

彼女を。彼女の持つ思想と、それを貫き通す意志を。

計り知れない力に突き動かされる様に、サツキがタイミングを見計らつ為に男の手元に意識を集中した 　 その時。

突如、佐波と男の間を、小さな影が走り割った。  
それは十歳程の美しい子どもで……

「ま、」

真灯！？

何処から出て来たのか、裸足で佐波に駆け寄った双子の片割れの少年にサツキはぎょっとし、その衝撃で我に返った。

？？？そして愕然とする。

今、私は…

震える手を、そつと懐の小刀から離す。

己が仕出かそうとしていた事の大きさに、血の気が引いた。

自分は圧倒的に権力の勝るこの場で、なぜ一瞬でも『戦う』といふ選択肢を選び、そして実行しようとした？まるで盤上の王「キング」を守る、捨て身の歩兵「ローン」のよう

に。

それは本当に、自分の意志だった？

自分には、まだ叶えていない願いや、使命があるところのこ

？

己の危険思想に冷や汗を流す。

冷静になれ！と自分に強く言い聞かせて、現状を見極めようと、田前の光景に意識を集中させた、その時。

真灯が、佐波を背に隠すようにして男を見上げ、叫んだ。

「IJの方は、私の命の恩人です。これ以上は、許せません……」

あ、いつか言おうと思つていつも忘れていたのですが（汗）  
評価・お気に入り登録ありがとうございます！嬉しくて鼻血噴きそうです…

次回も更新がんばります！

「ま

「こ、こら、真灯！」

サツキが少年の名を呼ぶより早く、焦燥を滲ませた男の呼び声が中庭に響き渡った。

一同の視線が集まる中、真灯が現れたのと同じ方向から飛び出すようにして姿を現した声の主は、目の前に広がる光景 位の高い公服に身を包んだ中年の男の前に立ち塞がる真灯の姿 に、まるで足が地面に張り付いたかのようにぴたりと動きを止め 見る間に蒼白になる。

あの男は…

その男の顔に見覚えがあつて、サツキは記憶を素早く浚つた。

… そうだ、何度か済楼庵で見た事がある… 確か双子の御守役の…

歳の頃は20代の前半程だろうか。短く刈り込んだ髪に、穏やかな垂れ目を持つ、若い男。

聞いた話では、元々は男娼として売られてきたところ、その笛の腕前を買われて、総主直々に彼の息子達の笛の指南役にと抜擢されたのだとか。

名は何と言つたか… 確か…

「葵〔あおい〕！」

蒼白で硬直している男の後ろから、真灯と寸分違わぬ容姿の少年が飛び出していく。

名を呼ばれた若い男？？葵は、身体をビクリと揺らして硬直を解くと、駆け寄ってきた少年？？耶灯を慌てて制した。

「来るな！」

「でも真灯が！」

焦燥に駆られた叫び声。

制止を振り切つて駆け寄ろうとする耶灯を後ろに押しのけるようにして、葵は真灯と真灯の対峙する清州の元に駆け寄ると、その足下にざつと平伏した。

「も、申し訳ございません！此度「こたび」は子どもが失礼を……！」  
「なんだ貴様等は！」

横槍が入つたことで動搖したのか、清州が怒りに戸惑いを含ませた声を上げる。

刀に手をかける自分に臆することもなく、燃えるような怒りに染まつた瞳で見上げている子どもの美しい容姿にも怯んだようだった。その様子に葵は慌てて真灯の腕を引っ張り、地面に膝を付かせた。

「ま、真灯！早く謝れ！」

無理矢理に頭を下げるせられそうになつて、真灯は暴れてその戒めを解く。

「なんでつ なんで誰も佐波様を助けないんだ！早く、最を呼んで！」

「馬鹿！場を弁「わきま」えろー！」

「嫌だ！誰か、最を…！」

「坊ちゃん、医者「せんせー」は郭「くるわ」の往診でお留守のようだ。」「

今今今まで集まつた野次馬に埋もれて、その気配一つ見せなかつた男が声を上げる。

良く知つたその声に、サツキはギョッとして辺りを確認し、その姿を確認するなり小さく叫んだ。

「佐々田「ささめ」班長…！」

下男のような質素な衣服で小柄な身を包んだ、灰髪の男。

ぱっと見は好々爺のようにも見えるが、ふとした瞬間に若者のような精悍な表情をするこの年齢不詳の男は、サツキの直属の上司だ。彼はいつの間にか、清州と真灯が対峙する中庭の中央近くまで歩み寄つていた。

なんで班長がここに！と叫んで問いただしたサツキより早く、次から次へと現れる横槍に痺れを切らした清州が苛立たし気に叫ぶ。

「どうなつてゐる！全員斬られたいのか！！」

叫ぶなり腰の刀を抜き放つた清州に、その場に集まつていた使用人達は我に返つたようにどよめき、巻き添えを恐れて逃げ出す者やその場で平身する者で溢れ混乱が起つた。

「煩い！黙れ！黙らんか！！」

もはや清州の言葉など通らない。

サツキも我が身の安全を守る為に好き勝手去つて行く使用人に突き飛ばされて、前のめりに倒れそうになる。

その腕を掴んで支えたのは、これまた見知った男だった。

「う、空木「うつぎ」さん…」

「また面倒なことをしてくれたなあ、サツキ」

「うつ」

年齢はサツキよりやや年上。短い黒髪の、は虫類を思わせる、痩せた冷たいつり目の中年だ。

サツキと同じ回り番・班で、同じ”副班”といつ肩書きを持つこの男は、何かとサツキを邪見にしている。

その割に面倒見がいい性格なのか、このように要所要所で助けてくれることも暫しある所為で、サツキにとつては憎むに憎めない存在だ。

？？？な、なんでここに班長と副班が揃つてゐる…？もしかして、私、見張られてた…！？

サツキが動搖しているうちに空木は至極面倒そうにサツキの腕を放すと、彼女の耳を引っ張る様にして自分の口に近づけた。

「イ、いたつ」

「屋敷が囮まれてゐる」

「へ、へつ？」

「恐らくは清州の手の者だ。…いや、もしくは左相か」

ぎらり、とその視線を中庭で怒鳴り続けている清州に向けると、す

ぐにまたサツキを見る。

「どうじつ思案かは知らんが、総主の留守を狙つたのは間違いないだろ。あの使用人を攫つ氣のよつだ」

「な、なぜ…！」

「分からん。？？？が、分かることもある」

？？？な、何が？？

問い合わせを出す間もなく、清州の怒声を割るよつにして、嫌に飄々とした佐々田の声が響いた。

「どうやら大変な粗相があつたよつで…清州様のお怒りは至極ともにござりますれば、全てはここの秩序を守る私どもの不手際。何卒、御沙汰は手前に頂戴したく」

「つ班長！？」

その言葉に驚愕して、堪らずサツキは声を上げた。

この騒ぎは、誰がなんと言おうとその場に最初からいながら防ぎきれなかつたサツキの責任だ。

責められるべきは自分なのに、その咎を、彼は一拳に弓を受けるつもりで居る。

？？？そんな、そんなこと…！

わせるワケにはいかない、と駆け出そつとしたサツキを、その肩を掴んで空木がアッサリと引き戻す。

「馬鹿。お前が出てもどうにもならん」

「でも…」

「変に動かれて迷惑被るのは佐々田班長だぞ」「でも！！」

「『でもでもでも』と、お前は本当に頭が悪いなあ。いいから、佐々田さんの意図をその足りない頭で考えてろ」「か、考えるつたつて…！」

動搖のあまり、今にも泣き出しそうな田で空木を見上げたサツキに、彼はあーっとわざとらしいため息をついた。

「…佐々田さんは”時間を作ってる”んだ」「えつ？」  
「お前は大人しく見てろ。それと泣くな！鬱陶しい！」  
「つづつ」

？？？や、優しくないけど優しい…！

荒々しく頭を叩かれて、サツキはぐずぐずと鼻をならした。これだからこの男は苦手なのだ。いつそ全てにおいて邪見にしてくれるなら、嫌いになれるのに。

サツキがオロオロしている間にも、事態は転がつて行く。

佐々田の言葉に、清州は自分を立て直す様に、大声で叫び返した。

「ではなんとするーお前の首を斬り、獻上するとでも言つのか！」「お望みであれば」

ニヤリと、まるで挑発するかのような笑みさえ浮かべて、佐々田は膝を付き頭を差し出すようにして下げる。あまりにも平然と行われるその動作に、清州が一瞬鼻白み、次いで再び怒り喚き出す。

「わ、わ、私を馬鹿にしおつて……お、お前の、お前の薄汚い首などでつ、つ、償えると思つてか……」

「よもやそのようなことは」

かかと笑つて、佐々田はまるで少年のような仕草で小首を傾げてみせた。

「この身がお気に召さないのであれば仕様がない。ならばそのお怒りは、やはりこの者自身に償わせるのが宜しいかもしませんな」

佐々田はむちりうと、地面に力無く横たわる、満身創痍の佐波に視線をやつた。

びくつと肩を震わせた真灯は慌てて守る様に佐波の頭を搔き抱き、その様子に平身していた葵が素早く身を上げて、真灯を佐波から引き離すよみに抱え上げる。

「葵つ！離せ！」

「離せるか！お前に何かあれば、俺が総主に殺されるんだぞ！」

「父上は、関係、ない！」

身体を捻つて必死にその腕から逃れよみする真灯を、葵は懸命に抱えてその場を身を伏せて後ずさつた。

「…父上、だとつ？」

しかし、折角逃れる機会を得た葵達を止めたのは、驚いた事に怒り沸騰中のはずの清州だった。

瞠目して葵に抱えられた真灯を見つめ、何事かに驚愕している男に、佐々田は素早く答えを返した。

「彼「あ」の子どもは渕楼庵総主様の御子、真灯様にござります。  
何卒、ご容赦下さいませ」

「総主の……子……」

あれが、と男が小さく呟いたのを、佐々目は聞き漏らさなかつた。  
束の間怒りを忘れて真灯に見入つてゐる清州に、そつと誘導する  
ように声をかける。

「……先ほどの警吏の言葉によると、この罪人を”無事に”運ぶ様に  
との命がおありのようで。さしづめ、尋問されるおつもりだつたの  
でしうが……ではどのように致しましょうか」

「……な、なにつ？」

我に返つたらしき清州が慌てて問い合わせると、佐々目は平然と続けた。

「その者は、元々火事で大怪我をしていた。更にこの様子では、も  
う長くはありますまい。今医者はここに居らず、呼び出しても一刻  
はかかる。……となれば、罪人は移送する間に死に至るでしょうなあ」

「……つ」

「喻え命が保つたとしても、この怪我では治療せねば取り調べなど  
に不都合が出ましょ。どのように御上にそれを報告されるおつも  
りで？罪人が火事で怪我を負つていたことは、既に上部なら誰もが  
ご存知のはず。清州様がどのように説明されようと、この罪人の様  
子では御上は清州様が”意図的に”手を挙げたのではないかと勘ぐ  
られますわなあ……

「……」

佐々目の言葉に、清州はあんぐりと口を開け、次いで憤慨したよう  
に顔を赤くした。

誰もが數蛇だと思つ中で、しかし佐々田だけは一人平然とした顔で、

「どうでしょ。」  
「はーつ、私どもこの者の處罰を任せても頂けませんか」

畳み掛けるようにさう言つて、再びニヤリと笑つた。

彼を上司に持つて2年経つサツキからすれば、あの笑みの恐ろしさを知らない人間を可哀想に思う。

あれは悪魔の笑みだ。人を誘い出し、それらしき知恵を授け、勝手に墮落していくのを待つ悪魔の微笑み。

善からぬ思惑のある輩が、彼の口車に乗せられて勝手に脱落していく様を何度も見ているサツキは、佐々田の含みのある笑みに思わず震えた。

「な、ならん！ それは、私がこの手で」

「清州様の御刀で、その者を一思いに処罰されるのも良いでしょ。」

「が…果たしてそのような」慈悲が必要かどうか

「じ、慈悲だと？」

意外な言葉を聞いたとこつよひに壁田する清州に、佐々田は「はあ」と相づちを打ち、

「慈悲、ござります。このまま放置するだけで、この者はこれから死に至るまでの数刻を、苦しみの中に終えましょ。それを早田でやるのは、慈悲といつものござることましょ。」

如何にももつともじりじく言つ。

佐々田の言葉に田に見えて狼狽える清州の姿に、サツキはいつもながらの上司の悪魔っぷりに場違いな感嘆のため息をついた。

その横でまつりと「泣いた鴉」からす「が…」と呟いた空木は全力

無視の方向で、それでもハラハラしながら佐々目の仕掛ける眼を見守る。

「しかし……もちろん、それでは清州様のお気持ちは静まりますまいて……」

相手を落し、立て、持ち上げ、また落とす？？？緩急を付けながら、佐々目は言葉を繰り出す。  
会話の主導権を握られているとは知らず……否、喻え分かつてはいたとしても、先に狼狽えた時点で既に負けているようなものだが……予想通りに清州が口を開いた。

「……このまま咎めもなく見過ぎ」すことは出来ん！」

その言葉に、佐々目は笑った。年齢を更に分からなくさせる、若々しい潑刺として笑みだ。

「ならば、地下牢に繋ぎましょ。牢の中にはその死の見届け人としてそちらの警吏を御借りしたいのですが、如何ですかな」

いきなり呼ばれて、今の今まで事の成り行きを地面に平身して見守つていた警吏がギョッとして顔を上げた。

が、もちろん反論など出来るはずも無く、悔しそうな顔で再び平伏し、了承の意を示す。

それを見て取り、清州は苛立たしそうに、けれど当初よりは随分冷めた頭で思案深気に問つた。

「……上部には何と報告する」

「罪人は火事の怪我で死んだ、と」

「……この死体は」

「明日、清州様にのみ御見せしましょつ

「？？つダメ！」

「あつ オイ、こひり真灯！」

真灯は葵の拘束を自力で解くと、再び横たわる佐波に被さる様にして抱きしめた。

「いやだ！いやだいやだいやだ！佐波様を…佐波様を死なせたくない…！」

「真灯！」

堪らず駆け寄ってきた寸分違わぬ容姿の少年？？耶灯は、そんな片割れの姿に狼狽えながらも、清州に向かつて平身した。

「お、お願ひです！真灯を… つ 佐波様を… 御赦し下さい…！」

幼子が懸命に助命を願う姿は、憐れみを誘つ。

清州も子どもを斬る程の悪漢ではないのか、ぐつと喉に何かを詰まらせたよつに低く唸り… やがて小さく呟いた。

「…明日、だな」

「はい」

「もしその言葉を裏切るようなことあれば、お前達の田を割り貰いて犬に食わせるからな！」

「御意に」

畏まつて頭を下げた佐々田によつやく溜飲を下げて、清州は屋敷中に響き渡るよつな怒声を張り上げた。

「ここでの事は他言ならん！良いな！」

清州の言葉にその場にいたほぼ全ての者が、ぞ、と平身した。  
もし事が外に漏れれば、ここにいる者達は皆、佐波と同様かそれ以上目の前に遭うだろ。

一先ず目前の安全を確保する為に躊躇い無く頭を下げる使用人たちの間で、サツキも同様に頭を下げながら、きつくる唇を噛み締めた。

権力：

ただの肩書きが、この世界では全てを征している。  
命が平等だという理念も、きっと未だ無い。  
差別され、区別されるのがこの国では当然の常識で。  
だから身元も保証されぬような人間は、権力の元で媚びへつらいながら生きる以外に長生きする方法がないのだ。

？？？佐波：

あんたは、なんでこれに逆らおうとしたの？ それは、命を懸ける  
ほどのもの？

噛み締めた唇が切れて、口の中に血の味が広がる。  
そつと顔を上げ、騒ぎの渦中にありながらも地に臥し意識を失つて  
いる佐波を見つめていると、不意に視線を感じた。  
無意識にその視線を逃れば、そこにはじつと熱の無い目でこちらを見つめる佐々目が。

反射的にぎくつと身体が強ばり、そんなサツキの様子に”あの笑み”を浮かべた佐々目は、視線を清州に戻すと「では」と声を上げた。

「宜しく「うざ」りますか」

「勝手にしろ！」

捨て台詞で完全降伏した清州が、手の刀を腰に差し直すまでをじつと見つめてから、佐々目は平然とした顔で「サツキ、」と名を呼び、？？？そして、

「その”お客さん”を、地下牢へ」

## 17（後書き）

主人公が気を失っている間に登場人物が増えて行く…  
3話に出て来た年齢不詳のお方は回り番の班長さんでしたー。  
そして8話に台詞だけ出て来た男が葵です。

「ありやあ、魔性だな」

臥龍城の地下牢への入り口は、母屋から離れ、風情のある雅な庭の一隅に、静かに口を開けている。

石畳の階段を暫く下り、さらに知っている者ですら迷いそうな入り組んだ地下道を進むと、形状からして凶悪な用具や器具が確かに使用されているとわかる、実用的に配置された拷問部屋に行き当たり、そのすぐ側に、冷たい石床のむき出しになつた牢が姿を現す。

溟樓庵で約2年勤めているサツキも、臥龍城の地下牢に来るのはこれが初めてだつた。

そもそも、臥龍城は総主の為の建物であつて、一介の使用人が軽々しく来れる建物ではない。

皇帝陛下が逐わす、皇都の中の更に中核である”大皇都”の中に存在するだけに、ここに来るまでに幾つもの関所を通り、身分を示さなくてはならないのだ。

2年間でサツキが臥龍城を訪れたのは、今日が2度目。

あの時はもう二度とここを訪ねる事は無いと思っていたものだが、得てして期待を裏切ってくれるのが社会といつものらしい。

もつと言つなれば2年後の自分が再びここを訪れた際に、17の少女を地下牢に投げ込み、見殺しにすることにならうとは、想像するべくもなかつた。

知つていたら、早々に辞めていた？

答えはきっと是だらう。だが、考へても詮方ない事だ。

事実、事は起こつた。そしてサツキは、佐波を見殺しにしている。

現在進行形で、最悪な形の未来を進んでいるのは間違いない。

束の間閉じた瞼の裏に、今しがた見た佐波の姿が浮かんだ。結局手を貸す事になつた空木「うつき」が、背負つていた佐波を地下牢に横たえると、彼女は微かに身じろぎ、薄らと瞼を腫らした目を開けた。

痛みに耐える様な荒い呼吸。唇も、瞼も切れ、顔は痣と血に染まつていた。

火事で怪我していた方の背中に繋がる左腕は、完全に折れてしまつたのか歪な方角を向き、開いた傷からの出血で、その背中を滴る程に赤く濡らしていた彼女は、呻きながら、辛うじて言葉を発した。

『…………な、や……』

それが自分たちに向けられた謝罪の言葉だとすぐに理解し、応えを返す間もなく、サツキは空木に引っ張られる様にして牢から出された。

抗議の視線を向ければ、問答無用の視線で返される。

空木は牢の監視に据えた数名の用心棒と、苦い顔で佇む警吏の深に黙礼をすると、さつさと踵を返して元来た道を辿り、アツサリ地表に舞い戻つた。

いつの間にか日は暮れていた。頬を撫でる晚秋の風は、柔らかく乾いている。

そして茜色の西日に照らされる空木の背中を渋々追いかけていたサツキに、彼は開口一番、冒頭の台詞を呴いたのだ。

「…ましょう?」

「『魔』『性』だ。面倒だから意味は自分で察しろ」

普段使わないような単語を出されて、慌てて自分の中の辞書を引く。

日常会話は不自由なく使える様になつたけれど、未だに知らない言葉も多い。

回り番で使う為の遠回りな追求や回りくどい脅しなどは覚えたが、商人がするようなビジネスライクな会話は絶対出来ない自信がある。それでも勉強の嫌いなサツキが僅か2年程でこここの言語を習得出来たのは、皇国の言葉が、元の世界　　日本語と酷似しているからだ。文法もほぼ同じだし、漢字に良く似た固文字を使うところも、それを崩した平文字を使うところも似ている。

サツキはルツカと共に皇国「ここ」に辿り着くまでの約3年間、様々な国を回つて来たが、暮らしていると言えるまでに拠点を構えたのも、きちんと言語を習得出来たのも、皇国「このくに」は初めてだつた。

ただ発音だけは、日本語にない子音を使つものもあつて苦手だつたりするのだが…

そういうえは、空木もまた皇国外の生まれで、確かに皇国領の貧しい公領地だつたとか聞いた気がする。

ちなみに皇国領とは、皇国の植民地的支配下に置かれた国の別称だ。どこの世界でも”支配”とは同じらしく、皇国領に住む人々は自国の言葉と共に皇国の言葉を必然的に習わされるのだとか。

故に言葉に何不自由していない空木は、いつもの如く、人を馬鹿にしきつた冷たい目でサツキを見下ろして続けた。

「あの使用人、お前の手には負えんぞ。さつさと諦めて佐々田さんに任せろ」

あの人ならすぐに真実を捕らえられる。と、熱の無い声で淡々と諭す空木に、サツキは沈黙で応えた。

確かに、佐々田ならすぐに佐波の本性を暴くだろ？

だが、回り番に半生を費やして来た彼は、良い意味でも悪い意味でも回り番の撻の化身のような人だ。

彼女の利用価値と存在価値を即座に計った彼が、どのような手段で佐波を追いつめるかと考えるとぞつとする。

今回のことだつて、きつと最初からサツキ一人に任せた氣はなかつたのだろう。

傾くのは一瞬。傾いたら、一度と同じ位置には戻れない。佐々目がサツキの説得に頷いたのは、サツキを『泳がせ』、もし『傾けば』佐波と一緒に片付ける気だつたのではないか。

『俺たちの仕事は只一つ。疑うことのみと知れ』

それは仲間にさえも適用される、回り番の絶対的な撻「おきて」。

黙り込んだサツキに構う事なく、空木は歩きを止める事なく言葉を続けた。

「ありやあ厄介な質「たち」だ。もし全てが計算だつたら、末恐ろしいよ。恐らく佐々目さんでも手こずるだろつな

「…！ な、何故ですか？」

予想外に危険視されている佐波に驚いて問うと、空木は白々とした視線を小走りに自分を追いかけるサツキに向かって

「お前あの時、清州を斬ろうとしただろ？」

平然と、爆弾を落とした。

あからさまにギクリと全身を強ばらせた立ち止まつたサツキに、彼は「やつぱりな」と呟いて、再び前を見据えて歩く。ギクシャクしながらもどうにかその背に再び追いついたサツキが、

何と言葉を切り出そうかと迷つてゐるうちに、空木が何でもないことにのよつて口を開いた。

「別に責めてやしなこ。俺だつてあの男はいつか『なます切りにしてやりたい』と思つてるしな」

「ちよつ…イ、いつから私を見張つてたンですか！？」

空木の口から何気なく飛び出す『日本語』（しかも使用法合つてゐ！）に耳を疑いながら問つと、彼は平然と応える。

「お前があの警吏とこちや じらじしてゐ辺りからかな」

「空木さんおやんと田え開けてました…」

あのやり取りの何処をぞひ見たらそななる…？

どつせ見張るなら正確に…と口走りそつこなつたサツキを、空木はじろりと見据え、

「んな事はどうでもいい。お前、なんで自分が清州を斬りつとしたのか、ちゃんと分かつてゐるか？」

「え？」

「…だから、お前はむつこの件から手を引かつて言つてゐんだ」

お前じや『喰われる』だ、と呟く。

喰われるつたつて…

「…でも、別にあの子に喰『ナシカ』けられたから、斬りつと思つたわけじやないし…」

ぱつつと歎き返せば、更に強く睨まれた。

「それがお前の弱さだと言つてるんだ。なぜあの使用人を庇う？疑うべき容疑者であることは明白なのに、お前はなんで”あの使用人の為に”刀を抜こうとした？その理由にも行き着かない愚鈍なやつは、回り番には要らない。早々に出て行け。」

「…」

「あ、ルッカは置いて行けよ。あれは役に立つ」

「…つ…う、空木さんつ！」

「冗談のように何気なく言つているが、この男はこれで至極本気なのだ。

思わず縋る様に声を上げるとサツキを、空木は冷たく眺め、

「お前はあの使用人の懷に無防備に飛び込みすぎた。その所為で正否の判断すら危うくなっている。…いや、その様子じゃあお前は既にあの使用人に完全に喰われちまつてゐみたいだな」

「だ、だから喰われるって」

「魔性だ」

スパツとサツキの言葉を遮つて言つた。

「あの使用人は、人を惹き付ける妙な才能がある。言葉、声、立ち振る舞い、視線。容姿が入れば完璧だったんだろうが、まああの外見でも十分通用するみたいだな。現にお前が墮ちてるわけだし。そういう人間の性を『魔性』と呼ぶ」

「…ましょ…ですか？」

ましょ…って、あの『魔性』で意味は合つてるんだろうか。でもそれって、魔性の女とか、そういう使われ方じやなかつたつけ

…？

……佐波が？……………ま、魔性の女…………？

佐波のあの人畜無害そうな外見を思い出してぐるぐる思考を回しているサツキに、空木が更に続ける。

「『力になりたい』『助けたい』『守りたい』『役に立ちたい』正しいのか間違っているのかは関係なく、ただ人にそう思われる才だ。勾引「かどわか」すんじゃない。本人が自分でそう思う様に仕向ける。それ故に、自分が正常に判断できていないことに気付かせない。 なあ、恐ろしいだろう？」

彼はそう言って、瘦せた頬に笑みを浮かべた。人となりを伺わせる冷たい笑みだ。

「ああいう人間はな、大体無自覚なんだ。自分が発している甘い匂いにも気付かず、周りを魅了していく。魅了された人間は、己が『他人の意志』に奥深くまで侵されているのにも関わらず、それを認めない。それが自尊心に強く絡み付いているからだ。 お前も、あの使用人に魅了されている自分を認めたくはないんだろう？…そういうことだ」

あの使用人、太夫の素質があるな、と面白そうに顎を摩る空木に、  
唖然としてしまう。

佐波が…………？

……言われてみれば確かに、あの時なぜ自分が刀を抜こうとしたのか、その理由が今となつてはあやふやだ。

佐波と知り合ったのはつい最近だというのに、それより深い付き合いの回り番の任務を差し置き、彼女を優先しようとした。

あの時はそれが『絶対』だという確信があつたのだ。沸き上がる歡喜さえ感じた。

自分こそが正しく、間違つているのは田の前の光景なのだと。彼女を助ける為なら、最悪刺し違えてでも止めようと本氣で思つていた。 その正否は全く考えずに。

でも、あれは確かに自分の意志だつたはずだ。佐波を助けたいという思いは、間違いなく自分の……

背筋を冷たい汗が流れた。

どう考へても、違和感がない。

でも、それこそが”問題”なのだと、空木は言つているのだ。

？？？私は……

「まあ、だからつてあの使用人が”事”の犯人だとは思つてないさ。主犯にしては身を晒しすぎるし、馬鹿みたいに無防備だ。大方、主犯かもしれない豪族家の雇い主もあの使用人の特異な体質までは知らないんだろう。知ついたら、もつと上手く利用していただろうしな」

「……ど、どうして……」

どうして、空木はそれに気付いたのだろう。否、空木だけじゃない。きっと佐々田も気付いている。

彼らと佐波の接点は一つもなかつたはずだ。なのに、なぜ彼女のそれに気付けた？

不安定に移ろぐ視線でそれだけ問うと、空木は鼻で笑つた。

「言つてるだろ？『疑う』ことが仕事だと。お前は先入觀を持つ

てあいつを見ている。それはお前が”あの晩”のあいつの姿を見て  
いるからだ。俺たちはそれを知らない。だから、出合い頭から疑つ  
てかかる。まあ、あの容姿に少々騙されかけたのは認める  
がな

彼は面白くなさそうに笑って、そのまま歩き出した。

サツキはどうにか考えをまとめようとしながら

ふ、と当然の事実に行き当たつ、慌てて空木の背中を追つ。

「で、でも、何にしたって佐波は、あの怪我じゃ助からなインじゃ

…！」

清州には、明日佐波の死体を見せると確約してしまつてゐる。

この件から手を引くも何も もう既に、残された道などないの  
ではないか。

必死に追いすがるサツキに、空木は立ち止まって振り返つた。

その顔にありありと「お前は馬鹿か」と書いてあつて、あへりとす  
る。

な、何か間違つた事を言つただろ？…！？

戦々恐々と空木の言葉を待つサツキに、彼は数回怒鳴りつとし、し  
かしそれをどうにか堪えると、深い嘆息と共に言つた。

「…お前、本当に知らないのか。それともただ単に馬鹿なのか、ど

つちだ？」

「ど、どつち…」

「ああ、もう答えなくていいぞ。俺の中では答えがでてるからな。

いいか？」

失礼な物言いに反論する間もなく、空木は自分でサツキとの距離を縮めると、がしつとその肩を掴んだ。

吃驚するくらいよく似合つ、怒り笑いを浮かべて。

「一度しか言わないから良くな聞けよ？」  
「以上、終わり、解散。じゃあな」

身も蓋もなく言い放つて颯爽と去らうとする杉木に飛びかかって止める。

瘦せている轡は力の強い御は  
がみつくサツキを引きずりながらすんすん前方に進んだ。  
全く取り合わない空木に、サツキは叫び続ける。

「ふとさが好きみたいだぞ。俺にはわからん価値観だが」「

「お褒めに預かり光栄です！」が！それより…！」

「最は本当に留守だよ。」  
「昼前郭に呼ばれて往診にいつたんだ」

サツキの粘り強さに負けた形で、空木は呆れた様にそう答えて立ち止まつた。

「じゃ、じゃあやつぱり最低でも一刻は戻れなインじゃ……！」

ここはサツキの世界とは違う。医療の発達は緩やかで、輸血もままならない。

火事の怪我で元々体力が落ちている佐波を、あのまま止血もせずに放つておけば、例え一刻で最が戻れても、もつ処置など出来ないのではないか。

脳裏に再び浮かぶ、ぐつたりした佐波の姿。自分なら、応急の手当くらいは出来た。止血して、傷口に歯菌が入らないようにすることだって。

でもサツキはそれをしなかつた。それはきっと人として間違っている。でも、この世界では常識で。

ぐらぐらと思考が定まらないサツキを見て取つて、空木は呆れ果てた声を上げた。

「お前なあ……。そもそも、ただ治療するだけなら早音を呼べば済むところを、なんでそうしないか、分かつてるのか？」

？？？そ、そういうば……！

すっかり忘れていた早音の存在にあわあわしてサツキを面白そつに眺めながら、空木は声量を落とす。

「清州の手の者が内部にまだいる。最であらうと、正面から行つて治療なんか出来るものか」

「ええつ！？なら……！」

「だーかーらー！」

らしくもなく焦れた様にそう言つて、空木の手がおもむりにサツキの頬に伸びた。

柔らかく、強引に。

まるで恋人同士の戯れのような動きでそのまま引き寄せられ、耳に吐息がかかる？？？

「…だから佐々田さんは”地下牢”に入れたんだろう? 漢樓庵と臥龍城は、地下道で繋がっているんだ。…本当に知らなかつたのか?」

う、嘘つきました…（涙）次回までサツキさん視点です…申し訳な  
れやあ…。onz

陰険で容赦がなく、人を冷たく見下すことが生き甲斐のようこの男の口から紡がれるにしては、低い、厭に良い声だった。その所為で一瞬何を囁かれたのか分からず、ぽかんとしたサツキは、次いでその意味を呑み込むと驚きで大声を

「、むぐつー?」

「やると思つたんだよお前は…」

固い手のひらでさつ氣なくサツキの口を覆つた空木は、耳の側でげんなりした声を出した。

「こんな場所で大声出してくれるなよ。何処で聽かれてるとも限らんぞ」

「む、むぐつ」

「そのまま黙つて聽け。いいか。何の為に佐々田さんがあんな回りくどいことして時間作つたと思う? あの使用人を治療して置つ為に決まつてるだろ?」

言葉の端々に苛立を見せながらも、口を抑えていない方の手で、まるで愛おしむようにサツキの頬を撫でる。

その凄まじい温度差に鳥肌を立てている彼女に構う事なく、空木は続けた。

「上の道だと一刻の道が、地下だと直結で一刻かからない。もう使  
いは走らせてあるから、じき最が地下道を通つて帰つてくるだろう。  
あとは、本人の体力にかけるしかねえな。もし間に合わずあの使用  
人が死んだら、俺たちは重要な容疑者であり総主の御子の恩人でも  
あるあの使用人をみすみす見殺しにした罪で、戻られた総主からお  
叱りを受けるだろうよ。ちなみにお前、この場合の“お叱り”が何  
か知ってるか？ 軽い臨死体験だぞ？ 貴重な機会だから一度やら  
れてみると良い。いい具合に人間歪むから」

「む、む…」

「清州との決めことは、大した問題じゃない。総主が帰れば解決す  
るだろう。どうせ自分で確認になんか来やしない。ああいうタイプ  
の人間は、意外と打たれ弱いしな。あの使用人が清州の自尊心を叩  
いてくれたおかげで、しばらくは溟楼庵に関わるのも厭なはずだ」

囁きながら空木の指が、サツキの顎のラインを滑る。

その悩まし気な動作は、端から見れば恋人同士の親愛なる行為に見  
えるかもしれないが、当事者であるサツキはこの指が自分の喉に食  
い込む様をありありと想像して青くなつていた。

た、質「たち」が悪いのはあんたじゃないか…！

出来ることならぶん殴つても距離をとりたい。

でも空木のこの行動は恐らく、まだ屋敷にいるという清州の手の者  
を意識したことだろうから、必死に衝動を押さえこんだ。

…睨むのはさすがに止めないが。

空木は至近距離で自分を睨むサツキを面白そうに眺めながら言つ。

「あの使用人は、暫くは遊郭街の方で匿うことになるだろう。溟楼  
庵は再建中だが、借宿の方にも奥座敷くらいはある。そこで身体を  
直しつつ、尋問出来る様になればそのように手配する。ただし、極

秘裏にだ。あの使用人が生きていることがバレたら、俺たちは当然として、下手したら総主まで揃つて反逆罪と偽装罪で斬首だ」

『反逆罪と偽装罪で斬首』の言葉にギクリと身体を強ばらせたサツキを、慰める様に撫でる手とは対照的に、彼の手は「動搖してんじやねえよ」と強く睨んで来る。

「警護府と軍部が両方絡んでくる」となんて、そうそう無い。だからこそ、”分ることもある”。…多分、佐々田さんも気付いているだろうが、今回の件 恐らく、『密輸』に関係がある」

「蝶のなつて言つたわい? ん? 分らないか? そつか、ならそ  
の口、口で塞いでやわいか?」

— — — — —

青ざめて全力で首を振るサツキに、空木はアッサリ「冗談に決まつてるだろ?」と平然と言つ。

そ、その冗談を本気で実行出来る男が何を言つか！

回り番に入りたての頃、当時から副班だった空木の噂は色々聞いていたが、その中の一つに、彼が首浜楼庵の男娼だつた、といつ話があつた。

最初は、このは虫類みたいな痩せた男が男娼だなんて絶対有り得ない！と、噂を嘘と決めてかかっていたが、時間が経つにつれて、彼の人となりと仕事ぶりを見る機会が増え、噂があながち嘘じやないことを知った。

熱の無い冷たい視線は時に人の心を揺さぶり、心の籠らない誘い文句は、逆に支配欲をかき立てる。

男相手でも女相手でも、自由自在に嘘と本能を操るその手腕は、非

道と恐れられる回り番として申し分ない能力だ。

彼がどういう経緯で男娼から回り番に入つたのかは知らないが、班長の人選は正しかつたといえるだろう。

：だが、このように本氣と嘘と冗談の境目が酷く曖昧な男であるため、同僚を持つと大変苦労する。

きつと空木にとつては、總てが”本氣”で、總てが”嘘”なのだ。

必要とあれば誰とでも寝るし、どのような約束も平然と破れる。心の殺し方を誰よりもよく知つてゐる『空木』は、そういう男だ。

無言で打ち震えているサツキを面白そうに眺めながら、彼は更に続ける。

「あの豪商家は貿易で生計を立ててゐるらしいな。それに布津といえば、国境の州だろう。禁制品を国外に流してゐたとしても、意外じゃない。密輸は國家反逆罪だから、捜査は警護府と軍部が共同で行つもんだ。宿で足止めしてゐるつていう豪族商家の長男坊が白状したのかは知らねえが、もし『密輸』だとしたら、今回の事件のお陰で近しい証拠が上がつたとみて間違ひないだろ？」

警吏共は最初から、あの使用人を”罪人”と呼んでいたしな。と咳き、

「あいつらが知りたいのは、行方不明になつてゐる三男坊のことだらう。火事の混乱で大門の記帳がおろそかになつちまつてたから、いつ頃街を出たのか、：それとも”出でいないのか”、それすら分らん。あの使用人を拘束して吐かせるつもりだつたんだろうが、清

州がとんだ馬鹿者で番狂わせというわけだ。：まあ、俺たちにすれば清州様々だがな。

お陰で俺たちはあの使用人を”独り占め”出来る。『密輸』なんて大層な罪状の為じやない。『不審火』や『三体の他殺体』との関係も、まあ今はどうでもいい。俺たちの仕事は、あの使用人が『総主の御子の誘拐未遂』に関わっているか否かを確かめることだ

上手く行けば『おとり』にも使えるかもしれん、と呴いて、空木は滅多に見せないような艶やかな笑みを浮かべた。

「どのように捌『さば』いてやるかなあ。ああいう無自覚な魔性は、意外と自分に従順な者に弱いもんだ。懇『ねんご』ろになつてみるか？いや、ありやあ快感に流される人種じゃないな。かといって直接的な暴力には強そだからなあ。間接的に、周りの人間を弄んでみるか」

まあ、何にしても最後には殺『や』るんだが。と、楽しそうに言つ男に、サツキは瞠目した。

その様子に、空木は片眉を上げる。

「そりやそうだろう？あの使用人は死んだ事になつてるんだ。生かして出す氣は更々無い。眞実が分かるまでの使い捨てだ」

使い捨て。

さあつと血の氣が引いた。

そうだ。佐々目も、空木も、佐波を助けようとして行動を起こしたのではない。

佐波の知つているかもしない情報に一体どれほどの価値があるの

かは分らないが、結局のところ、彼女が容疑者である以上、追求の手を緩める事はできないのだ。

それどころか容疑が晴れたとしても存在そのものが”危険”となれば、無事に生かしておくことも出来ない。

生き延びても、彼女の命の灯は風前に晒されている。

それに気付いて、心が一気に沈み込んだサツキの様子を観察するよに眺めながら、その固い手がサツキの頬を労る様に撫で、柔らかく、優し気な声がそつと耳に落ちた。

「だからお前は手を引けと言っている。お前、飼い猫の首を絞めた事があるか？ 親の爪を剥いだことは？ 仲間の首を刎ねたことはあるか？」

愛を囁くかの如き声色で、過酷なまでの現実を紡ぐ。

「生きる為の殺生とはワケが違う。自分が必死になればどうにかなるんじやないかなんて思つなよ。遊郭「ここ」は足搔けば助かるような浅瀬じやない。 深淵なる、底なしの沼だ」

恍惚とした吐息が頬に掛かり、サツキは間近にある男の顔を凝視した。

闇を覗くよつな、暗く光る瞳。

足下からガラガラと崩れていくよつな、錯覚。

？？？闇に、呑まれる？？？

崩せんと固まるサツキに、空木は近距離にあつた顔を更に近づけ、

？？？「おもむろ」に、唇に唇を重ねた。

瞬間、何が起こったのか分らずにぽかんとしたサツキは、数秒の間の後、文字通り飛び上がって距離をとり、

「 \* & # ! @ # + ! # \$ @ % な、なななな！…？」

真っ赤になつて口を押さえ、意味不明な叫び声を上げる。そんなサツキを今度は諫めなかつた空木は、代わりに盛大なため息をついてみせた。

「お前…ちゅーくらいでその反応つて…幾つだよ」

「あ、ああああんたが”ちゅー”とか言つな…ななな何で「嫌がるかなと思つて。」

「『ぶつ殺す！…』」

正統な理由があつたつて最悪なのに、嫌がらせとか最悪の極みだ！

わなわなと口を拭いながら怒りに震えるサツキに対し、空木は「『ぶつ殺す…』と興味深そうに呴く。

何ごとにつけの適応能力の高いこの男は、サツキの時折発する日本語にも興味を持っているようで、時折一人で使用法を推測しては楽しんでいるようだ。

今回も新しい単語を引き出せたことに満足したのか、空木は先ほどの暗澹「あんたん」たる空氣など感じさせない清々しい顔で続けた。

「まあ、どの道お前は手を引かざるを得んだろ。この件にはお前の嫌いな権力者どもが群がつてやがるしな」

「うつ」

いつも容易く話題と態度を切り替える男に、未だ“ちゅー”の衝撃から立ち直れないサツキは、動搖しながらも思わず唸つた。  
「確かに、権力者は嫌いだ。今回の件で更に嫌いになつたとも言える。

だが、嫌いなものに背を向けて逃げるのも自分らしくない氣もして  
いて 正直、酷く混乱している。

黙るサツキに、空木はニヤリと笑い、

「知つてるか？ 皇国府の左相と右相が、今回の件でビジャラが主導を握るか、政局で火花を散らしているらしい。突き詰めれば軍部と警護府の確執だな」

「確執…？」

「まあ、普通は官位第二位の左相に第三位の右相が逆らうなんて、有り得ていいことじやない。…つまりそれほど、この国の内側の均衡が崩れてるつてことさ」

堅牢なる蒼き血脉の皇国も、臓腑が腐つては仕様が無い。と続けて、皇国の統治下にある小国生まれの彼は、嫌みな程楽し気に微笑んだ。  
「…聞くところによると、かつて絶対的な権力を誇った皇帝家の勢力が年々弱まり、警護府と軍部、貴族議院に政「まつり」と「」を委譲せざるを得なくなつてきているらしい。

皇国にとつて、皇「すめらぎ」こそが法であり、絶対的な力であつた。

しかしそれが過去のものになりかけている今、増長した権力者の横暴が絶え間なく、皇都から離れた各州も、代官による横領、賄賂、

法外な重税で貧困の一途を辿つてゐるのだ。

政治家が腐れば、國も腐る。…本当に、どうの世界も根本は一緒ね。

巻き込まれる一いちらとしては、大変面白くない。

ムツツリと黙り込んだサツキに、空木は唐突に「そういえば」と切り出した。

「右相といえど、お前が遊郭〔スリ〕に来る前は、源樓庵の常連だつたんだぞ」

「…ああ、姐さんたちから少し聞きました」

あまり 否、全然良い噂ではなかつたが。  
げんなりして応えると、空木はしみじみと言つた。

「当時はまだ右相じやなかつたがな。見田も悪くないし、中々に頭も切れる。騒いで遊女を傷つけたりもしない、實に模範的な客だつた」

「……でも、変態なんでしょう?」

「遊郭なんぞ変態だらナダ。まだアレハベラの変態なら、書はなない」  
「書はなくとも…」

生理的に受け付けない。

サツキは姐さん達から聞いた右相の噂を思い出して身震いした。

『の方は、死んだ遊女を観に来てたのよう

「ロロロロと笑いながら、白粉の上に綺麗な朱を引いた姐さんが可笑しあうに語る。

『良い男だつたけど、妾「あたし」らは指一本触れなかつた。死んだ女と、売られて来たばかりの初女「うぶめ」が啼き叫ぶのを観て回る方が、アレよりお好きだつたみたいねえ。うふふ…』

姉さんの猫のよつな目が細くなり、笑みを描く。

女を抱かずとも、金は払う。だから誰も何も言わない。言わせない。そういうことなのか。

サツキからしてみれば、どんな色男だろうが、金持ちはうが、権力者だろうが、そんな悪趣味な人間は“変態”以外の何者でもない。だが、教えてくれた姉さんは、最後にこいつ言葉を結んだ。

『無理だとしても、一度くらいは抱かれてみたかったわあ。今や皇国家のお姫様と結婚されて、右相様ですものねえ。客に聞かせるには、丁度いい寝物語だと思わないかい？』

…まあ、確かに遊郭を訪れる人間が色物を好む傾向があるのは認めるが…

????…やつぱり遊郭「ここ」は魔の住まう絢爛たる楼獄「こう」

く」だ。

と、その時再認識したのを思い出していたサツキに、何事もなかつたかのよつに歩き出した空木が、ふと、思い出したかのよつに振り返つた。

「清州の小間使い共も、臥龍城「ここ」にいる間は手を出してはこないだろうが、その分帰りしなは用心しろよ。拷問で情報「ネタ」を吐くくらいなら自害しろ。お前から漏れたと分つたら、一度殺し

てやる。」

いつも通りの、冷たく人を見下す顔。その熱のない瞳に、なぜか安堵を覚えるのは 多分氣のせいだ。  
全力で先ほどの事故（誰が何と言つと不幸な事故）を忘れる方向で、取り敢えず言葉で噛み付こうと口を開いたサツキに、空木は不意に後方を指差してみせた。

「迎えがきてるぞ。」

「？？つ へ？」

思わず振り返る。

気配〇で全く気付かなかつたが、いつの間にかサツキの歩幅で30歩ほど離れた木下…むしろ木に並ぶ背丈の…白い布を頭から被つた大男が、静かに佇んでいた。

「ルツカ！」

今朝あつたはずなのに、ものすごく久しぶりに見た気がする相棒に喜んで駆け寄ろうとする。

が、それは後ろから襟首をがつしり握つてきた空木の手によつて強引に止められた。

喉が締まり「ぐえ！」と今女にあるまじき悲鳴を上げたサツキに対し、彼は猫の首を掴み上げる様にしてサツキの首を絞めながら、ゆっくり言つた。

「いいが。お前は絶対、この件から手を引けよ。」

「う、ぐ…イ、いや、でも…」

「も一回ちゅーされるか？」

「け、結構です…！」

こいつ最悪な脅しを覚えやがった！

ワナワナしながらも反論出来ないサツキを最後に満足気に見やつて、空木はすっと、静かに歩き去る。

あつという間に何処かへ消えてしまつた空木に心中で最大の悪態をつきながら、サツキは再び大男 ルッカに向かつて駆けた。

茜色だつた空は、重たい闇を纏い始めていた。

西の夜空に一際明るい恒星が瞬く。あれはきっと、サツキの世界にはない星。それとも、宇宙は繋がつているのだろうか？

短い時間でそんなことを考えていたサツキがルッカに駆け寄ると、彼はいつもそうするように、屈んで腕を差し出してきた。

その腕に掴まると、もう一方の手で支えられながらいつもの定位置 赤子を抱き上げるような形で？？大男の腕の中に収まる。

なんだかんだで、ここが一番安心する。

なにセルッカは馬鹿みたいに強い。サツキが知る中では最強だ。出逢つた当初は死ぬ程ビクビクしていたが、彼との付き合いもかれこれ5年。慣れない方が難しい。

男がサツキには決して手を挙げないことは、共に過ごして来た年月で知つている。その理由は、未だによく分らないのだけど。

「…ルッカ、あの…」

サツキは、見慣れた怪しい白い頭巾に開けられた穴から覗く彼の目に、自身の瞳を合わせた。

彼がこの位置にサツキを置きたがるのは、多分目線だ。

身長差がありすぎて普段は顔さえのぞけないが、腕にのれば男の白い頭巾からほんの僅かに覗く褐色の肌や、意外に長い睫毛と、その下の砂漠の空のような色の瞳が見える。

何やら難しい理由で人前ではこのような怪しい面体をしているが、その素顔が雄々しく精悍で存外に美しいことは、ここではきっとサツキしか知らない。

「私…拙イ事、しちやつて、それで」

バツが悪いが、言わないわけにもいかずには早口に報告しようとしたら、不意にサツキを乗せた腕が揺れた。

「んわ！？なに！？」

危うく落ちるところだったサツキが驚いてルツカを見ると、彼はその砂漠の空色の瞳でじっとサツキを見つめていた。

もしかして、今のは励ましてくれたんだろうか…？

男の、相も変わらず分かり難い感情表現に、思わず小さく笑ってしまう。

滅多に喋らないし、奇妙なところも多いこの大男だが、彼がサツキの一番の理解者であり保護者であるのは間違いない。

ルツカなら、誰より信じられる。

状況は困難だ。解決策もなければ、自分の意志さえハツキリとは定まらない。

一人なら早々に諦め、流れに添う事を選んだだらう今回の件。

でも、サツキは幸か不幸か、一人ではない。

為「な」すべき事を。

サツキは決意の灯る瞳を、砂漠の空色の瞳に重ねた。

「お願イ、ルッカ。手伝つて欲しイことがあるの」

遅くなりました……ちゅーを脅しに使う男・空木（笑）  
変なところにフラグ立つてますが、そつちは置いといてとりあえず  
これにてサツキさん視点はお終いです。  
次回から佐波視点に戻りますが……まだまだ波乱の予感です。

人は臨終の前に呼吸が変わるという。

佐波は震んでいく意識の中で、徐々に自分の呼吸が苦し気になつていくのに気付いていた。

ああ、まずいな…

体中がバラバラになりそうなほど痛み、冷水に浸かっているような寒気と息苦しさで、意識を保っていることが難しくなつてきていた。今まで何度も死ぬ程の恐怖や危機を体感したが、ここまで”死”に近づいたのは初めてだ。

瞑つた瞼の裏に、安寧の常闇が蠢く。初めて見るはずのそれは、けれど何故だか妙に懐かしい。

それは佐波がこの世に生まれ来る前、確かに總てを預けていた原始の闇の搖籃。

怖い…

よつやくこの身体に馴染んだ魂が、切り離される恐怖に怯えている。震える身体を搔き抱く力も、もはや残つては居ない。どうにかして苦しみを逃したくて、下顎を動かすよつこにして呼吸した。

私は…

私は、愚か者だ。約束一つ守れない、それどころか周りの人間を巻き込んで揉め事を起こし、そのツケを他人に取らせてしまうような、最悪の人間。

でも、許せなかつた…

どうしても、あの男 清州の言葉が、我慢ならなかつた。  
遊女を畜生のように扱うあの男に、もし以織が触られていたらと思うと、目の前が真つ黒に塗りつぶされ、我を忘れた。  
あのような権力者に逆らうなど、少しでも世の中を知つていれば、絶対にしないであろう浅はかで愚かな行為だ。

喻え内心でどう思つていようが、表面では頭を沈め、平身して仕えるべき相手。

その相手に、真っ向から歯向かつた結果が、地下牢で一人臨終を迎えるようとしている自分に重なつていて。

しかもそのような人間に成り果てた理由が、己自身が引き起こしたことによる自暴自棄だというのだから、弁解の余地もない。  
自嘲しようにも、もう表情筋一つ動かせない。代わりに、瞑つたままの目の端から一筋、血の交じつた涙が溢れた。

以織…

会いたかつた。

ただ、会いたかつた。

死に瀕している今でさえ、こんなにも寂しい。

以織を一人で逝かせてしまつた癖に、自分が一人で逝くことに堪らない恐怖を感じている。

それはきっと、冥府でも以織と再会することが叶わないだろう」と

を察しているからだ。

自分は、天津国には逝けない。

それは、用心棒としての仕事の最中、生まれて初めて人を斬った時からずっと考えてきたことだ。

相手は山賊だつた。積み荷と仲間を守るためにには仕方がなかつた。だから斬つた。

でも、その数ヶ月後、同じ場所で再び現れた山賊は、以前佐波が殺した男の息子だつた。

佐波は、苦戦しながらも最後はその息子も殺した。

彼は「父を返せ」と泣きながら死んでいった。

後から聞いた話、彼らは山賊ではなく、貧困と重税に喘ぐ村の人々だつた。

それからだ。佐波が“命”を考える様になつたのは。自分が斬り捨てた命の重さを知り、取り返しがつかないことを知つてようやく、佐波は己の仕出かしたことの残酷さを知つた。己の命を守るため。仲間の命を守るため。そういう名目のために刀を抜けば、自己防衛は出来る。殺した命を“仕方ない”と斬り捨てることが出来る。

でも、それじゃ駄目だ。佐波は仲間が同じ理由で誰かに殺されても、きっと納得できない。間違いなく相手を憎み、その憎悪は激しい怒りとして相手に振り下ろされるだろう。

殺戮の連鎖を止めたければ、どちらか一方を根絶やしにするしかない。だがそれも新たな連鎖を生むだけ。

命を奪うということは、そういう無間地獄を作ることに他ならない。佐波はその地獄を作つた。その地獄で今も苦しんでいるのは、彼らの残された家族。

こんな自分がのうのうと天津国に旅立てるはずもなければ、先に逝

つていて以織と再会できるはずもない。

冥府で裁かれた魂は、その業「じゅう」の比重で天津国での再生の道と、獄洛「ごくらく」という冥府の深海への道に分たれるときく。獄洛に沈んだ魂は、そこで数々の苦痛を味わい、身を削つて汚れを落とした魂だけが、再び海面・天津国を目指せる。

以織を追つて逝けるまでに、一体どれほどの時間をその深海で過ごすことになるか…想像するのも酷く恐ろしい。

？？？…それとも、これで良かつたのだろうか…

会いたい、会いたいと願いながら、一方で以織に会うのが同じく怖かった。

彼の知る”佐波”は、籠の中で何も知らず、また知らされることなく育つた無垢な存在であるはず。

美しくもなければ、知性があるわけでもない。女だというのに、それらしいことは殆ど出来ない、見窄「みすぼ」らしい自分。

もし再会出来たとしても、5年振りに会う以織は、そんな成長を遂げた自分の姿を見てどう思つただろう。

以織の心根の優しさや清廉さを、佐波は誰より知つてゐる氣でいる。どのような生活を送つうと、どのように糞の扱いを受けようと、以織の心根 자체が歪む事はきつとない。

泥水の中でも、珠が珠であるように。

佐波が以織に出会つた頃には既に、彼は完成された個を持つていたからだ。

でも、より多くのものを見聞きし成長した彼が、今の佐波を知つて、昔の様に接してくれる保証はどこにもなかつた。

…否、確實に”昔の様な”関係には、どう望んでも戻れまい。

佐波はもう貴族の子女ではなく、以織もまた、使用人の子ではない。一度手放してしまつた縁を再度繋ぐことが、どれほど難しいことか…この5年で骨身に染みてゐる。

？？？ならばいつそ、この記憶を抱いたまま、獄洛の海に沈む方がいいのかもしない。

：自分が彼の為に出来る事は、本当にもう何も無い。  
美しく優しい記憶を抱いて、苦悶の海底で、彼の次なる生での幸福を全靈で祈る。

それすら、今の自分に許されるかどうか。

ふと、昔以織が冥府を信じないと言っていた姿が記憶を掠つた。  
あの時は彼の言葉の意味が理解出来なかつたが????今なら解る。  
きっと彼は、あの頃から既に知つていたのだ。  
関係が永遠でないことを。終わりが訪れた後に襲い来る、絶対的な寂しさを。

ぐわん、と、覗えてもいらない世界が歪んだ。

ああ、…駄目だ。…もつ…

牢の外で聽こえていたはずの看守の声が聞こえない。どこからか落ちて響いていた水音も。

その代わりに耳鳴りが酷く鳴る。いや、これは耳鳴りではない。 “ 静寂 ” という音だ。

苦しいが、不思議と身体が軽くなるような錯覚。

感覚から死んでいつているのだろうか、と考えた頭も鈍っているのだろう。それを恐怖に感じることはない。

あるいはただ、細い息と、少しの思考だ。

以織  
…

ぶつ切りになる思考で、佐波は最期に以織のことを想つた。

以織も、死ぬ時は怖かっただろう。一人で、寂しかっただろう。  
生きて、やりたいことがあっただろう。  
もしかしたら、遊郭に居る間に好いた人がいたかもしれない。  
そんな人を残して死んでいくのは 本当に辛かっただろう。  
帰る場所も、何も持つていらない自分でさえ辛いのだ。  
恥知らずにも、生きたいと思っているのだ。

以織、以織：

ごめんなさい。ごめんなさい。

私は最期まで、自分の為にしか生きられなかつた。  
あなたが私にしてくれたことの一つも恩を返せなかつた。

会わせる顔がない。恥ずかしくて、情けなくて、 悔しい。

? ? ? … でも…わたし、は…あな、た… に…

常闇の揺り籠に抱かれる。

意識が”静寂”と共にゆっくじと身体から解け

佐波は、ふつ、と呼吸を止めた。

どん！ といつ衝撃を胸に受け、空氣の固まりを無理矢理に吐き出された。

その痛みに「はあ！」と息を吸い込み、再び吐き出す。

何事が起きているのかも分からぬまま、瞬時に沸き上がった激しい嘔吐感と体中の痛みに、佐波は苦悶の声を上げた。

「 ? 戻つたか」

水の中から音を聞いているような、奇妙な音声だつた。

遠くから呼びかけられているような、近くで囁かれているような、曖昧模糊とした声に反応して開けつつした目に、暗い何かが覆いかぶさる。

「閉じている。瞼が切れている。目に血が入るぞ」

端的に告げる妙に陰鬱な声が、佐波の朦朧とした記憶を揺らす。

だ、れ…？

「…………あ…………」

状況が全く分らず、その恐怖から声を発しようとしたが、舌も上手く回らない。

それどころか力の入らない舌で潰れかかった気道に、何かが乱暴に突っ込まれて嘔吐「えず」いた。

「気道を確保する管を入れた。今は応急の手当しか出来ない。我慢してくれ」

手、当…？

何がなんだか分からない。分かるのは、今もの凄く、吐きたいといふことだけ

「吐くときは言え。吐瀉物で窒息なんて笑えんぞ」「は、ぐつ」

言われた先から猛烈な吐き気を催して身体を跳ねさせると、”誰か”は手際よく管を引き抜き、佐波の身体を横向きに倒した。

「吐けるだけ吐いたら、また管を入れるからな」

な、何が起つて、いる…？

囲の中を全て吐き出しながら、佐波は混乱していた。

じ、自分は、ええと……ええっと……あ、れ……？

朦朧とした頭には、どのような情景も映し出されない。

空っぽだ。恐ろしいほど、何もない。

ぞっと背筋を通った寒気は、全身の痛みと吐き氣で霧散される。

”誰か”の言葉の通り吐けるだけ吐くと、ひと呼吸の後に、口の端から冷たい物が流れて来た。

「口の中を漱【すす】ぐだけだ。吐き出せるか？お前の身体はまだ水も受け入れられないからな」

「う、げほ…」

吐き出すとこりゅつ、端ぐの端から勝手に流れ出た水を吸い込んだ氣管支が、強烈に痛んだ。

どうやつたつて逃れられない苦痛にガクガク震える佐波の額の汗を布で拭いながら、”誰か”は「ところで」と、不思議な親しみすら感じさせる陰鬱な声で続けた。

「死にかけているところ悪いが

お前には今から、脱獄しても

「うづ



一度死んで脱獄するヒロインって…

「渕樓庵の大火の参考人が死んだそうです」

形式張つた礼をして入室してきた自分付きの下士官に目をくれる事もなく、青年は一言「そう」と答えた。

青年 右相は、その整つた顔に柔らかな笑みを浮かべながら、手元の書類を捲り、書き足し、時には項目「ページ」ごと塵箱に捨てている。

これらの機密書類は、部屋にある暖炉で燃やされ、灰となつてからしか室外に出される事を許されない。

既に塵箱に溢れ返つて床に広がつているそれらをちらりと目の端で確認して、下士官の男は右相の青年が凡「およ」そ何刻机に向かつているのかを算出した。

ざつと、六刻か…

詰問会から帰つてずっと、ということだ。

凡人の集中力ならばとっくに切れている頃合いだろうが、この若き右相には雑作もないことらしかつた。

仕事量、采配力、判断力、決断力、どれをとっても彼程國の中枢に相応しい人間もそう居ない。

加えてその野心。始終浮かべる穏やかな笑みの下には、常に冷酷で獰猛な獸が、”障害物”の喉笛を噛み碎く為に息をひそめている。その歯牙にかかつた数多のかつての役員の顔を思い浮かべながら、下士官の男は水差しから杯に水を注ぎ、右相の青年に差し出した。

「休憩なさいませんか。見たところ、急ぎのものでもないのですよう？」

男の言葉に、青年は顔を上げた。そして笑みを深める。

「景林「けいりん」、君くらいなものだよ。僕にそういう助言をするのは」

「不要でしたか？」

「いや、助かるよ。どうにも、根を詰めすぎてしまつみたいでね」

軽快に笑つて下士官の男 景林の手から杯を受け取る。  
上司が喉を潤すのを無感動に見つめながら、景林は口を開いた。

「参考人の死に、軍部の清州の関与があるとの報告が  
「きよす？…ああ、清州ね。いたね、そういうえば」

記憶力が飛び抜けていい青年に、一瞬眉をひそませる”清州”の存在感の薄さに驚くべきか、それとも数百、数千人規模の組織の中にいるそんな役員すら覚えていた青年の方にこそ驚嘆するべきなのか。

青年はほんの少しだけ視線を下げ、手元の書類を一瞥すると、その上に無造作に肘をついて聴く体勢に入った。

「で、その清州が参考人を死なせたと？」

「はい。”臨「りん”からの報告ですと、参考人の不遜な態度に清州が逆上したと」

臨とは、右相が使っている密偵集団の名称だ。どこにでも入り込み、どこからでも知らせを運ぶ。

政治は情報戦だ。このよつたな組織を持っているのは何も右相に限つたことではなく、皇帝、左相はもちろんのこと、力のある貴族議員・役員なら誰でも一人、二人は従えている。

ぎい、と椅子を軋ませ、青年は深く座り足を組む。

「…おかしな話だな。そもそも国内での参考人の身柄の確保は警吏の仕事だ。軍部「あちら」はあちらで密輸の件での捜査のつもりなんだらうが、役員がわざわざ自ら出向く様なことでもない」

「警護府「こちら」を出し抜きたかったのでは？管轄は違えど、警吏と軍部役員では格が違いますから、容易に容疑者を奪えると考えたのかもしれません」

「それにしても随分とお粗末な人選だ。清州は確か、世襲役員だらう？氣位ばかり高い、この政界「せかい」じゃ珍しくもない人種の世襲役員とは、その名の通り家名や金銭で官位を買った役員のことだ。

今の政界では、実に8割もの役員が相当する。

上には媚び、下には非道な振る舞いし、鬱憤が溜まれば言いがかりをつけて部下に暴力を振るう　　そして場合によつては相手の命を奪うことも珍しくない、なんとも迷惑この上ない人種だ。もちろん皇国の法律では殺人を禁じてはいるが、官位のある者とそうでない者とでは、罰の重さには雲泥の差がある。告発されるとも滅多にない為、彼らの罪は黙殺されることが多い。

「ヤツを使うくらいなら、他にも選択肢は山ほど在つただろう。」  
…特に、左相閣下の采配なれば

青年右相とは違い、左相は永きに涉る皇帝側近の血族出身で、生まれながらに上位の格を持ち、誰よりも深く皇国の中核に関わつてい

る。

それだけに彼の政治上の実力は凄まじく、出世に手段を選ばない青年右相と云えど、迂闊には手を出しかねる相手。

その左相が、清州のような世襲役員を自ら使つだらうか？ 答えは、”否”。

「仰る通りです」

右相の言葉に、景林は頷く。

「どうやら清州を向かわせたのは、左相様直接の指示ではなく、現軍部総統司令長官の功醍」「こうだい」様のようです」

「功醍？…ああ、なるほどね」

左相が軍部の実質の実権を握っているとはい、今は政界の人間だ。命令を下したのは左相かもしれないが、部下の采配は現総司令官の功醍に任せたのだろう。

…それにしても。

「…妙だな」

一連の流れに、意図的なものを感じる。

そもそも今回の件は、捲れば捲る程項目「ページ」の増える本のようだ。

溴楼庵の大火から始まり、誘拐未遂、殺人、地方豪族家の密輸疑惑…そしてその全ての共通項だつたたつた一人の参考人の死には、普段なら有り得ぬ人事が絡んでいる。

自分がこの物語の作者ならば、どのような結末を用意するだらう？ そんなことを考えて、右相の青年はふ、と笑った。

確かに放火や殺人なんて、国内では珍しくもない。密輸も、賄賂と汚職に塗れた政界ではよくあることで。なのにこの件だけが際立つて見えるのは、それなりに連続性と、微かに”別の目的”が匂うからだ。

さながら林の中に一本の木を隠す様に。これまでの事件の裏側で、密かに動く”影”を感じる。

その”影”こそが、”真相”。

「…どうやら、綻びが見えて来たなあ」

二ヶコリと、無垢な若者らしい笑みを浮かべる青年右相に、彼付きの下士官は畏まつた礼を捧げた。

「い」命令を

「功醍と清州の詳しい調査と尾行を”臨”に。あと君の部下を数名溟樓庵に配置してくれ。死んだ参考人の遺体の確認もだ。悪いけど、今回は君にも裏で動いてもらつ。いいかい？」

「一命を賭しましても」

「大げさだな」

小さく笑つて、彼は「ああ、ついでに」と続けた。

「今日はもう遅いし、執務室[イリ]に泊まるよ。そう家に伝えてくれないか」

「奥方…季薇[きい]姫様が閣下のお帰りをお待ちです」

景林が能面のような無表情でそれを告げると、青年は笑みを深める。

「不甲斐ない夫だろ？ 独り寝が寂しいような、君が相手をし

てあげてくれると僕も助かるんだけど」「不甲斐ないばかりか、不誠実ですね」「心ない相手に性欲の捌け口として使われるよりは、彼女にとつても良いかと思つてね」

「それは私でも同じ事です」「さて、それはどうかな」

青年は杯を傾け、喉を潤しながら、

「君は優秀だ。従順で忠実。時に僕以上に職務に冷酷になれる。？？けど、姫のことになると、途端に感情を見せるね？」

言つてニギコリ下士官に笑いかける。

その邪氣の無い？？その所為で本氣で殺意の湧く様な？？笑みを向かれた下士官は、一瞬口を噤[つぐ]み、

「…………時々…………」

至極重たいため息をついた。

「…あなたの水に毒を忍ばせたくない」「君なら出来るだろうね」

でも僕は君を信用しているから。と明るく言つ青年に、景林は舌打ちしたい衝動を寸で堪えた。

代わりに、反撃を試みる。

「閣下が成そうとしていることは、狂氣の沙汰です。しかもそれが、行方の知れない”奥方”の為だとは？？？左相様が知れば、さぞかし喜ばれましょう。あなたの弱みを握つたと

「左相閣下に言うかい？」

「いいえ。私は閣下の”僕”です。閣下の失墜など望むはずがない  
「僕の失墜は、牽いては姫の哀しみだものねえ」

愛しい姫君の為に、その夫で皇國「いのへこ」を傾けようとしている悪魔に手を貸す。

…なんとも健氣で、実に単純な思考だ。  
けれど右相である青年は、そんな下士官を誰よりも高く買い、信用している。

或る意味姫という人質を盾にしているわけだが、互いにそれくらいの牽制があつた方が、この二人の関係は上手くいくのだ。

「？？？閣下は、どうなさるおつもりですか」

いつも言い包められる立場の下士官が低く呟く。

「閣下の”奥方”がもし、もうこの世にいなければ？？？」

？？？探し人が、既にこの世に居ないとしたら？？？

右相の青年は、もう何度も自分に掛けたその問いを下士官の口から聞いて？？？それでも微笑んでみせた。

「さあねえ…。なら、この世以外を探すとしようつ

諦めるつもりなど毛頭ない。

その為に血反吐を吐きながら這い上がってきた。

全ては、少しでも高みから、彼女の行方を探す為。

ただそれだけの為に、多くのものを裏切り、切り捨て、ここまで成り上がつて来たのだ。

：彼女を見失つて、もつ既に5年もの月日が流れていよつとも。

？？？」の手に、取り戻す。

それが青年の、意味の無い世界に意味を齎「もたら」す、唯一無二の光なのだから。

\*

じじ…と灯油「あかりゆ」が燃える匂いと、微かに血の匂いがした。

清潔に整えられてはいるが、高い場所に横に細長い天窓があるばかりの、四畳程の小さな部屋。

四方は固い木材の壁に囲われ、出入り口も、通常の半分程の大きさしかない。

元々は茶室用に設計されたが、建物自体を遊郭に買い取られてからは、主に碇を破つた遊女の拘置部屋として使われている。床が置ではなく板張りなのは、折檻を受ける遊女の血を容易に拭える為にだ。

その冷たい床に、青年は座つている。

行灯に半身照られた彼の身体は、もう半分を闇に蝕まれ、地面上に濃い影を落としていた。

まるでその闇に溶け込もうとするかのように、青年は暗い色合いの着流しの上から、同じ様に暗褐色の羽織を肩に掛けているが、闇に浮かぶ様な匂い立つ色香を纏わせる青年の美貌は、闇の中に在つて尚、消せるものではない。

彼はけぶるような睫毛を伏せ、すつと通つた鼻筋の下にある形よい唇を固く結び、ただ只管「ひたすら」にある一点を注視し続ける。

視線の先には 布団に横たえられた、一人の少女。

上から寝布を掛ける事も出来ぬ程に満身創痍である少女は、命の気配すら失せたかのような姿で、包帯と湿布に包まれた身体を布団に沈めている。

顔面にも大きく張られた湿布は少女の両耳までも覆い、薄く開いた唇はカラカラに乾いていた。

水飴の中を泳ぐような永い静寂を破り、青年の指が、戸惑いながらそつと少女に伸ばされた時。

風もなく、灯りが揺らめく。

「…意氣地のないことだ。」

部屋の隅、男の背後から、低く囁う声がする。

「叩き起こして、感動の再会でもしたらいつだ。今なら、その娘も容易にお前を受け入れるかもしけんぞ」

僅かな光源すら避けるように闇に身を浸したその男が音もなく姿を現したといつに、背を向ける美貌の青年は、振り返つて相手を確認することもなく、ただ少女に伸ばしかけた手を、ゆっくりと自身の膝に戻した。

「…何の用だ」

青年が低く囁くように呟くと、闇の中の男は耳障りな声で小さく囁つた。

「お前じゃ、こんなところに居てもいいのか？ 見つかればお前は元より、この娘にも害が及ぶだろ？」

闇の中の男の視線が、横たわる少女に向けられる。それを知った青年は、忌々し氣に闇に振り返つた。

「消えろ。この女「ひと」の居る処に、闇「おまえ」が近づくな。」「それじゃ、お互に様だろ？」

闇が可笑しそうに囁く、そしてひたりと声を潜める。

「何を怯えている？ 闇も恐れぬお前が、その娘の前ではただの小僧のようだ。 娘に知られるのが怖いか？」

増殖する闇がぬるりと住処を離れ、手を伸ばす。

「娘を傷つけることが怖いか？ 娘を裏切ることが怖いか？ 娘に嫌われることが怖いか？ 容易く他を切り捨てるお前が、惚れた女からの軽蔑には耐えられぬと、そういうことか」

行灯の灯りが揺れ、芯の焼ける匂いがする。

ざわざわ、ざわざわと蠹く闇が青年を包囲し、カラカラと囁つた。

「だがもう遅い。お前の成した事は、すでに取り返す宛の無い過失だ。娘に逢う前まで時を遡り、自害でもしない限り、お前がこの娘を傷つけ裏切る」現在「いま」を変える事は出来まい。苦しいか？ 苦しいだらうなあ……？ そうだ、ここを抜け出したらどうだ？ …否、娘を置いて一人ゆく事など、お前には出来るわけがないか。身代わりに身体を売つたくらいだ。…あの時は随分驚かされたぞ。まさか、お前の方が”奪われる”とは

微動だにしない青年の瞳に浮かぶ、酷く暗い感情を煽る様に、闇がその形よい耳にそつと口をつける。

「その娘が大切なば、その腕に囲えばいい。毎朝毎晩可愛がり、とろとろに溶かしてしまえばいい。 そしてお前無しじゃ息を吸う事も假ならなくなつた頃合いを見計らい、娘の小さな耳に、甘く囁くんだ。

『あなたの生家を潰したのは、私です』と

「

全て、嘘だったのです、と。

「…黙れ」

青年が、低く唸る。

それと同時に、青年を囲っていた分厚い闇が、ふう、と風に吹かれ  
る様に揺らいだ。

元の明るさに戻った部屋で、闇色の毛皮に覆われた獰猛で気高い獸  
が、激しい怒りをもつて闇と対峙している。

射殺そうとせんばかりの視線を当てられた闇は、カラカラと嗤いな  
がら消えてゆく。

「可哀想な男だよ、お前は。愛を知りもせずに、愛されたくて溜ま  
らない。愛し方も知らない癖に、愛したくて溜まらない。…月を欲  
しがる小僧のようだ。ああ、哀れな男だよ…」

最期に、嘲りを残して。

重しを外したかのように軽くなつた闇の中で、行灯の灯が揺らめく。  
じじ…と芯を焼く音。

青年は酷く疲れた顔で、何も知らずに横たわる少女に向き直つた。  
少女の顔には、まだ赤みのある痣や小さな傷が残つてゐる。  
薬のお陰で激痛に眠りを妨げられる事もなく、外界から完全に遮断  
された状態の彼女のカラカラに乾いた唇に、青年はそつと手を伸ば  
して触れた。

「 愛なら、知つている」

その囁きと同じく、甘く濡れた白い指先が、少女の唇を優しく  
なぞる。

先ほどの獰猛など微塵も見せず、木漏れ日の下で身体を休める  
獸のような従順さで少女に寄り添う青年は、暫しの間そやつて心  
を安めていたが、やがて名残惜し気にその指を離すと、虚空中に声を

かけた。

「我が姫を、このような痛ましい姿にした罪を、どう償わせる」

「…首をお持ちしましょつか」

静かに返つて来る心え。

老いも若さも感じさせない無機質なその声に、青年は底冷えする憎悪の透けた笑みを浮かべた。

「首など。…欲しいものは、出来る限り永久に続く『苦痛』だ。生きている事を後悔しようとも、止める事も出来ない永遠の連鎖に閉じ込めて、命果てるまで翻つてやる。もちろんお前達も同罪だ。…だがお前達の償いは、別にある。心せよ」

大氣も凍るような青年の微笑みに、彼に従つ忠実な獸は、平身してその言を受けた。

「御意に。 総主様」

行灯の灯が揺れる。

雪が、散らついていた。

白く、清廉な世界が数度瞬いて、佐波はその場に立ち戻りしている自分に気付いた。

体が軽い。目の前の靄が晴れたように、頭も明瞭としている。なんの杞憂もない、音も熱もないその世界で、佐波はゆっくりと空を見上げた。

…雪だ。

無意識に手の平を虚空に差し向ける。

振り落ちる花びらのようなそれは、けれど佐波の手には触れず、空気をすり抜けて地面に零れていった。

…ソレは…

よつやく思考が回り始め、佐波はその場所を明確にしようとした視界を彷徨わせる。

すると佐波の視界を助けるように、世界はぐるりと回転した。白いばかりの景色が淡い陰影を描き、遠近を映し、やがて、やがて、雪の舞う広場へと姿を確定する。

広場……いや、違う。佐波は、此處を知っていた。知らないはずがない。

だつて此處は

『約束を…して、頂けますか』

声。少年のまだ柔らかいその細い声に、佐波の意識は急速に過去を遡つた。

視界が揺れる。その次の瞬間には、佐波の目前、ほんの数歩の距離に、彼らはいた。

白い地面に膝を折り、薄い衣服を粉雪に濡らして、一人の子どもが祈りを捧げるようにその手を繋いでいる。

その一方の使用人然とした服装の黒髪の少年が、頃垂れる少女の手を握り、震える声を上げていた。

『私を、迎えに来て下さると…約束して頂けますか』

この、記憶は…

震える。そうだ、この記憶は。

何度も何度も繰り返し、忘れる暇も無い程思い浮かべた、あの日の光景。

愕然とする佐波を置いて、白い白い世界は、それでもゆっくりと進んで行く。

『…嘘でも構いません。…嘘で、いいのです。ただ、姫様が頷いてくだされば、それでいい』

白い吐息が立ち昇る。降り続く雪片の間から、赤くかじかんだ二人

の繋いだ手が見えた。

少女が重たい首をのろのろと持ち上げる。  
その頬は赤く腫れ、よく見れば顔も腕も

全身、雪と泥に塗れ

ていた。

少年はそんな少女の汚れた頬を、空いた手で何度も撫でる。  
何度も何度も、まるでその輪郭を手の平に記憶させるように。

そうすることで、互いが一つに溶け込むと、信じてゐるやうだ。

『そうすれば、私は明日も生きることが出来る。明日も、明後日も、  
姫様を想つていられる』

少年が、少女に顔を近づけた。

涙は既に凍つっていた。睫毛に積もつた雪片がキラキラ輝くその光景  
に、佐波は

……ああ…… ああ。

佐波は、目を覆いたくなつた。

思い出したくない。  
思い出したくない。

この記憶は、かつて佐波の希望だった。

この記憶が在る限り、迷いなど持たない、持ちよしが無いと思つて  
いた。

思つていた。

思つていたのに。

以織。

以織、以織、以織。

その名を呼ぶ。空氣を振動させない音で、佐波は叫んだ。

駄目。行つては駄目。

”わたし”はその約束を果たせない。

嘘でもいいと云つたあなたの、それでも消えなかつたであらう希望を、私は打ち碎く。

あなたがこれから、どれほど辛い目に遭つかもまだ知らない。知らないから、手を放せたの。お願い、ねえ、それよりその手を取つて、どうか逃げて。少しでも遠くへ。少しでも永く。

生き存「ながら」える必要なんかない。

直ぐに連れ戻されることにならうと、飢えで、寒さで命尽きようとして

私たちは 私は貫くべきだつた。

彼を大切だと思うなら、時代わりにしたくないと思つなら、己の姑息さを、弱さを嘆く前に。

私は、彼と伴にあることを、貫くべきだつたのに。

声が、白い光景の中の二人に届くことは無い。決してない。俯き、それでも、どうか、どうかと叫んだ佐波の耳を、少年の固く、それでいて恍惚とした声が打つた。

『姫様、これは罰なのです』

コレハ、罰ナノデス

記憶に吹き込んだ、古くも生々しい言葉。

佐波は顔を上げる。その間に、少女の耳に口を当て、囁く少年の姿が映つた。

『私は罪を犯し…あなたを、悲しませた。だから、これは当然の報

いなのです』

目の前の光景と、記憶に差異はない。ないはずなのに、何故だかこれが初めて聞く言葉のように思えて、佐波は一字一句聞き逃すまいと感覚を澄ませた。

『あなたはまだ知らなくて良い。…どうか、知らない今までいて下さい。あなたには、知られたくない。嫌われたくない。…ああ、でもいつか。いつかあなたも知る時が来る。解っているのです。私の本当の償いは、そこから始まる。あなたが全てを知つて、それでも私と伴にあることを望んでくれるなら、私は』

少年の言葉が途切れる。

呼ばれたように顔を跳ね上げ、背後を確認した彼は”誰か”に小さく頷いてみせると、再び少女に向き直つた。  
もう猶予がない。これが最後だと、その表情が告げている。  
崩せんとしていた少女も、彼のその表情に気付いて、腫れた顔を歪ませた。

幼く、無知で無力な少女。

それでも少女は、この別れが、己の力ではどうやっても回避出来ないことを知つていた。

少年が、両手で佐波の片手を握つた。  
その手に力が籠り、許しを請うように頭を垂れ、  
そして、彼  
は云う。

『姫様……私の姫様。どうか、お願ひです。いつか、”その時”が  
来たら、…必ず、』

必ず、私を迎えて下さると、約束して頂けますか

\*

「起きる」

最の囁くような低い声に、佐波の瞼がぴくりと動いた。包帯を解いたばかりの瞼には、真新しい傷がある。

痛々しいが、そのお陰で眼球は守られたのだと思えば、そう悲惨にも見えない。

それよりも、青ざめているを通り越して土気色になりつつある顔色の方が、よっぽど悲惨で、悲壯だつた。

最の呼びかけに、佐波は薄らと瞼を持ち上げ、瞼を離れて口を開いた。

「……や、い……様……」

掠れた、小さな声。弱々しい小動物の鳴き声のようなそれに、最は応える。

「よく耐えたな。一通りの施術は終わった。そろそろ麻酔が切れる

頃だらうから、先に痛み止めを飲むといい。中に睡眠薬も混ぜておくから、よく眠れる」

感情の籠らない鋭利な口調だといつて、云つている内容は酷く優しい。

麻酔で意識を失う前に見たままの最の姿に、佐波は小さく瞬いてそれに応えた。

「どうやら、あれから……脱獄の日から、数日が経過しているようだった。

その間怪我の高熱で生死を彷徨つた佐波には、今の正確な日時は愚か、ここが具体的に何処なのか、何故自分が再び手厚い治療を受けているのかさえ、さっぱり検討がつかない状態だ。

分かっているのは、運ばれたのが四畳程の小さな部屋で、そこでひたすらに眠られ、起こされたと思えば激痛の伴う施術（手術）を体中に施されたことくらいだ。

特に火事で負傷した左肩から腕にかけては何箇所もの骨折があり、一度の施術では麻酔の時間が足りず、今回が一度目となつた。

麻酔でまだ霞がかつた意識の中、先ほどの夢の光景が視界を横切り、佐波は思わず、ふ、と口元を緩めた。

「……い、おり、を……見たのです……夢の、……中、で……」

喉を押し開いて、もつれそうになる舌をどうにか動かし言葉を紡ぐ。その恍惚とした声に、手早く薬剤を調合していた最はその動きをピタリと止めた。

場の空気が僅かに変わつたことにも気付かずに、佐波は夢の中を歩くよひに囁く。

「…迎えに……来る」と……約束……した、のです……  
「…あまり喋るな。舌を噛むぞ」

最も静かな忠告を、佐波はゆっくりと破る。

「最、様……本当に、……以識は、もへ、この世に……居ない、の  
でしょ、う、か……」

揺れる灯りが、布団に横たわる佐波の輪郭と、黒い羽織の最を照らし、壁や床に依「よ」り濃い影を生む。  
じじ……と灯り油の芯が燃える音が、厭に大きく聞こえた。

「もし……そう、なら……私は、これから……」

どうすれば、いいのか。

何度も心の中で自問したことなのに、口に出せばよつ一層の焦燥を得る。

正常な判断が出来る状態の佐波なら、そのような弱音は、間違つても口にしなかつただろう。

だが、麻酔で半分麻痺した思考は、それを考えるまでに至らない。逆を云えど、思考など崩落していくてもおかしくない状況下であつても、その事だけは頭から離れないといつこと

佐波の言葉に、最は暫く黙つて薬湯を練つていたが、やがて小さく呟いた。

「…お前は、”いおり”に惚れていたのか」

その言葉に、佐波は瞬いた。

『ホレティタ』とはどういう意味だつたか、と鈍い頭で考え、やがてその答えが一つしかないと氣付くと、更に自分に問いかけた。惚れている、とはつまり相手を好いているということ。ならば、以織は完璧に当てはまる。

だが佐波も17年生きて来て、『好き』には色々な種類があるので学んでいた。

以織は大切で、大切で、とにかく大事な人だ。他の誰にも代え難く、彼の為ならば何だつて出来ると信じている。

だが、それを”恋”という名前の感情一つに押し込めるのは……何故だか酷く窮屈に思えた。

視線を彷徨わせ、瞬き、考え やがて佐波は観念したように肺から空氣を押し出した。

「…………わか、りません…………でも…………ただ…………彼が、恋しい、…………」

佐波の答えに、最は眉根を寄せた。

影を背負つたその姿は、今まさに魂を狩りつとしている死神「ガロン」のようである。

「もし会えていたとして、どうあるつもりだつたんだ。手引きでもするつもりだつたのか？」

至極不思議そうに問いかけてくる最に、佐波もつられて不思議な心地になつた。

最は姿は死神のようであつても、中身はその真逆に人を救うこと尽力する良い医者だ。

佐波のような使用者を相手にする医者の中には、立派な看板を掲げ

ていようと、医学など民間療法しか知らないような輩も多かったと聽く。患者を身分で選び、金儲けの為だけに腕を振るう医者も多かった。世では、彼は異質ともいえる。

遊郭という特殊な環境が彼をそぞろさせるのか……などと考えていた佐波は、じつとこちらを見つめて答えを眞面目に待っている最に、少し慌てながらも……思わず小さく笑っていた。

「……それも、良かった……でしちゃね……」

口からついて出たのは、心からの本心。手に手を取り合ひ、闇の中に飛び込む。その時世界は、どれほど輝いて見えたことか。

有り得るはずのない光景を思い浮かべると、感覚の無いはずの胸が痛んだ。

「生涯、会えないよりも、ずっと……。一人で、死なせてしまつよつ、ずっと……」

目を閉じる。そこに以識の面影を探したけれど、闇が映るだけだった。

「……お前は変わつてゐる

幾ばくかの間のあと、最は静かに息をついた。

そして、手元の茶碗から薬湯を急須に移し替え、佐波の口元に差し出す。

「普通、そつこいつの詞は男に云ふわせるものだ。男の立つ瀬も考える」  
言いながら口に急須の口を押し付けられて、佐波は「むぐ」と呻い

た。

本能的に流し込まれようとする液体を拒否しようとする佐波に構わず、最は急須を傾ける。

「男に狂った女は山程見て來たが、どれも哀れなものだつた。だがお前は…不思議だな。お前なら、やううと思えば手引きすら完遂してしまっそうだ」

「む、ぐうう…」

「苦い。いや、苦いとかいうものではない。痛い。舌がじんじんと痺れるようだ。

麻酔が残つていってもこれほど激しい味となると、完全に覚醒してからでは飲めたものではないだろう。

動けない身体を捩つて苦しんでいる佐波に、最は恐ろしい程の真顔で云つた。

「男前だと褒めているんだ。喜べ」

…『男前』は、女にとつても褒め言葉なのだろうか…  
息も絶え絶えに痛み止めの薬を飲み終えた佐波が、疲れ切つた土氣色の顔でぜいぜいと息をついている姿を見つめながら…やがて最は視線を下げた。

「…怪我が治つたら、お前に話すことがある。　　”いおり”のことだ」

口内の強烈な苦みも瞬時に忘れて、佐波は目を見開いて最を見た。揺れる灯りの中に浮かび上がる、陰影の濃いその表情からは、何も見出せない。

？？？以織の、こと……

麻酔の解けかけた身体に、じくじくと熱と激痛が戻りつつある。脂汗を浮かべた肌に張り付く衣服の感触まで戻つて来て、佐波は無意識に、息苦しさに喘いでいた。

「……い、ま、」

今、話してくれれば？？？

そう言おうとしたのに、舌がもつれる。…違う、動かないのだ。急速に視界が狭まり、意識を引きずり込もうと闇が手を伸ばして来たのを感じて、佐波は必死に抗つた。

？？？そうか、そう、いえば、痛み止めの……中に……睡眠薬を……

それにも効き目が早すぎないか、という疑惑まで呑み込んで、意識がぶつつりと途絶える。

その直前に、身を折り屈めた最が耳元でそつと囁く声が聴こえた気がした。

「自分を保て。どのような苦しみの中でも、自我を手放すないおり”に会いたければな

次に佐波が目を覚ましたのは、最に薬を飲まされてから一日も経つた夕時だった。

一体どれほど強力な睡眠薬だったのかは分からぬが、確かに施術直後の痛みを感じずに済んだのは良かつたのかも知れない。

それでも薬が切れれば、感覚は鮮やかに蘇る。

覚醒を始めた意識を同じ容量だけ痛みが蝕み、佐波は全身の鈍痛と熱に浮かされるよつにして目を覚ました。

「…」

鉛のように重たい瞼を必死に開いて、霞む視界を保とうと何度も瞬く。

何処だったか…ああ、そういうれば、見覚えがある…確かに、眠りに落ちる前も、ここに…

ようやく見え始めた世界は、半分闇に浸された、茜色をしていた。どこから零れる光だらうかと思えば、目の端に天井高くに横に細長い天窓があることに気付く。

光の幅から見ても、手を出すことも叶わないほどに細い、空氣穴のよつな窓。

事実、この板張りの部屋には他に窓らしきものは一切なく、硬質な板張りの間取りは息が詰まる程に閉じ切られているのだから、空氣

を通す為の窓なのかもしれない。

よく耳を澄ませば、どこからか人の笑い声と、弾く様な弦楽器の音が聞こえて来る。

何処「いすこ」かで宴でもしているのだろうか…と過った思考を遮るよう、唐突に壁の向こうに気配を感じた。

身を強ばらせると同時に、壁の一部かと思つていた部屋の扉 普通の扉の縦に半分ほどの大きさしかない の外から重たい金属をガチャガチャと鳴らす音が聞こえる。

これは……施錠の、音…？

どうやら、ここは外から厳重に閉め切られているようだ。

警鐘を鳴らす本能は鈍い身体と思考の所為で役にも立たず、佐波はただ朦朧とした意識の中で扉が開くのをじっと見つめていた。

扉が、ガタッと音をたてて開かれる。

そこから潜るようにして入つて来たのは 見知らぬ、瘦せた若い男だった。

使用人のようにも、下男のようにも見える様相。体格の程は知れないが、身のこなしには全くの隙がない。

扉を潜るなり視線を布団に横たわる佐波の目と合わせたその眼光は驚く程冷たく、それと同じ位に愉快気だ。

男は、さつぱりとした黒髪を揺らして首を傾げ、笑う。

「お田覚めのようだな。良かつた。叩き起こすのは嫌いじゃないが、加減が苦手なものでね」

あつさりとした口調のくせに、言つている内容はえげつない。

本能が警鐘をかき鳴らすが、今の状態では逃げ出すことも迎え撃つ

ことも叶わぬ、ただ身を守るように身体を緊張で固めた佐波に、男は何気ない動作で布団のすぐ側で胡座を組み、佐波を見下ろした。そして、

「ここが何処だか分かるか？」

世間話をするように問う。

佐波は少しだけ間を置き、掠れた、吐息のような声で素直に「……いえ」と答えた。

男は佐波が言葉を返したことに對してか、僅かに目を細めると、

「ここは皇都遊郭街の……まあ、渕楼庵の姉妹楼の一軒だ。今現在、渕楼庵で働いていた者達はここと、あと幾つかの同じ様な軒に分かれて仮営みをしている。渕楼庵は再建中だ。あれだけの建物がほぼ全焼したのだからな。幾ら金を積んだとしても、少なくとも完成は来春以降だろ？」

熱のない声で応えてくれた。

遊郭街：

男の教えてくれた内容に、やはりという氣持ちが沸き上がる。

最から治療を与えられている時点で、この場所が遊郭と関係がある場所であることは明らかだ。

？？？といふことは、ここは遊郭街の何処かの軒の一室なのだな……

僅かなりとも現状を知れてホッとする中、同時に火事の記憶が断片的に蘇る。

そういうえば、焼けた渕楼庵はどうなったのだろう。男は再建と云つ

たが……同じ場所にもう一度建て直すということだろうか。

新たな疑問が幾つも浮かんでくるが、それが確りと形を作る前に、男がするつと続けた。

「俺は空木〔うつぎ〕といつ。ここでの立場は皇都遊郭街の回り番、第一班の副班長だ。お前とは臥龍城の地下牢に行くまでの間に顔を合わせているが……まあ、覚えてはいないだろうな。お望みなら年齢・身長・体重・給与・性的嗜好までなんでも教えてやるが、どうする？」

「…………？」

視線で射殺せそうなほど眼力でこちらを見下ろしながらそのような軽口を叩く男に、佐波は眉をひそめた。数秒遅れて、ハツとした。

「回り、番……つあ、のつサツキ、様は……！」

記憶が一気に逆流する。

そうだ、私はあの時サツキ様と……もう一人、名は思い出せないが、警吏の男と一緒にいたはず。

その後の痛みの記憶が激し過ぎて、前後にどのような会話をしたかなどは思い出せないが、彼らを自分の犯した愚かな行いに巻き込んでしまったことは……ほぼ間違いないだろう。

もしやあの後彼らまで咎めの対象にされたのではないか、と今更慌てる佐波に、空木は一瞬表情を消すと、滲み出る様な悲哀の籠った眼差しを伏せた。

「…サツキは、残念なことだった

「…えつ」

「お前を牢に運んだあと、あいつは”清州「きよす」”の手に捕

らえられ

「…つー」

「

熱で浮かされた頭に冷水を打ち掛けられたように、佐波の身体からサアッと血の気が引く。

一瞬で浮かび上がった記憶はあの時の 清州がサツキに 遊女に對して向けた、明らかな侮蔑。

もし、あの後すぐに、サツキが清州に捕らえられたとしたら、彼女はもう

過つた悲惨な光景に佐波は居ても立つてもいられず、激痛を堪えて、横たわった身体を起こさうと必死にもがき

「 そうになつたみたいだが、ルッカが撃退したそうだ。まあ、あの匪兵が側にいる状態であいつに手を出せる猛者は、少なくとも皇都にはそうそう居まい」

「つ、むべつ！？」

アツサリとその表情から悲哀を消し去り、澄ました顔でそう言つ男に、起こしかけた身体から力が抜けた佐波は無惨にも再び布団に沈んだ。もちろん激痛を伴つて。

「～～～つー！」

痛みと混乱で悶える佐波に、空木は明るく笑い声をたてた。

「中々良い反応をするじゃないか。それが”演技”だとしたら、喜

劇役者の才能があるぞ」

「……っ え、演技…？」

「…まあ、今日は挨拶みたいなもんだ。お前はまだ今の己の立場を理解出来ていないだろ？ 俺が先に”これから之事”を教えておいてやるうと思つてな。 それにしても…」

男はそう言つて、痛みで思考がぶつ切りになる佐波の顔を覗き込んだ。

「…やはり、並、だな。いや、せめて髪を整えれば、どうにかなんにもないか？ だがその短さじゃ結う事も出来んだろ？ しなあ…髪【かつら】か…」

「…つあ、あの…」

近い。顔がやたらと近い。

じいっと凝視されて、佐波には逃げ場も無く、痛みや熱の為ではない汗が背中を流れるのを感じた。

男はそんな佐波には一向に構わず、ただ物を物色するよつてじりじりうと視線を配り、やがて首を傾げて問つた。

「お前、経験は？」  
「けいけん…？」  
「男と交わったことはあるかと聞いている」  
「おと…」

ザアツと耳の奥で血の氣の引く音が聞こえた気がした。

瞠目して口をもの言いた気に動かす佐波を見ただけでその意味を理解した空木は、興味なさそつに「ふうん？」と呟き、

「その齢で生娘とは珍しいな。どこの生まれの使用人でも、大抵は屋敷の用心棒か下男… それか莫迦息子共の慰め者にされているもん

だがあ

色気が無さ過ぎたか？と真顔で聞かれた佐波が田眩を覚えるよりも一瞬早く、空木は「まあいい」と表情を切り替えた。

「初物ならそこそこ高く売れるだらう。お前の場合、むしろ男娼として売った方がよほど高く売れそうだが」

「…う、売る…？」

どうにも話の雲行きが怪しい。

否…むしろ、この会話から指示されるものは一つしかなくて、佐波はやっぱり田眩を覚えた。

そして、楽しそうに男が笑う。

「ああ、お前は怪我が治れば、遊郭に”突き出し”だ。」

\* 『突き出し』…禿かむろから成長して初めて一人前の遊女として披露される。また、その遊女。素人女がいきなり遊女になつたもの。…を云うそうです。渕楼作中では主に遊女デビューのことだと思つて下さると嬉しいな。

突き出しには2種類あり、『見世突き出し』と『道中(呼出し?)突き出し』で、それぞれに遊女の格(容姿など)で分けられます。多分佐波がなるなら見世突き出しの方かな…

続きます!

遊郭…突き出し…

確か、遊女が遊郭に初めて上garることをそう云つたはずだ。  
なんでも、大夫の候補ともなれば、それは華やかな道中突き出し\*  
を一星期（一週間）も行うのだとか。  
だがそれ以外の下級遊女は、見世突き出しといつて…要するに、軒  
先の張りの中で客を待つ列に並ぶことになる。

私が…遊女…？

つまり、身体を売るのだ。見知らぬ相手に。

…売れる、のか…？

と、思わず無意識に自分の姿を確認しそうになつて、そういうえば今  
は姿どころではなかつたと慌てて思考を切り替える が、どう  
にもペジンとこない。

痛みすら忘れてぐるぐると思考の渦に呑み込まれていた佐波に、今  
しがたその渦に佐波を引きずり込んだばかりの男は何故だか嬉しそ  
うに言葉を続ける。

「正直、お前の遭遇には俺たちも頭を悩ませていたんだ。尋問しよ

うにも、肉体的な苦痛に強いのはさすがにもう分かっていることだし、かといって弱みを握るには、それを探る時間すら惜しい現状だろ？ だが折角危ない橋を渡つて臥龍城からこちらに逃がしたのだから、俺たちとしてもお前を有効に使いたいわけだ。わかるか？

ん？」と頗る「すいぶ」る笑顔で問い合わせられても、佐波は硬直したままだらだらと冷や汗を流すだけだ。

その様子を満足気に見下ろし、空木は続ける。

「だから、お前は餌「え」として使う事にした。まあ、確かにお前は『死んだ事』になつていいし、顔を出させるのはこちらにも危険を伴うことではあるが……だからといって大事にしまつて置いたところで何の『利益』があるわけでもないしな。誤魔化す方法は幾らだてある。ならばいつそ囮「おどり」として使えば、或「あるいは」は結果が出せるかもしれん、と。つまりこう判断したわけだ」

言い切ると、未だに硬直から解けない佐波の表情を見て、本当に嬉しそうに笑つた。

「いいな、その顔。欲を言えば、もっと絶望してくれないか。お前のそんな顔を見る為に、わざわざ俺が出向いたんだぞ？ じゃなきゃこんな伝達役、もつと下つ端に任せたぞ」

つん、と湿布を貼られた頬を突かれて我に返る。

血の氣は引いたまだし、男の言動に逐一眩がするが、それよりなにより今は情報が必要だつた。

佐波はぐつと顎を引き、男を見上げた。

「わ……私は、死んだ……事に？」

「そうだ、お前は『死んだ』。清州に

軍部のお偉いさんに私

刑にされた後、臥龍城の地下牢で独り寂しく死んだんだ。可哀想にな」

”可哀想”だなど一片も想つていらないだらう男の声色よりも、自分が『死んだ事』になつてゐる現状によつて起こつたことの方が余程気がかりで、佐波は必死に頭の中を整理した。

『死んだ』 清州 私刑 地下牢 :

すぐ、と左肩が鈍く痛み、視界が狭まる。

暴力によつて植え付けられた恐怖が全身を嘗めるようにして這い回り、心臓が力の限り絞られるように痛んだ。

耐え切れずにぎゅっと目を瞑ると、否応無く一瞬で記憶が後方に飛び

ぶ。

ああ……ああ、……思い出した。……そうだ、私は、遊郭「こ」に以織を捜しに……そして……

夜に羽撃く炎の蝶のように燃え上がる渾樓庵。

そこで少年を見つけ、怪我をして運ばれた先で以織の死を聞かされ

……そして そして自分の犯したあの愚行。

……その結果が、総て今に繋がつてゐる。

まさしく自業自得だ。むしろ、自分はあるの時……清州に逆らつたその時に命を落としていても仕方がなかつた。

それを彼らが助け、今ここに隠してくれてゐるのだ。謂つなれば彼らは命の恩人で……

……だが、やつぱり分からぬことがある。

佐波は再び空木を見上げた。

「囮」「おとつ」、とは

佐波の言葉に、彼は小さく小首を傾げ、  
「うん？ そこまで説明が必要か？ …まあ、お前のそれが素な  
かどうかは置いておくとして、だ。聞きたいというなら、答えよう  
か。

まず、これはお前が総主の御子を誘拐しようと画策した連  
中の仲間である、というのが前提だ。奴らから見れば、如何にお前  
が端役であるうと、遊郭に残した最大の痕跡には違いない。表向き  
お前は死んだ事になつていてるから、今頃奴らはわざわざ危険を冒し  
てお前を処分しなくて済んだと胸を撫で下ろしているだろう。生き  
て捕らえられていれば、どのような情報が流れるか分かつたもので  
はないからな。…だが、そのお前がもし生きて遊郭に売られていた  
ら、奴らはどうすると思う？ すぐにでも接触を持とうとするか…  
あるいは殺そうとするか…」

語る男が何故だかとても嬉しそうなのが気になるが、それよりも佐  
波は自分にかけられていた嫌疑を瞬時に思い出し、色を失くした。

「私は、誘拐など、企てていません…！」

「言つただろ。お前に回り番”お得意の尋問”は時間の無駄だ。自  
白は期待していない。それに、もしお前が本当に無実だとしても、  
お前一人遊郭に売り渡したところで痛む良心も持ち合わせていない  
んでね。その後性病で死のうが、無理心中に巻き込まれようが…俺  
は一向に構わない。つまり、この作戦の良いところは、俺たちには  
何の不利益もないところだ」

そらりと非道な事を口にした空木は、佐波の表情を伺つよつとして田を細めている。

佐波は勢いで言つ募ろひとし ぐつと堪えると、口を閉じ、心を落ち着かせるよつて震える息を吐いてから、もう一度改めて口を開いた。

「……私は、誘拐犯の仲間では、ありません。それに、私が知る限り仕えていた豪商家も、そのような大それたことは……あの田は禦々、商談の最終日で……それで遊郭へ。一体、私にも何が起きているのか、未だに分からないです。だから、どの道、誘拐を企てた者達が私を捜しに来る事は」

「奴らは来るや」

男の田が暗く輝く。

「絶対に、また現れる。田的をまだ達成していないんだ。喻えお前が本当に田だらうと、お前の仕える家が無関係であつたとしても、遊郭には何度もだつて沸いて出る。胸糞悪い虫みたいな連中だ」

「田、的……」

「……その間抜けな顔も演技だとしたら、顔面を殴つてやりたいところだ」

とても女子供に対する言詞じゃない言葉を呴き、男は酷薄に嗤つ。

「総主の御子が誘拐されかけたのは、これが初めてじゃない。今回が一番派手だつたが、少なくとも、片手じや足りないくらい未遂は起つてこる」

片手じや足りない……？

それは、…そんなにも、総主の御子が狙われているところのことなの  
か。

確かに、皇国府にも覚え田出度を遊郭総主の子息ともなれば、金欲  
しさにそのような凶行をする者も出て来るかもしれない。だが、元  
来強固であると聞く遊郭街の警護を相手取るには、相当な力と知恵  
と金が必要だ。

少なくとも、ただの破落戸「じゅつを」や山賊崩れには到底不可能  
…

それを思いついた瞬間、ふと、佐波は眉をひそめた。

それとも、田的是“金”ではないのか…？

「俺たちもそろそろ、我慢の限界でね。害虫は巣から根っこを始末  
しなきや駄田だと、そう判断した」

男の言葉に思考が現実へと引き戻され、視界の焦点を合わせた佐波  
はギョッとした。

目前に男の顔。今にも触れそうな距離で、男は楽しそうに囁つた。

「だからお前は、奴らを巣穴から呼び寄せる餌だ。美味しそうに着  
飾つて、その身を晒せ。働き次第では、恩情もかけてやれるかもし  
れん」

つまり、私は選択権どころか、生殺与奪の権まで彼らに握ら  
れているといふことか…

すう、と波が引くように表情の消えた佐波を見下ろして、空木は至  
極満足そうに頷く。

「そう、その顔が見たかった。泣き喚かれるのは好きじゃないが、

静かに死んでいく心を見るのは楽しい。特にお前には、俺は少しばかり怒っているのでね」「

空木の堅い手が佐波の頬を撫でる。

「心外そうな顔だな？ だがお前が俺を今現在進行形で苛立たせているのは本当だ。理由に思い当たる節はないか？ 例えば、俺の同僚の粘着質で面倒な女のことで」

優しい手の動きとは相反する男の言葉に、佐波は己が獣に押さえつけられた卑小な動物であるような錯覚を覚えた。

だが今は恐怖を心の隅に追いやり、空木との会話に集中する。

”粘着質”だとか”面倒”というのは分からぬが、同僚の女、という言葉から佐波が連想出来たのは、たった一人だ。

「…同僚…とは、サツキ様のこと」

「うん？ 他にあるのか？」

甘く耳元で囁かれて、佐波は男の目の中に闇を見た。男の手の平がそっと佐波の視界を塞ぎ、耳に息を吹き込む程の近さで、優しく語る。

「あいつはアレでも珍しく見所のある女でね。代わりを見つけるのは難儀だ。…お前に奪われるのは、面白くない

「うば、われる…？」

「無自覚か？ 尚のこと性質「たち」が悪いな。俺の見立てでは、お前が臥龍城の中庭で”奪つた”のは彼奴「あいつ」一人ではないよつだが……一つ、忠告しておいてやろう」

途中独り言のように呟き、そして再び優し気に囁いた。

「喰え無自覚だとしてもお前のその厄介な体質は、周りを巻き込み、やがてお前自身をも殺すだろう。俺はそつやつて死んだ男を、一人知つてゐる。男は、ある國の王だつた」

遠い國の御伽噺「おとぎばなし」を語る様に、空木は続ける。

「男は民を従え、とある國に真つ向から立ち向かい…そして國諸共滅びた。ほんの、数十年前の話だ」

？？？『ほんの、数十年前の話です』 ？？？

既視感。一瞬目の前に遠い日の記憶が過つて、佐波は瞬いた。

知つてゐる。その話を。

あれは確か、まだ佐波が貴族の子女であつた頃。

東から訪れた異國の吟遊詩人が唄う、悲しい物語に耳を澄ませていた佐波に、以織が囁いたのだ。

『「皇國」「このくに」「元」の者は知らないのです。…いえ、知らされないのでしよう。小さな國の存亡など、気にかける程のことではない。我が國こそ唯一の中央國家なりと、誰しもが教わつて育つのですか』

『ひ

佐波より3つだけ年上の少年は、けれどその年齢より遙かに博識だ

つた。

貴族子女としての最低限の教育しか施されなかつた佐波は、空いた時間を以織と過ごし、多くを学んだ。

その事に対して、今の今まで何も疑問に思わなかつたのだが?????

????でも、じゃあ以織は、どうやってそれらを学んだのだらう…?

空木が軽くため息をついて、佐波の逸れかけた思考が再び引き戻される。

途端に押さえ込んでいた身体の怠さや鈍痛が鮮烈にこみ上げて、吐き気がした。

どうやらそろそろ限界らしい。思考も記憶も時間軸を彷徨い、余計なことばかりに気が削がれる。

自分でも自分の身体の状態がまだ把握出来ていないことに強い不安を覚えながら、佐波は気力を振り絞り、男を見上げた。

視線が交わった瞬間、空木は目を細め、ふと肩から力を抜くと「…厄介なことに」と呆れたよつて言葉を続ける。

「お前らのような人種は絶望の中でこそ強く輝く。暗澹【あんたん】たる海原を渡る舟の松明が、火の粉を振りまきながら燃え上がるようにな。それはお前らにとつても、光に焦がれて火に飛び込む奴らにも不幸なことだ」

まるで一つの時代の終焉を見て来たかのような確固たる口振りで男は言い、そして冷たくも真摯な視線で佐波を見ると、瞼み縫めるようになり、やつくりと言葉を紡いだ。

「死にたくないなれば　　”死なせたくないなれば”、お前は、己を  
よく自覚し、自制するべきだ」

\*『道中突き出し』：花魁道中。姉女郎に付き添われて馴染みの店に挨拶に回ったり、馴染みの客に挨拶をして回る遊廓アビューニュ。

空木が一人でアビューニュを発揮していますが、佐波はサツキとは違うので若干やり難そう。

「まあ、空木」「ひつき」様…」ひづくは明日来られるとのお話でしたのに…」

唐突に、部屋の中に女の声が響いた。

佐波のみならず、空木も一瞬その身に緊張を纏わせたのを感じて、女の気配に気付かなかつたのは自分だけではなかつたのだ佐波は少し安堵した。

空木が振り返る。

途端に開いた視界の隙間から、見覚えのある女性が、部屋の扉を開けて入つて来ているのが見えた。

？？？早音「はやね」、様…

確かに、最初の火事の後、怪我をして運ばれた館で世話になつた女性だ。

柔らかく穏やかな曲線を描く、女性的な身体。

目映い華はなくとも、凛と咲く花のような美しい貌に、艶やかに長い黒髪を後ろで花の簪で留めている。

彼女は手に器と小さな火種の載つた盆を持ち、空木にちらりと視線をやり、次いで事の成り行きに強ばつた表情のままの佐波に目をやると、ハツとした様子で目を見開く。

「まあ佐波様、お目覚めなんですか！？まあまあ空木様、何をしていらっしゃったのです！直ぐに知らせて下さらなければ困ります！」

「仕事のついでに様子を見に来たら、偶々起きていたんだ…その

「お前が呑き起しあんだんだ」「つて田で見るのは止めてくれないか」

口調に明らかな不満を漂わせて責める早苗に、空木が彼にしては珍しく、至極苦々しく呟いた。

先ほど佐波をいたぶつていた彼とは随分異なる態度に、佐波は思わず空木を見上げる。

その視線から逃れるように、空木が緩慢に動いた。

「俺は今から仕事なんで失礼するよ」

「あら、本日はどちらへ？」

「いじだ。だからついでだと云つただろ？ 今日は”お得意様”が来るんでね」

彼は着物の襟を軽く手で直し、来た時と同様にそれとない動作で立ち上がると、ぼやく呟いた。

「渕楼庵が焼失して以来、あちらの常連が名軒に分散したものだから、回り番の仕事が増えて困つてゐるんだ。渕楼庵の常連は問題ありの高官や”御忍”ばかりだからな」

「おしのび…？」

思わず内心の疑問が口をついて出た佐波に、空木がちらりと視線を向け、皮肉気に小さく笑う。

「高貴な方々の秘密のお遊びさ。渕楼庵が皇府公認の遊郭であるワケが、其れだ」

粹に遊んで帰つてくれる上客ならいいんだがな…、と小さく言つて早音の横を通り、通常の半分程の小さな扉を開けると、最後に佐波

に振り返った。

「じっくり養生することだ。少なくとも、今は、な

言外に”治つたら覚えておけよ”とでも言わんばかりの言葉を残して、男はあつという間に去つた。

引き際が大変に潔いのは分かつたが？？？それにしても…

あの不遜そうな男が、早音の登場時に発した緊張になんとなく違和感を覚えながら、佐波はどうにか身体を起こしてと身を捩つた。

「あ、っつ

身体の其処彼処に走る激痛につい声を上げると、男が去つた扉を見つめていた早音が慌てた様子で佐波の側？？数歩の距離だが？？に駆け寄る。

「佐波様、動いてはなりませんわ。まだ傷が塞がっていないので。今痛み止めをお持ちしたところだったのですよ」

言つなり、持つて来たお盆を引き寄せ、器を両手で大事そうに持つた。

？？？ああ、どうりで…

意識は割とハツキリしてきているが、それと同等に体中が鈍く痛い。

佐波が使用人の頃に使つていた痛み止めとは比にならない程良く利

く薬なのだらう。

眠気に包まれるようにして、痛みも感じずに休む事が出来るなんて。一体自分の治療にどれほどの金銭が掛けられているのか、と考えて痛みとは別の意味で顔を顰めた佐波に、早音が急須の薬を飲むよう促す。

「さあ、佐波様。もう少し休み下さー。??ああ、でも…その前に佐波様に、私「わたくし」の謝罪を受けて頂きたいのです」

彼女の言葉に、佐波はこの世のものとは思えない舌が壊死しそうな苦さの薬を苦心して飲み込み、体温の上昇で熱くなつた息を吐きながら小さく首を傾げる。

早音はそんな佐波の汗で張り付いた額の髪をそつと払つてやりながら、悲し氣に微笑んだ。

長い睫毛が伏せられる。

「あの日…？清州様が、臥龍城に訪れた日のことです。最様はお留守でしたが、私は用あつて臥龍城に残つていたのです。でも…」

「瀕死の佐波様を、お助けすることが出来なかつた。清州様が去つた後も、…覚えていらっしゃらないかもしませんが、私がこうやつて佐波様にお会いするのは、あの日から今日で二度目なのですよ」

??やつ、なのか…

そういえば、清州が現れる直前に早音の声を聞いた気がする。より鮮明に蘇り始めた記憶を遮るように、早音はそつと頭を下げた。

ぎょつとして慌てて彼女の動きを止めようとしたが、激痛に阻まれ

る。

そつこいつている間に、彼女はまるで佐波を主人とする使用人のよう、平伏して言った。

「本当に…申し訳ないことです。貴女様をお守りするようにと、御総主様から託かっていた身にも関わらず、私は何も出来なかつた…。どうぞ佐波様の采配で、私を罰して下さこませ」

「は、は、早音様つ！？ 何を？？？」

「私は」

早音が視線を上げる。灯り油がじじ…と燃え、彼女の秀麗な顔を映した。

どきり、とした佐波の心を見透かすように、瞳の奥を覗き込むようにして早音は言つ。

「私は、その為に今在「あ」るのです」

？？？それは、一体…

どうじう意味だ、と考えたところで、視界が思考」と歪んだ。

ああまたこの展開か、と咄嗟に思うものの、いつ何処でだつたか思い出すことも出来ない。

ただ強力な睡魔に身体半分引きずられるようにして意識」と持つていかれそうになるのを、寸でのところで耐えている佐波に、そつと、早音の囁きが落ちた。

「お気をつけなさいませ。回り番は味方ではありません。私どもとは相容れぬ存在。？？？貴女様を、あの者達の好きにはさせませんわ」

？？？私、ども…とは…

意識が遠のく。闇が口を広げ、佐波を呑み込む寸前。建物の何処から、場違いに明るい笑い声が聞こえた気がした。

\*

『以織は、なんでも知ってるね』

夢の中で、佐波はかつての記憶を辿っていた。まだ佐波の世界が手の平程の大きさしかなく、陽に翳す硝子玉のようにキラキラと輝いていた日々。

何も知らないことの幸せをそれと知らずに享受していたあの頃を、そつと指で辿るように、佐波はその光景を見ていた。

佐波の言葉に、以織は開いていた書物を閉じて振り向いく。照れた様にはにかむ表情。白磁の頬をほんのり染めて、彼は少し俯いた。

『……そんなことはありません。私は、聞き齧つただけの浅い知識しか持つていません。姫様の方が、余程深く物事の真理を知ろうとするお力があります』

『それこそ考え方過ぎだと思うな。私の師は、以織なんだから』

二人がいる部屋は、使用人すら存在を忘れている小さな物置だ。不義の子とはいえ、さすがに使用人が貴族家子女の部屋に立ち入る事は許されない。

だから二人は協力して家や庭のあちこちを探り、より人気のない場所を探し出していた。

物置は以織の手によつて、狭いながらも快適に整えられている。高い天窓からは明るい日差しが落ち、床に広げた古い敷物の上に、二人は楽な姿勢で腰掛けて様々な話をした。

中でも以織が語ってくれる皇国の歴史や、遠い地にあるという異国の物語を聞くのが、佐波は大好きだった。

佐波の言葉に、以織は驚いたように目を瞬かせ、次いで微笑む。

『姫様には、私よりも博識の師をつけて差し上げたい。貴女様なら、きっとより高みを目指す事が出来る』

『高み?』

『……世の中には、知識だけの人間は星の数ほどいるのです。ですがそれは表面だけのこと。知識と知恵は別物なのです、姫様』

以織は、穏やかに微笑んだまま、両手を広げて佐波を見た。

その意図に気付いて、佐波はぱつと表情を輝かせると、躊躇つ事なくその胸に飛び込んだ。

以織は佐波の背中を包むように柔らかく抱きしめて、その耳に囁く。『姫様は賢い。ただ賢いだけではなく、己の意志を貫く強さがある。それは、とても素晴らしいことなのです。私は、貴女様のお手伝いが出来る事が何より嬉しい。…私にも何かを成し得る力があるのだと、教えて下さったのは姫様です』

服越しに互いの熱が伝わる。

幼い頃から両親はもちろん、兄弟姉妹、使用人に至るまで全員に”無いもの”として扱われてきた佐波は、以織に会うまで誰かに抱きしめられたこともなかった。

凍つた氷が春に水に戻るよう、ゆっくりと時間をかけて育んだ信頼が二人の間にある。

そのことが佐波の孤独な生活の唯一の救いだった。

？？？恐らくそれは、以織にとつても。

『…以織は、優しいね』

佐波はぽつりと呟く。

その声は何かに憧れているようでもあり？？？何かを諦めているようでもあった。

『私は以織に…何なら想いを返せるかな…？』

『…もう十分、頂いていますよ』

ぎゅっと背中に腕を回して、以織は佐波の髪に頬を寄せた。

『もう十分、…十分です。？？？これ以上は、溢「あふ」れてしま

最初にこいつやって抱きしめ合つたのは、いつだつただろう。いつの間にか、お互いの身分などどうでもいいくらいに、互いを必要としていた。

以織の心音を耳に聴きながら、佐波は目を閉じる。

？？？どうしてか、とても寂しかった。

こんなに側にいても、まるで独りきりでいるよつで。

多分、それが。

？？？時機「じき」に訪れる、別れの予感。

\*

？？？カタ、と物音がした。

夢と現の境を彷徨っていた意識が、急速に浮かび上がる。

名残惜しい気持ちを残しながら薄らと目を開けた佐波は、目前に広がる闇と天窓から零れる一條の光に瞬いた。

？？？夢…

指の隙間から零れていく砂を握もうとするも、直ぐに手の平の砂ごと風に流されて消えてしまう。

掴み損ねた夢の切れ端についていつまでも考えていたい気持ちに駆られながら、佐波は目を覚ませた元凶の存在を思い出して小さく眉をひそめる。

？？？今、何か音が…

カタカタ、と更に音が鳴った。？？？天井からだ。

ぎょっとして身を固め、無意識に身体を動かそうとしてまたもや激痛に阻まれる。

いい加減學習した方が良い…と自分で自分にガツカリしつつ、内心焦りで一杯だ。

？？？鼠…じゃない。この気配は…もしかしたら…多分…いや  
…………恐らく…人間。

その考えを肯定するように、ぎし、ぎし、と天井板を踏みしめる音までしてくる。

こうなれば間違いない。音からして成人の？？？恐らく男のものだ。

？？？いいい今、丸腰…つ

どこのか全身創痍で動く事すら出来ない佐波は、薬のお陰の眠気など吹つ飛んだ頭で必死に”可能性”を探つた。

？？？ここはどこかの遊郭の軒だと、あの男性…空木が言つていた。  
ならば、密とか…？

いやいや、建物の構造は分からぬが、多分この部屋は踏めば音が鳴る様な、そんな薄い板一枚では出来てはまい。まるで拷問部屋のように四方は堅い木材に囲まれているのだ。音だつて、遊郭の中のどこかという割にはそこまで響いてこない。だからこの音は間違いない、”この部屋”の天井を踏んでいるわけで…

？？？ついえば…空木が私を『囮』に使うと…

辿り着いた発想にさあつと青くなるが、少し考えて、その可能性はなかつたのだと気付いた。

自分が誘拐 このけん に関係ないことは、自分が一番知つてゐる。本当に何も知らない佐波を追つて処分しようとする程、犯人等も暇ではないだろう。

？？？だけど…

自分が何かしらの大きな事件に巻き込まれてゐることには違ひない。それに、よく考えれば誰かに恨まれてゐる覚えが…大変…ある。そういえばここに来ることになつた理由が、皇府の高官？？？清州に正面から噛み付いた結果だつたな、と今更になつて思い出し、佐波は出来る事なら頭を抱えたくなつた。  
あの高官がどのような人間かは、この怪我が物語つてゐる。もしかしたら、佐波一人確實に殺す為に刺客を差し出したり…いや、でも空木は私が死んだ事になつてゐると…

悶々と考えている間にも足音は、恐らくそろりそろりと？？下ではぎ、ぎ、と聞こえて来るが？？動き回り、やがて何かを見つけたのか、ピタリとその音が止まる？？？

ガタツ ガタガタツ

「？？つ！」

戸板が外れる音。

暗闇の端で一瞬、闇とは別の何かが動き、

？？？それは穴から這い出るよつに部屋の中に入り込み？？？

思い切り、佐波の足の上に着地した。

「いいつ！！」

「わつ 莫迦者！」

痛い！と上げそうになつた声に、何かが？？恐らく男の手の平が？？？凄い勢いで口を塞いでくる。

その間も体中に悪寒のように走り回る激痛から悶える佐波に、降り落ちて来た”誰か”は慌てたように布団越しに佐波を跨ぎ、何かを懐から取り出した。

痛みにガンガン後頭部を殴られながらも視界の端にそれを捕らえた佐波は、一瞬刃物かと身を震わせ…

カカンツ

聞き慣れた音と、嗅ぎ慣れた火薬の匂い。

そしてシユワツと何かが燃え上がる光が本当に目前に見えて、反射

的に目を閉じた。

「…ひ！」

「…お前？？？」

知らない男の声が落ちてくる。

その声の意外な若さに、佐波は恐る恐る目を開け、そして燃え上がる簡易発火器の灯りに薄く照らされた男の顔を見た。

この薄暗さの中でも分かる、端正な顔立。黒い髪は後ろで高く、一つに結われている。

男？？？否、恐らく少年から青年への変わりかけであるう若さのは『彼』は、整った顔で強く佐波を睨みつけながら、用心深く言い放つた。

「お前、ここで何をしている」

未だに残る身体の痛みに歯を食いしばりながら、佐波は「それは私の台詞では」と至極まともなことを思った。

本当に降つてわいた新キャラ。

「答える、何をしている」

注意深く問いかけて、彼 恐らく佐波とそう歳の変わらない少年は佐波に乗り上がったまま、四方に簡易発火器を向け、辺りをざつと見回した。

灯りが揺れて、狭い四畳の部屋を照らす。

少年の視線に隙はなく、緊張に包まれている……のだが、足下を確認して飛び降りなかつたところをみると、案外と抜けているのかもしない。

それは「答える」と問いかげながら、未だに佐波の口を抑える手を退けないとこころからも垣間見える。

佐波が痛みやら何やらと戦つても「も」していると、よつやく少年は気付いたのか、ぱつとその手を佐波の口から外し、きまつ悪気に、だがその鋭い眼光を緩めずに言った。

「……おい、ここで何をしていると聞いている  
「……と、とりあえずど、退いて、く、ぐえ…ええ！」

下さい、と懇願しようとしたと同時に男の空いた手が痛めている左肩を押した。

悲鳴も途切れる激痛に全身を強ばらせた佐波に、少年は火に触つたような機敏さで佐波の肩から手を退かす。

そして尚も歯を食いしばり呻く佐波に、少年はよつやく自分が乗り

上げているのが病床の人間だと気付き、慌てて距離を取った。

「お、お前…な、なんだ？ その、怪我は？」

吃りながら、少年は恐る恐る簡易発火器の炎を佐波に向けた。

少年の目には恐らく、頬に大きな湿布を貼り、額を隠すように包帯を巻かれた佐波が脂汗を流しながら苦しんでいる姿が映っていることだろう。

事実佐波はこの上なく苦しんでいた。

痛い痛いとは思っていたが、実際触れられると想像以上の激痛だ。側の全く見知らぬ少年 しかも天井から降つて来た拳げ句に痛みの原因ともなった不審者を気に掛ける余裕もなく、うんうんと唸り痛みを紛らわせようとする佐波に、彼は恐る恐る近づくと、じつとその顔を覗き込んだ。

「…お前、その怪我はどうした。随分、手酷くやられてるな…。  
…い、痛む、のか？」

酷くぎこちなく言って、少年は佐波の湿布を貼った頬に手を伸ばした。

が、佐波がビクッと震えると、慌ててその手を引つ込める。そしてわたわたしながら懐から小さな皿を取り出すと簡易発火器を一旦閉じ、中の油を少々皿に注いで、再び懐に手を入れて懐紙を取り出すと、今度はそれで紙縫「こよ」りを作った。

紙縫りを油に浸して、もう一度簡易発火器を付け、そこから火種を貰うと、慣れた様子で部屋の隅に置く。一連の流れを手際良くこなした少年がやつと佐波に向き合い直す頃には、佐波の痛みもいくらか緩和されてきていた。

ほの明るくなつた部屋で、何度も瞬きながら痛みと明るさに慣れて

来た佐波は、ようやくじりじりを見下ろしてくる少年の姿をまともに見て、瞠目した。

ほの灯りに照らし出された少年は、高級な布地の、上品な衣装に身を包んでいた。

天井裏を這つて来た時に幾分か汚れはしているのだろうが、それでも一目で分かる一級品だ。

加えてその容姿は、どこかあどけなさを残す柔らかい美貌。長い睫毛に縁取られた瞳と、型の良い眉。秀麗な鼻筋に、堅く結ばれた薄紅の唇。

姿だけ見ればまるで御伽噺の皇子のようなこの少年が、何故に遊郭（多分）の天井から、しかも佐波のいる部屋に降り落ちて来たのか、その関連性が全く想像出来ない。

唯一分かることは、恐らく少年が、何処かの貴族の子息が何かであることのみで

「……お前」

一瞬痛みも忘れて少年を凝視していた佐波に、その視線を感じ取った少年が、どこか怯えたよつて言葉を発した。

「お前……なんでここにいる？　ここは、空き部屋じゃあ……ない、んだな」

最後は自分を納得させるように咳き、頷く。

確かにどう見ても佐波が先に寝ていたのだから、空き部屋ではない。だが、その言い様に佐波は内心首を傾げつつ、息を整えて声を上げた。

「…あなたは」

「……俺のことは、どうでもいい。質問に答えろ」

少年が怯えを拭い去つた表情で、佐波を睨みつける。

一目見て病床と分かるであらう自分の何に警戒しているのか分からず、佐波はかなり困惑しながらも口を開き、

「……私は……」と……ええつ……と……よ、養生、して、ます」

随分拙つたな い説明をした。

考えてみれば、自分のこの状況を一口に説明出来る言葉など見当たらない。

養生といつよりは、事実上の軟禁だらうとは分かっているのだが、それを口にすれば少年が”何故 なにゆえ”を問つてくるだらうことは容易に想像出来る。

彼が何者かも分からぬ状況で、己の不安定過ぎる立ち位置を一から説明する氣概も氣力も佐波には無かつた。

そんな佐波のあまりにも『見たまま』の説明に、少年は愁眉をしかめたが……やがてふと、気付いたよつて声を上げた。

「お前…………ああ、そつか…………その怪我、”仕置き”を受けたのか」

「…………しあ」

「ああ、そうだな、」と遊郭で……だから……」

少年は一人で頷き、険しかつた表情を緩やかに変化させ……戸惑つ佐波に、憐れみの視線を向けた。

「遊郭 ここ では捷を破つた者に暴行を加えると聞く。お前も、

そうなのだらう?」「

「え? ？」

「可哀想にな。…どこの世も、傭ならぬものだ」

勝手に結論を出したらしい少年は、ここに来て初めて薄らと笑みを浮かべ言つた。

その笑みは控えめで、どこか自嘲めいてゐる。皮肉氣、…といえば分かり易いか。

歳の頃は自分とそう変わらないであろう少年のその影のある笑みに、誤解を解く機会が失われつつある」とにも氣付かず思わず見入つていた佐波は、次に少年が発した言葉によらずやく我に返つた。

「夜明けまでには」こを発つ。それまで、場所を借りるぞ

「はあ…………え、つええ……つ」

「大きな声を上げるな」

掠れた悲鳴を上げた佐波をじろりと睨み、少年は小声で続けた。

「別に、お前に話しあうとも、その布団を寄せせとも言わん。お前はそのまま休んでいい。俺は俺で、勝手に休む」

言いつつ片膝を立て、自分を守るように身を丸めた少年に、佐波は思いつきつ困惑した。

「休めと言われても…

この状態では眠る事は疎か、目を閉じるとさえ憚はばかられ。

大体こんな夜更けに天井から身も知らぬ貴人が降つて來たというのに、どうして平然としていられようか。

せめて少年の身元と、ここに しかも天井から 突如降つてこなければならなかつた事情ぐらゐは知つておきたいと思つことは、決して間違いではないはずだ。

それに…

佐波は意識して耳を澄ませたが、やはり遠くから地鳴りのよつて響く宴の音しか聴こえてこない。

てつくりこの部屋の側に監視役がいて、中の様子を聞耳立てて伺つているとばかり思つていたのだが…あれだけ物音をたてたというのに、誰かが部屋の異変に気付いて入つて来る様子はない。

ということは、見張りはないのだろうか…？

いや、それもおかしな話だ。いくら私が満足に動けぬ身とはいえ、”囮 おとり”から田を離すとは考え難い。では、この事態に誰も気付いていないのか…？

それもおかしな話だ、と思いつつも、今そのようなことを考えていたところで埒が明かないのも事実。

言い得ない不安を覚えながら、兎に角まずは田先の脅威だと意識を無理矢理現状に戻し、佐波は田前の少年を見据えた。

刺客…とかではなさそう、だけど…

少年が落ち着きなく壁のあちこちに視線を這わせているのをいいこと、じつと田を凝らし、観察する。

この怯えた様子…むしろ…

「……誰かに、追われている、のですか……？」

もの凄く悩みながらも、沸き上がる疑問と少しの好奇心に勝てず、佐波はおずおずと小声で問つた。

「…………」

返つて来たのは沈黙。

ぴたりと忙しなく室内を見渡していた視線を止め、彼はゆるりと、恐ろしいものを見る様な目で佐波を見返してきた。

何か言いた氣に震えたその唇に気付いて、静かに言葉を続ける。

「あの、でしたら……遊郭の治安を守る”回り番”といつ組織がここに」

「あいつらなど役に立つものか」

小ちく、しかしあつあつとした口調で少年が呟いた。頬に、あの笑みが浮かぶ。

「俺ですり、奴らをだらりと出来んのだ。ましてや、遊郭の番犬など」

ぐ、と苦虫を歯で押しつぶしたような強こを零し……重たい息をつく。

「……本当に、息が詰まる」

それは少年が心から現状に苦惱していることを伺わせる、酷く疲れた声だった。

これ以上深入りしてはいけない。

直感はせつ告げているのに、どうしてだか佐波は、この少年の苦悩にほんの少しだけ触れてみたくなった。

戯れに触れていいものではないことは分かっている。だが、この状況下では、逆に触れないでいることの方が難しい。

躊躇いながらも、佐波は声を押し殺して痛む身体をほんの少し少年の方に向かせ、尋ねた。

「……なぜ、追われているのですか？」

「……質問されるのは嫌いだ」

が、素氣無く「ふい」と少年にそっぽを向かれ、「おや?」と首を傾げる。

質問されるのは嫌い、という割には、その態度はもつと聞いてくれと言わんばかり…つまり幼い子供が拗ねるような仕草だった。

さて、どうしたものか…と思案して黙り込んだ佐波に、しばらくは無言を決め込んでいた少年も、徐々にちらちらと佐波の様子を伺うような視線を向け、やがて、そっぽを向いたまま、ぽつりと呟いた。

「…痛むのか

「…え?」

「俺がわつも…」

押されたところだ、と小声で囁く少年に、佐波はぽかんとした。そんな佐波に、少年は目を合わせないよつに床や壁に視線を向けながら、不満そつた言ひ方。

「俺だって、お前が…怪我をしていると、知らなかつたんだ。知つていれば…」

「 知つていれば…？」

「ふ、踏んだり、押したり……しなかつた」

何処か恨めし氣に、しかし罪悪感の滲んだ声でそう呟かれて、佐波はようやく少年のこの言動の理由に辿り着いた。

内心「ああ…」と納得しつつも、目の前で不貞腐れた様子の少年の姿に、少しだけ意地悪な気持ちがもたげる。

思わず微笑みそうになる頬をぐつと堪えて、佐波は真顔を保つた。

「…大変、痛かったです」

「…そ…そ…う…か」

「泣き叫びそうになりました」

「…そ…う…か」

「死ぬ程痛かったです」

「…」

少年の表情が歪む。癪癩を起こす一歩手前の子供のような表情だ。身の中に沸き上がる感情を言葉にすることが出来ず、惑い苛立つその様子に、佐波は「」の大人げない意地悪を少しだけ反省した。そして、表情を和らげて言つ。

「でも、もうそんなに痛くないですよ」

「…」

「まあ…さすがに吃驚はしましたが…」

「…」

「…あの…」

「…つた…」

「え？」

「悪かったと、言つていいるー」

何故だか涙目で睨まれながら謝罪されて、佐波は一瞬思考が停止した。

正直、まさかこの貴族然とした少年から謝罪の言葉が飛び出すとは思つていなかつたのだ。

落ちぶれはしたが、上級貴族の子女として生を受けた佐波だから、雲を突き抜ける程に高い貴族の気位は良く識しつっているつもりでいた。

彼らは家臣は元より、一族の者にすら頭を下げる事は無い。それ以下など、目にも入らない…入れる価値のない存在。そんな者達に自ら声をかけたり…ましてや謝罪の言葉を口にするなど、一体どれほどの屈辱か。

心根が直すぐなのか…

貴族だけど 貴族だからこそ、世の習いに疎いのだろう。もしかしたら、相当の箱入り息子なのかもしれない。

そしてそれだけではなく、彼本人の性質が生まれもつて素直なのだ。そうでなければ、この年齢としでまで貴族社会に在つて、斯様かよう今までに無防備でいられるはずもない。

とはい、家督を継ぎ、大人になれば 貵族社会に溶け込んでしまえば、きっと彼も今日の日のことを激しく後悔する時がくるだろ。

その時に、この記憶が故に人格が歪むようなことにならなければ良いのだが…

佐波がぼんやりと感慨に耽つてゐる間に、肩を震わせていた少年はやがて落ち着きを取り戻すと、じわりと顔を上げた。

彼は薄明かりの中でも分かる程に赤くなつた顔を隠すように、俯いたり横を向いたりを繰り返しながら、やがて意を決したように佐波を見た。

そして、

「……追われている、わけではない。……逃げて来ただけだ

ぱつり、ぱつりと、不服そうに咳く。

「ここへは、家臣の付き合いで……よく連れてこられるのだ。……要是のいい口実だ。遊びたいのは家臣 あいつら だけで、俺はその隠れ蓑だ。……情けないだろう。主は俺なのに、俺にはあいつらを御すことが出来ない」

貴族の子息かと思っていたが……もう家督を継いでいるのか……

苦惱が浮かぶその口調に、佐波は少年に対する見解を改めた。

この若さで家督を継いだのであれば、それは苦労しているだろう。大貴族ともなれば、家長一人で家の全てを把握し、采配を下すことはほぼ不可能だ。

場合によっては古くから仕える家臣の方が熟知している事柄も多い。家の格が上がれば上がる程、家長であろうとも、家臣に無断で資産を動かしたり名義を動かす事は難しいものだ。

主とはいえたまだ幼さの残るこの少年が、恐らく永きに渡り家を仕切つて来た家臣達をすぐに従わせるには無理があるのであるのだろう。

なるほど。それで……

つまり少年は、遊郭で遊びたい家臣に巻き込まれてここに通つていが、色んな柵 しがらみ に辟易してここに逃げてきた、という

ことか。

さすがに……なぜ『この部屋』田掛けて来たのかまでは、想像がつかないのだが……。

佐波がどんな相づちを打つべきか　相づちを必要とされているのかも分からず悩んでいる間にも、少年は苦々しく言葉を続ける。

「……家臣　あいつら　は、そもそも俺のことなど、主とは認めておらぬのだろう。……確かに俺は、元々代を継げるような生まれではない。何事もなければ、俺が家督を継ぐなど、あり得るはずもなかつた。だから家臣　あいつら　は、いつまでも先代を偲んで、俺を見よつともしない。俺が……主上には相応しくない器だから……」

言葉を尖らせ渋面を作っているのに、その田は哀し氣だ。

恐らく心の内で育まれた激しい憤りが、それを表に出すこと叶わず、次第に置き場の無い哀しみへと変化していったのだろう。じわり、じわりと寄せる波が、ささやかに、けれど止 とどめる事も出来ずに浜辺を濡らすように。

少年の言葉が、薄明かりの部屋に深く沈み込む。

「解つては、いるのだ。俺が……この身が、不相応な立場にあることくらい……誰に言われずとも、解つてはいる。未だに家臣の助言なくては采配の一つも揮えぬ小物であると、周りに思われていてることも……」

そこまで言つて少年はふと言葉を止め、そして表情を強ばらせた。この薄明かりではその顔色までは分からぬが、少年が歯を食いしばる勢いで口を閉じ、俯いた姿が見て取れる。

どうしたのだろう、と一瞬思案した佐波は、すぐその理由に気が付いた。

彼は、今しがた呴いた“弱音”を恥じているのだ。

格下の者に対してものよつた振る舞いも許された貴族にも、たつた一つだけ、下の者に対し『してはならない』行いがある。

それが”弱音”だ。

弱音は即ち弱点だ。日頃より抑圧された下の者は、上の者の弱音を好機と捉え、機を逃すまいと猛烈に引き落としにかかりてくる。そうなればいくら格式に拘るうど、立場など簡単に裏返されてしまうのもまた、貴族の常識。

気高い彼らにとつて、それが何よりの屈辱であるのは間違いない。

市井に墮ちる事を拒み、命を絶つた母のよひ。

思考の隙間に、一瞬思い出した母の顔。

不思議なことに、その顔は佐波に向けて穏やかに笑っている。

あの日、人買いに名乗りを上げた佐波に「お前はもうこの家の子ではない」と告げた、瘦せて生氣のない、暗く光る瞳を持つ顔ではなく。

それはまるで、愛し子を抱き上げる女神のよつた、慈愛に満ちた笑顔で

そうだ、母も、いつかは私に笑いかけてくれたこともあった。

唐突に、佐波はそのことを思い出した。

物心つくかつかないかの、ほんの僅かな間だが、母が他の子と同じくらい、自分に笑顔を向けて、声をかけてくれていた時があった。その頃には、兄弟だつて、使用人だつて、父ですら優しく接してくれていた… ような気がする。

あの頃のこととはとにかく悲しくて、寂しくて、辛くて、今でもすん

なつとは思ひ起こせないから、この記憶が孤独に苛まれた自分が作り上げた偽りのものであつたとしても、不思議はない。

でも、もし記憶が…頭に浮かぶ心象が正しいとすれば…

？？不義の子である自分も、一度は家族に愛されていたことになるのだろうか…

あり得ない、それでも繰り付きたいような想像を巡らせた佐波は、けれど次の瞬間、ざわ、と首筋が疼くような違和感を覚えた。

…あれ…？

何かがおかしい。

何かが違う。

何かが掛け違つてゐる。

そういう警鐘めいた焦燥が胃の奥からこみ上げてくるのに、頭の中では一向にまとまりを得ない。

佐波は早くなる心音に意識を寄せ、混乱の中から浮き上がりつてくる疑問を見逃すまいと集中した。

…やういえば、いつ頃からだつただろう。

佐波の周囲が一変したのは。

父も、母も、兄弟たちも、まるで他を排除しようとすむよひに、冷たい激情の表情を多く見せるようになつたのは。

穏やかな日差しが、とたんに真冬の嵐のように変化し、佐波を

佐波の家を襲つたのは。

いつから、だつただうつへ

「…か…」

すっかり己の回想に沈んで、束の間自分の傍らに座る少年のことを忘れていた佐波は、微かに聞こえた音にハツと我に返った。

「何か話せ

まだ身体半分を回想の中にじっと浸らせていた佐波は、押し殺した少年の言葉をあやうく聞き逃しそうになつたが、どうにか意識の端に引っかかつたそれを回収して再生させた結果、思わず「えつ」と呻いた。

その反応が気に入らなかつたのか、少年は秀麗な眉をぴくりと動かし、

「暇だ。実に退屈だ。お前もじつせ寝付けないのでうつ。なりば、何か話せ

急かすように言った。

先ほどの失言を引きずつてゐるのか、言葉の内容はじつであれ、態度だけは立派に理不尽な貴族のそれだつた。

佐波は何度か瞬き、状況を整理し、考え、 結局何の考えも浮かばなかつたので、とつあえずオドオドと口を開いた。

「な、何を話せば…」

「お前の話でいい

「私の……？」

「ああ」

早くしる、と膝を揺らして忙しなく言い放つ少年に、佐波はともすれば真っ白になりそうな思考をどうにか繋いで、当たり障りのない記憶を呼び起こうとした。

…が、そう簡単に出てくるはずも無い。特に今のような横になつた姿勢のままでは意識が常に定まらず、自分で嫌気がさしているというのに。

それでも、態度の割に意外と辛抱強く佐波の言葉を待つ少年の姿を見ていると、何かを語らねばという焦燥に駆られてしまう。色々悩み、考え 暫しの沈黙後、なけなしの根性を引っ張り出して、佐波は重たい口を開いた。

「 私は布津の生まれで、12の時からつい先立 さきだ てまで、豪族家の使用人として勤めておりました」

「…ふうん。使用人とは、何をするのだ？」

貴族の人間らしく、少年も今まで『使用人』という存在を意識したことなどなかつたのだろう。

思つたよりもすんなり話題を呑み込んでくれた少年の、その厭味なく純粋な好奇心で輝く瞳に、佐波は少しだけ緊張を解いた。

「なんでも致します。水汲み、薪割り、掃除、洗濯、炊事、馬舎での馬番、時にはお出かけになる主上に付き従い、御身を守ることもまた仕事です」

「随分と多岐に渡るのだな。お前一人でか？」

「豪族家は広いですし、お使えする一族の方々も多く暮らしておいでですから、さすがに私一人というわけにはいきません。常時数十名の使用者が屋敷に駐在しておりました」

「まつ」

興味を持つてくれたのか、少年は少し身を乗り出すようにして聞く体勢になつた。

今まで滅多に自分の話をしてこなかつた佐波は、彼のその姿に少々照れながら続ける。

「私は1-2で其処にお勤めするまで、随分物を知らない……世間で聞いた生活をしてきました。だから当初は、本当に周りの者に呆られるやう、馬鹿にされるやうで……。夕餉を頂くまでに、半年もかかつてしまつました」

「夕餉を？……どういう意味だ？」

「……『小僧の空腹』といつ言葉がありますように……その、私の働きが、食事を得るに至らなかつたと申しますか……」

「つまり、未熟だったと申すのか」

「……そういうことですか」

自分の至らなかつた過去を語るのは、こんなに恥ずかしいことなんか……と奇妙な新鮮さを感じながら、佐波は小声で続けた。

「その間も、仕事は山のようにあるわけとして……お腹も、もちろん空くわけ……我慢出来なくなつた私はある日、仕事が終わつてから一ひっそり屋敷を抜け出で、食料を調達しに出掛けたのです」

「調達？……買いに行つたといふことか？」

「いえ、雇い始めの半人前の使用人に払われる賃金など、無いようなものです。それでも屋根のある部屋で寝泊まりでき、いざれきちんと仕事を覚えればまとまつた給金も貰えるようになるのですから、悪い仕事ではありません」

「……そう、か？」

どことなく不思議そうな顔の少年に、佐波は小さく微笑んだ。

「はい。着の身着のまま、転がり込むようにお世話をなつたお屋敷でしたから、当時私には持ち合わせが一切ありませんでした。だから、背に腹は代えられぬ覚悟で」

「盗みにでも行つたのか？」

「いいえ、山に狩りに向かつたのです」

「狩り？」

予想外だつたのか、少年が瞠目した。

「はい。…確かに”盗み”が過つた時も少なからずありました。時々人里の畠に実る美しい野菜や、のびのび育つてゐる家畜を見ていると、どうにかあれば自分が自分のものになる手だけは無いかと真面目に考えたものです。ですが、布津の法令では使用人の盗みには相当厳しいお咎めがあります。下手をすれば、その場で首を打たれてしまふかもしない。それくらいなら、自分で獲つた方が良いと思つて…」

…

無知で浅はかで、今考えれば呑氣にも程がある当時の佐波は、空腹を引きずつて山に入つた。

鳥か小さな獸くらいなら、きっと自分にも捕まえられるだろうと過信したまま。

「それで、何が獲れたんだ？」

「何も獲れませんでした」

「は？」

面立ちを幼くさせたほかんとした顔で見つめられて、佐波は余計に

「氣恥ずかしくなった。」

「考えれば明白だったのですが、私はそれまで、一度も狩りをしたこと�이ありませんでした。生き物がどこでどうやって暮らしているのか、何が好物で、何が弱点なのか、何処が壇「ねぐら」で、活動範囲はどれほどなのか……何一つ知らなかつたのです」

今思い出しても恥ずかしい。

仕事の合間にこつそり、見よう見まねで作った松明を掲げて山に入った佐波は、歩けど歩けど小さな獸一匹すら目にすることも出来ずに、ただオロオロしながら一夜を過ごした。

夜明け前には、他の使用人達が起き出していく。それまでに絶対に帰らなければならぬ。

白々夜が開け始めた山道を、疲労困憊の身体で本当に転がりながら帰つたのが、つい先日のことのようだ。

「結局、その後何度も山に入ったのですが、何も獲れず……ただ疲労と空腹と眠気に翻弄される日々が続きました」

「……上手くはいかないものだな」

貴族の出自である少年にはきっと想像し難かるつと思つていたが、意外にも彼は同情の色をした瞳で頷いている。

共感する能力も高いのだろう。生まれもつての性格の優しさが滲み出るその表情に、佐波はほわりと胸が温かくなるのを感じた。

「はい。どのようなことも、最初は上手くいかないものです。それから一時は、盗みも考えたことがありました。空腹とは恐ろしいもので、明らかに間違つた方向であつても、思考や判断をねじ曲げて行動を起こしてしまつ力があるのです。……多分、それが生き物の『生きようとする』本能というものなのでしょう」

今になれば冷静に思い起こせるが、当時は真剣に、ただ飢えていた。夕餉を美味しそうに喰らう他の使用人たちが憎くてたまらず、残飯をあさりに厨房に潜り込み、叩き出されたこともある。

特にその時期、隣州である九土「くど」では大きな飢饉があり、その波は布津にまで押し寄せていた。

人々は命の次に大事な食料を囮い、他人に奪われてなるものかと目を光させていたのだから、佐波に食べ物を恵んでくれるような人間もいなのは当然だつた。

「…それで、どうしたのだ」

不安そうな顔で問われて、佐波は当時を思い起こしながら情けなく笑つた。

「色々考えたのですが、やはり自分で獲るうと…。ですが、今までのようすに闇雲に山に入つても駄目なことはわかつていましたから」

考えた。空腹と疲労で凶惡になりそうな思考を、どうにか保たせて、ただ必死に。

そうして暫く、根氣づよく考え続けたら、ふと思いついたことがあつた。

貴族の子女だつた頃、兄弟たちが先回りして隙をつき、綱をかけられた事があつた。

もちろんそれはただの虐めに他ならないが、もしかしたらあれも”狩り”の一種かもしない。

そう気付いたらいてもたつても居られず、佐波は仕事の合間をみては、ひたすらに計画を練つた。

「限られた時間で、己一人で野生の獣を狩ろうとしても、どうして

も無理があります。ならば、最初から”仕掛け”を作り、それを幾つも山の中に仕掛ければ、私が山に入つていない間であつても或「あるいは」何かが掛かってくれるのではないかと」

「『罠』か

合点がいったのか、少年が口角をあげて笑つた。  
それにつられて笑いながら、頷く。

「はい。今思えばただそれだけのことです。でも、何も知らなかつた私は、己がかつてない大発見をしたように思えて、とても興奮しました」

空いた時間に地面に設計図を描き、山から持つて下りた枝で、これも見よう見まねで籠を編んだ。

籠の下に突つ張り棒を置き、さうにその棒の下に餌となるものを置く。餌を獸が引き抜けば、籠が被さる仕組みの罠だ。

獸が撥ね除けられないよう、石を詰めた袋をあらかじめ籠に乗せたり、籠の大きさを調整したり、様々な問題点を一つ一つ解決していくのは楽しく、日々の辛い労働の糧にもなった。

一番の問題であつた餌だが、これは屋敷に大量発生した鼠を充てることにした。

害獸である鼠なら、いくら屋敷のものでも使って差し支えない。こちらも小さな罠にかけて獲つた鼠を使って、よつやく山に幾つかの罠を仕掛けるに至つた。

「暫くは人間の匂いがついていたのか、罠に何も掛からない日が続きました。正直とても消沈しましたが、それでもこれ以上の手が今思い浮かばない以上、続けるしかないと思って」

罠を作り、山に仕掛け続けた。

すると、暫くして幾つかの罠に獸が近寄った後があることに気が付いた。

夢中で罠を改良し、また暫くすると、今度は罠から餌だけが抜き取られる。

好機だと思った。

「餌に興味を持つてくれているなり、あとは罠を頑丈に、確實にするだけでした。何度も作り直して、そしてそのうちにようやく小さな獸が罠に掛かってくれるようになりました」

最初に掛かったのは、茶色い、両掌程の大きさの獸だった。佐波が見つけたとき、名前も知らないその獸は、罠の籠の中でしきりに啼いていた。

興奮して思わずその場で罠を解体しようとしたが、逃げられてしまう可能性が高いことに気付いて、そのまま背中に抱いで急ぎ山から下りた。

「そうか。じゃあ、上手くいったのだな」

安堵したよつて言つ少年に、佐波は申し訳ない気持ちになりましたが、小さく首を振った。

「いえ。本当の問題はここからでした」

「問題？まだ何かあるのか」

「はい。…私は急いで屋敷に戻つて、人の来ない屋敷裏の河原で、その獸を殺そうと罠から出したのです。獸は、子どものようでした。キュイキュイと啼いて、まるで母親を呼んでいるように健気に暴れていました」

あの温もつを、佐波はきっと忘れない。

手で掴めば、毛皮の下の鼓動がわかつた。自分と同じ、生き物の鼓動が。

「殺そうと力を込めたが、駄目でした。震えて、手に力が入らなかつたのです。私はその時になつてようやく、自分が自分の手で直接生き物を殺したことが一度もなかつたことに気付いて、愕然としました」

今まで誰かが獲つたものを、何も知らずに口に運んでいた。知識では、それが元は命あるものであつたことを知つてはいるけれど、その命あるものにも存在する家族や、死ぬ瞬間に感じるのであらう苦痛、恐怖まで想像したことはなかつた。

怖かつたのです、と佐波は小さく呟いた。

「思えば、家畜を屠殺したこともありませんでした。それなのに、どうして安易に『狩ればいい』などと思つていたのか…本当に、自分のことながら呆れてしまします」

「…逃がしたのか」

少年がじつとこちらを窺つているのに勿論気付いていたが、佐波はため息を止められなかつた。

「…いいえ」

「…？ じゃあ、殺したのか」

「…いいえ」

もう一度息を吐いて、佐波はぼつぼつと続けた。

「…逃がす事も、殺す事も出来ませんでした。逃がそつがと考えて

も、空腹がそれを拒否するのです。かといって怖じ躊躇した心では、殺す事も仮ならず」

「進」「いつか」「もう進」「やつれ」もいかなかつた。

しかも気付けば空も少しずつ由み始めていて、時間も残されていない。

迷い移るひ心が時とともに止めどなく肥大し、ついに佐波は河原に踞「うづくま」り、暴れる小さな獸を抱いて泣いた。

己が不甲斐なくて、情けなくて仕方が無かつた。

生きようともがくこの小さな命の前で、生きる為の殺生すら出来ない自分は、比べるまでもなく慘めだった。

大変永らくお待たせしております……！今年初更新ですがもう2月とか……。

今週中にもう一話UPします。今見直し中ですのでちよつとお待ち下され～！

ちなみに『小僧の空腹』なる言葉は存在しません（汗）

異世界設定だから格言にも気を使います……細かいところは面倒なのとわかり易いようにそのまま使ってしまいますが（^\_\_^;）

「なら、どうしたのだ。飼い馴らしたのか？」

「…確かに貴族や豪族の中には、獣を愛玩する方々もいらっしゃいますが…普通食うや食われずの生活をしている平民は、不要な食い扶持は増やさないものです。…でも正直、その手も考えました。勿論、自分の糧さえない状況では、すぐに無理だと気付きましたが」

「そう、だな…」

何処か残念そうな顔の少年に、佐波は微笑んだ。

「結局、泣いているところを他の使用人に見つかってしまい、事情を察したその使用人が、獣を捌 さばいてくれたのです」

その使用人こそ、今でも良くしてくれている自称・愛妻家の靄 ひさめ だ。

面倒見の良かつた彼は、何事も覚束無 おぼつかな い佐波の手際をこつそり助けてくれることも暫しだった。

彼に見事に捌かれた肉を河原の石で焼き、そのまま一気に頬張つたら、また涙が出た。

美味しかった。とんでもなく美味しく、そして罪深い味がした。泣きながら食べる佐波に、靄は笑いながら『命つてのは美味しいだろ。俺たちの肉も、きっと美味しいんだろうな』と呴いた。

もしかしたら『冗談のつもりで言ったのかかもしれないその言葉に、けれど佐波は一つ大きなことを悟つたのだ。

「生きる為の殺生は、この世の理です。私たちは命を食べ、その屍の上に生きている。私はどこかで、それは人間だけだと思い込んでいたようなのです。でも、それはあの小さな獣にもいえることだつ

た。昨日食べた獣の身内が、明日私を食べるかもしれない。その獣もまた誰かに食べられ、その誰かも、何かの糧になる。 命は、循環している

それを知った数年後、佐波は初めて人を殺し、仇を討ちにきたその息子も斬った。

命は循環している。命どころか、血も、肉も、業も、憎しみも、…この世のありとあらゆるものは、人を渡り、時を渡り、巡っている。自分もその歯車の一つ。波に崩れゆく砂の城のように。風に散らされる名もなき花のように、いすれは消えゆくもの一つなのだと、佐波はその時悟ったのだ。

それを拙いながらも説明しようとした佐波に、靄は目を丸くして、次いで破裂したように笑った。

『ガキは、そんな小難しいこと考えてないでまた今晚の食事について考えてりやいいんだよ。俺はもう手え貸さねえからな』

そう言いつつ、次に山に入る時は、彼もこつそりついてくれた。仕掛けを褒めてくれて、更に良く獲れるように改良してくれたりまでも。

見た目よりもずっと甲斐甲斐しい靄のお陰で、佐波はその辛い半年を越えられたと言つても過言ではない。

本当に、今に至るまでずっと、彼にはお世話になり続けている。

…靄さん……無事、だろつか。

ふと過った悪い考えに、佐波の表情に翳りが落ちる。  
確か、臥龍城 ガリュうじょう でサツキから聞いたところによれば、火事の後で3人の死体が河から上がったと。

その一つが、佐波と同じ豪族家の使用人だという話だつたはずだ。あの日。あの火事の晩に遊郭街を訪れたのは、三男坊の来栖 くる

すと、用心棒を含めた使用人數名。

上がつた死体が、その中の一人である可能性は極めて高い。

それが需である可能性も。

考えた途端に、早く此処を出なればといつ焦燥に駆られて、心臓がどくんと脈打つた。

それが無理でも、一刻も早く彼らの無事を知りたい。

そして、今私がどんな騒動に巻き込まれているのか、把握したい。

窪地の霧が晴れるように、久方ぶりに思考に結論を見出す。次なる目的を見出し、生氣を取り戻しかけていた佐波に、放つておかれていた少年が焦れた声を上げた。

「それで？」

「？？？え？」

「続くのではないのか？」

「…あ、ああ、いえ、…その」

「なんだ、終わりか？」

ガツカリした声で言られて焦る。

正直、これから先に急展開があるわけでもないが、それでも語り始めたのならば、話を閉じるのもまた語り手の仕事だろう。

佐波は、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「それ以来、私はもう一つ生きるのに大切な技術を得ました」

「肉を捌く以外にか？」

「はい。場合によつては何の効力も發揮しませんが、でもこの世を生き抜く為には必要な力です」

「ほひ？」

再び興味を持ったのか、身を乗り出してくる少年に、佐波はこいつと笑った。

「人にお願いする力です」

「……なんだ、その他力本願な技術は」

至極不本意な顔をする少年に構わず、畳み掛ける。

「正確には、人に助けを求める力、でしようか。それまで私は、頑なに己の力だけを頼りにしていました。見よう見まねで失敗したり、相手に不満も伝えられずにただ恨めしく思たりして……誰かに教えを請うことすらしていなかつたのです」

貴族であつた頃は、生きているだけで食事にありつけた。教えを請わずとも、周りが教えてくれた。

冷遇されていた佐波の場合でも、不自由のないようになると以織が気を配つてくれていたおかげで、これといって人に頼む事もせずに、自分の出来る範囲でしか行動してこなかつた。

だから全く未知の世界でも、己の力を過信したまま、無茶を通そうとしていたのだ。

その事に気付くまでに、本当に沢山のしなくてもいい失敗を繰り返してきた。

知らないなら、尋ねればいい。教えを請われたら、伝えればいい。自分に足りないものは、そういう対人技術だったのだ。

「確かに、どれほど頭を下げて願つても、素氣無くされることもよくありましたか 中には、面倒見の良い者が、仕方ないなりに手を貸してくれたりするものです」

佐波が率先して教えを請つようになつてから、貢える仕事が倍増した。

習つより慣れるとほよく言つがまわにその通りで、毎日寝る間も惜しんで働いていると、次第に少しづつ要領を得るようになつた。そしてどうにか手順通りこなせるようになつたある日、初めて夕餉を準備されたのだ。

感激のあまり泣きながら夕餉を頬張る佐波に、隣に座っていた使用者が笑いながら自分の皿から食事を分けてくれた。それにも泣きながら礼を述べ、部屋に帰る前にも別の使用人が小さな乾菓子を手渡してくれて、また泣いた。

命は巡る。

血も、肉も、業も、憎しみも、全てこの世を飾る装飾だ。

辛いことも、悲しいことも、苦しいことも、寂しいことも、どれも避けては通れない。

でも世界は、同じように歓びも、笑顔も、温もりも、優しさも、すべてを包んでひた向きに循環している。

幸せだった。ただ生きている事が。??見知らぬ誰かとも、命で繋がっていることが。

「この世は、己の力だけでは及ばないことがかりです。ともすれば諦めてしまいがちですが……立場を変え、視点をえてみれば、意外となんでもないことで躓いていたりするものかもしれません」

そう語り、笑顔で少年を見上げた佐波は、思わずその笑みのまま固まつた。

少年が顎に手をやり、壁に穴が開けられそうな程の強烈な視線で、佐波をじっと見下ろしていたのだ。

その厳しい視線に、反射的に背中に冷や汗が浮かぶ。

「……ええっと、だから、ですね、その……」

「……面白いな」

慌てて言葉を紡ぎ直そうとした佐波に、ぱつり、と少年が咳く。そしてその無垢な瞳で佐波を覗き込み、

「お前、遠回しに俺に説教をしたのか」「つせ、説教であるつもりは……」

ないが、確かに考えてみれば、これは説教ととられても仕方が無い話だった。

殆ど無意識だったが、先の少年の”弱音”があつたからこそ思い出した記憶であることは間違いない。

雲上の貴族にたかが使用人風情が説教をするなど……どう考えても無礼極まりない振る舞いだ。

あわあわと焦る佐波に、少年は尚も強烈な視線を向け、

「説教だらう?」「己の力が及ばないならば、周りに助けを求めるよ、とい、いえ、そうではなくて、己の力が及ばない場合でも、やり方と考え方次第で道が開けると」

「やっぱり説教ではないか」「

「ぐうひ」

駄目だ、言い訳が何一つ思い浮かばない……！

言葉に詰まつて口をぱくぱく開閉させる佐波に、少年は暫く厳しい顔で何事かを考えていたが、やがて重々しく口を開いた。

「良くもまあ、下々の分際で……と、言つべきなんだらうが」

ふ、と笑う。それはそれは、花も綻ぶような麗しい顔で。

「よい。己の恥を引き合に出してまで俺に説教をしようとした人間はかつて無いからな。お前が本気でそれを俺に伝えようとしたことは、確と受け止めよ!」

お前は随分と肝が据わっているようだと恥き、ぽかんと見上げている佐波に、彼は再び重々しく問つた。

「名は  
「へ?」  
「お前の名だ」  
「そ、佐波と、申します」

よい、と言われたということは、許されたということだらうか…と未だ己の現状を把握しきれていない佐波がオドオドと答えると、少年は首を傾げた。

「どのよつな字を書く」  
「ええと…」

問われるままに口頭で答え様子を伺えば、彼は一つ大きく頷いて、

囁み含めるよつに小さく呟く。

そして、

「佐波か…」

「佐波。お前、俺の名を知りたいか」

「え、……ええつ？」

「なんだ、知りたくないのか」

「ええつと…おし、教えて、頂けるのですか？」

やせつオドオドと問うと、少年はどこか誇りしきに背筋を伸ばした。

「お前が知りたいとこつなら、教えてやる。説教の礼だ。ただし、知つたらもう後戻りは出来んぞ」

「ええ…?」

何だかわからないが、ビビとなく恐ろしい。

出来れば知らずに過ぐしたところだが、少年のキラキラ輝く瞳を見るに、この流れで否定することはかなり難しそうだと悟る。

？？？それに…

今日のじじと、夜明けとともに覚める夢のよつなものだ。

もうあと数刻もすれば、夜も薄くなる。

朝陽が連れてくるだらつ現実世界で、彼と自分を繋ぐものなど何もない。

？？？だけど、もし日が覚めてもこの不思議な夢を覚えていられるなら…

自分はこの奇妙な出会いを忘れないだろ。

いつか見知らぬ空に、優しい貴族の少年の姿を浮かべて、懐かしがる日もきっと来る。

そつ思つと、胸の中で灯りが瞬くよつな温かさを覚えた。

「…では、教えて頂けますか？」

「いいだろう

佐波の言葉に、少年は微笑んで背筋を伸ばし、貴族の出血らしき巣かな態度で名乗った。

「夏西王梓劉 かせにおひじりゅう」

その酷く現実味のない響きに、佐波は咄嗟に小さく笑つた。  
何せ、その名を知らぬ者はこの国には居ないと断言出来る”名”だ。  
騙かたれば即刻死罪は免れぬ雲上の御方の名を、このように、  
堂々と拝借してみせる人間も相当に珍しいが、だからといってこの  
少年が、まさか本人であろうはずもない。

だからこれは貴族の少年にからかわれたのか、ただの悪ふざけだろうと軽く受け取つて笑つてみせたのだが

「え？」

直ぐにでも双眸を緩め「冗談だ」と返してくることを期待していた佐波の目には、やや視線を落とし、まるで身の丈に合わぬ衣装を恥じているかのように、苦々しく口を結ぶ少年の姿だけが映る。

それから更に数秒… それとも、数分刻んだらどうか。

何一つ変わらない少年の様子とは相対して、佐波は自分がつま先から徐々に凍つていくような恐ろしさを覚えて、慌てて口を保とうと一つ大きく喘ぎ、どうにかこの沈黙を埋めようと意味のない言葉を呟く。

「…………あの…………え…………えっと…………」

「…………」

自分でも嫌になるくらい恐ろしく鈍い思考が、それでも何が何でも考えたくなかつた『可能性』に向かっているのをついには無視出来なくなり、佐波は長い思巡の末、現実と向き合つことになつた。

「…………」

「俺は一度は名乗らんぞ」

沈黙を破り、拗ねたような顔でそつと口をついて少年は 皇國現皇帝陛下・夏西王梓劉 かせいおうじりゅう は膝の上に頬杖をついた。

少年の正体は身も心も若い皇帝陛下でした。

皇国のトップが現在この話の登場人物の誰よりピュアだなんて…

次回も頑張ります！

夢は夢でも、これは悪夢の類いだ……

ざあつと体温が急激に下がり、佐波は目眩と吐き気を覚えた。目を閉じても、視界がチカチカする。吸い込む空気が肺の手前で押し返されるようで、酷く息苦しかった。それが極度の緊張故だと気付けぬ程に昏迷を極める佐波を置き去り、少年……否、皇帝陛下は、胡座に肘をつきむつりと顔を顰めて、つまらなそうに語り出す。

「一ヶ月期（一ヶ月）に一度は、俺の気分転換だとかなんとか言い訳をつけて遊郭（こう）に連れてこられるんだ。無論俺だって暇じゃない。即位してもう2年になるが、まだ全ての執務を把握しているとはいえないからな。……だというのに家臣　あいつらは、やれ根を詰めるな、やれ陛下はまだお若いのだからと耳障りのいい言葉を並べて、俺から執務を遠ざけよとする」

ふう、と疲れたため息をついて、彼は悔し気に歯を噛んだ。

？？？2年前……

「……」ことなくその言葉に引っかかりを覚えながらも、佐波は黙つて彼の話に耳を傾けた。

「理由はわかっている。家臣　あいつら　は、皇帝　おれ　が無能であつて欲しいのだ。自分たちに都合の良い腐政を断行するために

な。可笑しいだろう？皇国このくにの頂点であるはずの”皇帝”には、実は何の力も在りはしない。もう何代も前から、皇帝家はただのお飾りだ。実質、今行政を把握し、司つているのは皇帝おれじやなく宮廷庁の

「おおおお待ち、ください！」

ぎょっとして、佐波は悲鳴のよつた声を上げた。

身体が軋んで酷く痛んだが、それどころではない。

未だくらくら定まらない視界に、言葉を遮られた皇帝の不機嫌そうな顔が映つたが、このまま黙つて聞いているわけには絶対にいかなかつた。

「そ、その、そのような重大な話を、私のよつた、身元も定かでない、行きずりの人間に、軽々しく伝えては、なりません…」

この際、彼が本物の皇帝陛下であるかの真偽などどうでもいい。後にたしかかわれていただけだと解つても、それならそれで構わない。むしろそうであつて欲しい。

だが、もし本物だったなら、これは失言を軽く凌駕する大暴露だ。そんな政界の闇を軽々しく口に出すなど…佐波の立場は元よりだが、彼自身の立場も大変危なくする行為だ。

佐波がそれを息も絶え絶えに訴えると、しかし身も心も若き皇帝陛下は、「はつ」と短く嫌悪の息を吐き、胡座を崩して片膝を立てた。

「なら俺は、誰にならこのよつた重大な話をしてもいいのだ？」

「そ………それは  
「俺に自由はない」

戸惑う佐波に構わず、彼はその目を仄暗く光らせる。

「朝も昼も夕も晩も、寝ている間すら、臣下の監視下にある。愚痴を言えれば責められ、評論すれば未熟者と影で嗤われる。…弱音など、吐けるはずも無い」

「へ、陛下」

「梓劉 しりゅう だ。 いや、梓星 しせい の方がいいな」

険しい瞳を瞬時に和らげて、小さく微笑む。

「梓星は俺の幼名だ。」梓劉は即位の時に与えられた名だが、どうにも未だにしつくりこないんだ。そもそも皇帝の名など誰も呼びはしないのに、なぜ新たに付け直す必要があるのか、俺には不思議でならん」

皇帝家の姫など、意味のわからんものばかりだ と呟いて、彼は冷や汗を流し続いている佐波に視線を合わせた。

「俺のことは梓星と呼べ。そろそろ誰かに名を呼ばないと、俺は

”俺”を忘れそうだ

「……っ で、」

「『出来ない』などと言つもつりか？」

「ううつ」

「…なら、今このだけでいい。俺を陛下と呼ぶな。…呼んでくれるな」

それは哀願だつた。

重たい闇を背負つた暗い瞳に、揺れる灯りが映り込む。

あまりにも痛々しいその姿は これも無礼極まりないが 憐憫の情を抱かせる悲壮感に包まれていた。

再び沈んだ室内の空氣に、佐波はどうにか動く右腕で額を押さえ、目眩を治める為に深く息を吸い込んだ。

「……どのよつな字を、書かれるのですか」

もつじりさだてりともなれ、という気持ちが現れたのか、堅い口調になる佐波を咎めもせずに、若き皇帝陛下 梓星 しせい は薔が花開くよつて、可憐に笑つた。

「梓弓に、宙 そら の星だ。父上が直々に下さつたのだそつだ。良い名だろう」

「……はい。美しい御名ですね」

字面を思い浮かべると、美しい光景が現れた。

邪氣を払う、清き星。そのような意味でつけられたのだろう。さすが貴い人々の感性は違う、と納得していると、梓星が思わぬ言葉を返してきた。

「”佐波”も良い名だ。水辺という意味だろう

「……つ、『』、ご存知でしたか」

「莫迦にするな。これでも学問は一通り習得したのだ」

少し気分を害したのかむすりとした顔で言う、梓星に、佐波は思わず「ああそつか」と呟きそつになつた。

今まで佐波の名からその由来まで瞬時に悟つた人間は、以織以外にいなかつた。

そもそも、皇國の下々の民にとつて『学問』といえば金勘定や文字習いくらいなもので、文学や歴史学などは貴族 ひまじん の勉学と呼ばれ疎まれている。

ちなみに、”佐波”の名が皇國の古典的詩に登場するのだと教えてくれたのは、これもまた以織だ。

美しい名ですね。

微笑んでそう言つてくれた以織の姿が一瞬脳裏を掠めて、佐波は目眩とは違つ『眩み』を感じた。

「…申し訳ありません。私の周りでは、あまりそういう話をしたことがありませんので…」

眩みを押さえ込んで静かに答えると、今度は梓星の顔に「ああそつか」と言わんばかりの表情が浮かんだ。

「やういえば、市井の庶（庶民）にはあまり教養は普及していないと聞く。数も数えられぬ者が殆どだと…」

「…それは誤りです。確かに先天的なもので数を数えるのが不得手な者もおりますが、殆どの民は親から真っ先に”数”を教え込まれます。そうでなければ、貨幣の国では生きていけませんから」

失礼にあたるだらうかと少し悩んだが、我慢出来ずに佐波は控えめに補足することにした。

「文字も同様です。簡単な読み書きをしたら、皆親や兄弟親類、近所の習い事の師から教わります。確かに最低限の教養ではありますが、数や文字に強い者ほど良い職に就けますから、皆忙しい仕事の合間に割いて学んでいます」

なるほどな、と頷く梓星にはもちろん悪気などないのだろう。だが、先ほどの言は間違いなく他の上級貴族たちから吹き込まれた偏見に他ならない。

いや、偏見とこゝよりも『壁』だらうか。上下を分かつ、優越を抱く為の…

過つた暗い感情を隠すように、佐波は努めて穏やかな声を出した。

「ですが、数も文字も生活に関わること以上のものは、逆に疎まれるのです」「？」

「必要ないから、でしそうか。生きていぐ上で必要なものは、ある程度の計算能力と、ある程度の読み書きです。文学を読み解いたり、詩を唱えたり、歴史を学ぶことなど、生活にはほぼ全く関わりのないことですか？」「…まあ、そうだな」

納得したように頷いた梓星だが、ふと何かを思いついたような、訝し気な表情で佐波を見た。

「ならば、お前は…お前の両親は何処で学んだのだ？」

「え？」

「名をつけたところ」とは、その意味も知つてのことだらう。お前の云う通りなら市井では必要とされる学問を、お前の両親は学んでいたのではないか？」

「それ、は

「

ぎくりとした。

勿論、それは佐波の両親が貴族であつたことの証明だ。

純粹な好奇心以外の何も映さない梓星の目を見つめ返しながら、佐波は観念したようにぽつりと語り出した。

「私は布津の貴族の出自でした。なので両親は一人とも、貴族の教

養を持っていたのです

「……貴族？」

梓星のあからさまに驚いた顔に、佐波は「…わかってます。その様には見えませんよね」とちよつと遠い目で彼の驚きを肯定した。

「私が1-2の頃に、家は廃れたのです。金銭的なものが原因だったそうで…」

「ああ！…そ、うか、だからお前は遊郭に売られたのだな」

「はあ、そ、うなん…ではないです！…つう売られてはないのです！ああでも売られかけて、だけどそれを以あ、ではなく友人が助けてくれて…つだから私は」

「でも結局逃れられず、遊郭「！」で働くことになつたのだな…」

「ち、ちが」

違う、と言いかけて、ぽんつと頭に酷く恐ろしい笑みを浮かべた空木の顔が浮かんだ。

彼は、売れる売れないに関わらず、怪我が治れば佐波を遊郭で働くかせると言つていた気がする。

いや、多分悲しいことに聞き間違いでも思い違いでもなく、確実に実行されるであろう佐波の未来だ。

イマイチ現実味がない話だが、少し話しただけでも空木のそれが脅しではなく本気の其れだとわかつた。

つまりは、梓星の言つていることは的を得てているわけで…

思わず押し黙つた佐波に、勝手な妄想を膨らませ始めたのか、梓星は顔を悲壮感で歪ませた。

「その怪我も折檻されたのだろうな、可哀想に…。遊郭「！」では厳しい撻があるのだろう？好いた相手とも添えず、皆若くして死んでいくのだとも聞いた」

「……ああ、ええ、はい……そつ……みたいですね……」

色々と勘違いをされている様だが、これ以上詮索されるのも大変困る。

かなり疲労が出始めた佐波は、とりあえず話の流れに任せることにした。

そんな佐波の表情を、これまた勝手に解釈したらしく梓星は、同調するように苦々しい声を上げた。

「俺も、どうにも遊郭は性に合わない。ここ一年ほどはほぼ毎月期家臣どもに連れられてはいるが、楽しんだことなど一度もないしな」

「……そう、なのですか？」

意外だった。

何せ遊郭「ここ」は、囲われた者には地獄だが、訪れる者には黎明郷のような素晴らしい場所だと聞き及んでいる。  
しかも皇帝という最上級の身分を持つ彼には、当然遊郭「ここ」で最上級の待遇が約束されているわけで……  
不思議そうな顔の佐波に、梓星は気まず気に視線を逸らした。

「そもそも、何故身も知らぬ相手と肌を合わせなければならんのだ。氣味が悪いだろう」

「そ、そうです、ね？」

随分純朴なことを言つてのけた皇帝陛下に、佐波は無意識に返答しながらも内心驚きを隠せなかつた。

「正直このご時世、年頃の乙女でも家の為家族の為老後の為に好きでもない相手に嫁いでいくのが常識だ。

勿論梓星の言の方が正論なのだろうが、やはりなんとこうか……ここ

まで穢れなく育つとは、さすがに究極の箱入りだと感心してしまう。

変なところで感心してぽかんとしている佐波に、梓星は何故だか居心地悪気に視線を動かし、ほんのりと頬を染めた。

「……それに、俺にも好みといつものがある。否応なく寄越されて  
も、どうにも出来ん」

なんだか退つ引きならない会話に入りしそうな気配を感じて、佐波は慌てて言葉を探した。

「いや、いやらの遊郭街は、皇都隨一と伺っています。選りすぐりの美女美男の揃つた、浮き世の黎明郷だとも……そのような場所でも、陛下の」

柱星

か  
？

一遊女？

佐波のたどたどしい質問に、何故だか梓星は奇妙なところで反応した。

？」

「お前も幾つかは知つてゐるだろ? が……遊郭 一二三 に掟があるよつて、この国にも数々の掟がある」

「はあ…」

突然話題が変わったことに唖然としながら頷く佐波に、梓星は堪りかねたように深いため息をつきながら語り出した。

「その辻で規制されるのは、何も市井の臣や家臣たちだけではない。中には、皇帝「おれ」の行動を制限するものもあるのだ」

「皇帝、陛下を…？」

「ああ。簡単なもので言つと、即位の時には新たに名を得なければならぬ、とかだな。食事も、何人以上に毒味をさせるだとか、謁見の儀の時には必ず冠をするだとか…そういうものだ。一つ一つを行うのはそんなに難しいことではないが、このような決まり事が数百あつてな」

「数百…」

「正直、息苦しい」とこの上ない。…まあそれらも、我慢しようと思えば出来るのだ。俺だって生半可な覚悟で即位したワケではない。いつまでも物の分からぬ童では居られないというのも解つてている。解つてはいるのだ。頭では…」

げんなりと語る梓星に、その苦労のほどが窺えた。

何か慰めの言葉でもかけた方がいいのか、と佐波がオロオロしてい

る間にも、彼の顔色はどんどん悪くなる。

「…だがな、頭で解つても、どうしても生理的に受け付けないものもある。その中でも俺が取り分け苦りきつているのが、『皇帝の渡わたり』についての辻だ」

「渡り、ですか…？」

「つまり……子を成すことについて、だ」

重苦しいその言葉の意味を察して、佐波はペキッと固まつた。その反応にもの申すこともなく、梓星は平坦な声で言つた。

「『庶子を作るべからず』。……何代か前の皇帝が、それはそれは大層”色”に弱かつたらしくてな。貴族豪族、果ては気に入つた遊女まで後宮に百人近く召し抱えていたそつだ。その結果、世継ぎ争いが激化した」

「…あ、……ああ、聞いたことがあります。確か、華栄の悲劇…」

ぎくしゃくしながらも、佐波はどうにか記憶を辿った。

『華栄の悲劇』は割と市井でも知られている、所謂「いわゆる」皇帝家の醜聞だ。

色好きであつた皇帝が召し抱えた多くの側室達が、互いに口の子を次期皇帝にすべく企て、生まれた御子を次々に暗殺していくたという…恐ろしい話。

その話によると、暗殺された御子の数は、実に100を超えるらしい。噂では、葬り去られた側室の数はその倍だとも。関係のない市井の者たちも震え上がるほどの事件であつたらしいが、ならば当時の後宮に関係する者達はどうほどの恐怖を感じていたとか。

その暗黒の歴史は、恐らく皇帝家にも深く癒えない傷を『えたのだ。

梓星は、力無く頷いた。

「…あればそう呼ばれているらしいな。悲劇というより、惨劇だが…。その件までは皇帝にも側室を選ぶ権限があつたらしいのだが、それ以来、後宮には厳しい制限が付き、皇帝の渡りについても厳しい掟が生まれた」

「…『庶子を作るべからず』…」

「そうだ。正確には、子を成す行為も必ず臣下の立ち会いの元で行うこと。正室は元より、側室も全て臣下の采配に従うこと。市井の者との間に、庶子を作らぬこと、だ。????だから俺は、今日もこ

「こに連れてこられたのだ」

「…………え？…………ええつ？そ、それはどうこいつ？」

急に話が飛躍して、疑問を表情一杯に浮かべる佐波に、梓星は焦れつたそつに言つた。

「だから、俺は遊女とは交われんのだ」

「へ？？？？え？」

「こ」の軒は男娼遊郭樓だろう。俺は男色じやない。どうやつたつて、男は抱けん！」

これまでの憤りが一気に噴出したのか、梓星は声を張り上げた。

勢いで書き上げたのでどうしようかたいへんなみすをしていた  
（ ）

陸下と佐波の修学旅行の夜の会話（違）はもう少しここ続きます

若き皇帝陛下……梓星 しせい のあまりにも悲壮な叫びに、佐波も衝撃を受けた。

？？？「…」は『男娼遊郭楼』だったのか…！

佐波が尋ねた時、空木はここを「渕楼庵の姉妹楼の一軒」と言った。だからてつきり、自分は遊郭街の何処かの『遊女楼』の空き部屋にいるのだろうと思い込んでいたのだが、でも確かに渕楼庵では遊女・男娼の両方を置いている。男娼楼が姉妹楼でも間違はないのだろう。

空木がそれを敢えて教えたのかどうかは…少々邪推してしまうところだが。

脳裏でにやりと笑う痩せた若い男の面影を必死に端に押しあつて、佐波は思考を切り替えた。

：なるほど。それで陛下がこの男娼楼の何処から『逃げて』こられた凡 おおよ その理由はわかつた。

もう一つ、なぜ歴代の皇帝たちが、多少の不自由を圧してまでも遊郭に通っていたのか…その理由も。

恐らく、『華栄の悲劇』の後、郭関係者の皇宮への出入りも禁止となつたのだろう。

あの惨劇の影には、大量の遊女を皇帝に売り込んだ遊郭主たちの思

惑も大いに関係していると聞く。

再び悲劇を繰り返さぬ為にと定められた新しい掟は、以来遊女との交わりを禁じ、郭関係者の登城も堅く禁じたが、しかし皇帝が遊郭に通うことには許した。…否、許さざるを得なかつたのではないか。義務で凝り固められた皇帝といつ生は、きっと市井の民が思うよりもずっと不自由なものだ。

飢える事も、身分に泣く事も、格差により暴力に震えることもない。しかしだからといって、幸福とも限らない。

その境遇は丁度、『籠の鳥』に喩えられる遊郭に囮われた美しい娼婦たちと重なる。

彼女たちと逢い、語らい、身体を重ねる事は、きっと皇帝という孤高の殿上人にとって何よりの癒しであり、唯一寛げる時間。それを取り上げる事は、家臣たちにも到底出来はしなかつた。

だからといって遊女を抱かせることも出来ず…。

その煩悶の中から生まれた掟は、皇帝に男娼を宛てがう事で歪にも収めることと相成ったわけだ。

その気遣いが逆に、この若き皇帝陛下を苦しめているといつ、なんとも本末転倒な現象を起こしてはいるのだが…

同情とも感心ともとれる奇妙な表情で頷く佐波に、梓星はこじりとばかりに言葉を重ねる。

「家臣 あいつら は、俺をダシに遊郭に通いつめているんだ。皇帝の御付きといえば体裁も良いからな。しかも遊郭への支払いは国庫で、時間外の公務手当も付く。信じられるか？ あいつらからすればこれも『公務』なのだと。莫迦らしい。何が公務であるものか！ あいつらが従うべきはずの皇帝 おれ は執務を邪魔されて、あげく望んでもいない男娼を宛てがわれるんだぞ！」

「お、お声が…」

大きいのでは、と焦つて注意する間もなく、憤りも露あらわに据わった暗い目で佐波を見据えた梓星は「想像してみる」と低く呟いた。

「一晩中。一晩中だ。皇帝おれに氣に入られようとあれやこれやと手を尽くす男娼を前に、横になることも叶わず、部屋の隅で身を堅くして過ごす気まずさとこったら、相当なものだや」

あまりの剣幕に押されながらも、佐波は素直にその姿を想像した。この、花の顔かんばせのような麗しい皇帝が、一晩中部屋の片隅で両膝を抱えて硬直している姿を。

「……」

確かに、不憫だ。不憫を通り越して、なんだか愛らしささえ感じる。思わず緩みそうになつた頬を引き締めて、佐波は精一杯沈痛な声で言つた。

「それは…お氣の毒です」

「そうであろう!? しかもこれが、かれこれ一陽期（一年間）以上も続いているんだぞ!? 僕の我慢にも限度がある!」

同調されたことが嬉しかったのか勢いを増す梓星に、佐波は「はあ」と力無く相槌を打ち、ふと浮かんだ疑問を素直に口にした。

「あの…例えば、宛てがわれた男娼を下げてもらうことは…」

「もちろん、出来る。直ぐに次の男娼が宛てがわれるだけだがな…」

「！」

「さ、左様ですか…」

麗しい顔から地を這うような声が発せられて、さすがに變らしないなどと思つてゐる場合ではなさそつだと氣付く。

本氣の悩みには、本氣で向き合わねば不誠実といつものだ。

佐波は悶々と暗い氣を降り撒く皇帝陛下から目を逸らせ、天井を見上げながら唸つた。

「…遊郭側が男娼を推してくるのも必須。御家臣様らが男娼を獎めるのもまた必須…。男娼を下がらせても次が来て…ならば、話の分かる男娼に口裏を合わせてもらう以外には、他に方法がないようだ…」

「その通りだ！」

その大声に思わずビクッとなつた佐波に構わず、梓星は至極真面目な顔で、

「だから俺は、取引をした

「えつ？ ど、どなたと…」

「この遊郭樓の或る男娼とだ。二月期（二ヶ月）ほど前に宛てがわれた男娼だがな、この者が中々に聞き分けが良い。他の者たちが何をどう断ろうと隙あれば裸に引きずり込もうとするところを、この者だけは、俺の機嫌を取りはするが、特別手を出してはこなかつた。…それで今日は、その者を指名したのだ」

苦々しいその表情から、それがどれほど家臣達を喜ばせる結果になつたかありありと窺える。

彼にとつてみればそれも苦肉の策だったのだろう。一度目、今日もまた何もありはしないという確信は無いのだから。

徐々に見えてきたこれまでの経緯に、佐波は「それで」と先を促した。

「その男娼と、どのような取引を？」

「…ああ。部屋に入つてな、その者に言つたのだ。『今日も俺に触  
れず、何もせずに一晩過ごわせよ』と」

「…率直ですね」

「遊郭の者にこれくらいの”率直”で効くものか。はぐらかされて  
終いだ。お前もよく知つているだひつ」

「え？ あ、えつと、そ、それで？」

慌てて促すと、梓星は苦い表情で続けた。

「男は了承した。だがな、了承する代わりに、条件を出してきた」

「条件？」

佐波は眉を寄せた。

皇帝陛下と、まるで対等であるかのように手を振る舞うとは… 中々に度  
胸の据わった男娼だ。

「条件といつと… 金銭的なもの、でしようか？」

他に思いつかずにはいつぱつと、彼は首を横に振った。

「いや。もつと面倒で… 気の毒なものだ」

「あ、気の毒、ですか？」

意外な単語にきょとんとする佐波に、梓星も非常に苦つかった顔で  
言った。

「ああ… 気の毒だ。… その男娼にとつてはな、俺は全く好みの容姿  
でないらし…」

「へ？」

更に思わぬ言葉に目を丸くする。  
皇帝陛下と知つて尚「好みでない」と断言するなど、いへら梓星に  
その気が無いとはいへ、その男娼は度胸と無謀をはき違えているよ  
うに思うのだが…

いや、それよりも梓星はどこからどう見ても遊郭の者に勝るとも劣  
らない麗しい容姿。

今は幼さが勝つてやや少女のよつにも見受けられるが、あと1、2  
年もすればそれはそれは美しい美青年になること請け合いだ。  
本人には甚だ迷惑だらうが、隙あらばと狙う他の男娼達の気持ちも  
分からなくもない。

そんな彼が好みでないといつなら

佐波がその具体例を思いつく前に、梓星の暗い言葉が落ちてきた。

「もつと男らしく逞しい、筋骨隆々の男　　詰まる所、俺の警護  
をしている特別に鍛え上げられた兵士たちの方が”そそる”そうだ。  
だから」

「…まさか、き、気の毒といつのは…」

そこまで聞けば、さすがに想像がつく。

思わずごくりと唾を飲めば、弱り切つた形相の梓星も、言葉を紡ぐ  
為に喉を鳴らした。

「そうだ。一人、犠牲にしてきた。大変不本意だが、皇帝陛下の権  
限をこんな仕様も無いことで行使して、な」

「……」

恐ろしい話を聞いてしまつた。

正直、話を促してしまったことを今かなり後悔している。

いつそ心を無にして聞かなかつた」とにしてしまおう……と遠い田で天井を見上げる佐波に、きっと佐波よりもよっぽど深く思い惱んでゐるであらう皇帝陛下は、その心根がよく現れる沈んだ声で続けた。

「…常に屈強で無表情な兵士の、あんな悲壯な”皇帝への誓い”は初めて見た。まさかこんなこと、自分から口外してまわるはずもないが…一応釘は差しておいたから、家臣たちにバレることはないだろ？」

言葉が紡げないでいる佐波。そんな佐波を同じくどこか遠い目で見ながら、梓星は尚も続ける。

「この部屋を『空き部屋』だと俺に教えたのも、その男娼だ。まさか部屋まで変えたらさすがに家臣に怪しまれるからな。それに俺のいる前で”行われても”大変困る……ということで、教えられた通りに部屋の床から、遊郭の者しか知らないという中間階を渡り、この部屋の天井裏まで辿り着いたというわけだ。まあ、辿り着いたここは空き部屋ではなかつたが……」

沈黙が呼ぶ罪悪感に堪えられなくなつたらしい梓星がガツクリと肩を落として嘆く。

だがそんな彼を前にして、佐波の頭の中は可哀想な兵士へのお悔

やみで大変混雑していて、とても言葉を発せられる状態ではなかつた。

確かに、なぜ皇帝陛下ともあらう御方がこんな夜更けに天井から降つてきたのか、その理由と経緯はよく分かつたが……

????? なんて後味の悪い……

最初から訳ありだとは思つていたが、まさか己の貞操を守る為に部下を犠牲にするという業まで背負つていたとは……道理で部屋に入つてきた時から深刻に思い悩んだ顔をしていたわけだ。

……まあ、部下を斬り殺しても平然としている為政者など沢山いるわけだから、彼のこの反省具合はある意味好感が持てるといえなくもない。……さすがに擁護する氣にも、どうしてもなれないのだけ……。

怪我や薬の所為だけとは思えない顛一こめ かみの鈍痛を右手で揉みながら、佐波は無意識に唸つていた。

「……陛下」

「ううつ」

佐波が低く敬称で呼ぶと、梓星はそれを咎めることなくただ小さく呻いた。

声が低くなつたのは、ただ何を言えばいいかと思いあぐねているだけ、別段怒つているわけではないのだが（そもそも佐波に怒る権利などあるはずもない）梓星はどういうわけか、この明らかに格下の使用人風情に怒られると思つてゐるようだ。

身を固めて、心なしか涙目で俯く仕草の梓星を睡然と見上げながら、もしかしたら彼は叱つて貰いたいのかも知れないと思い至る。

邪氣を払う、清き星。その名の通り清廉な少年だ。

他人を思いやる賢さもあれば、相手の痛みを自分のものと感じる共感能力にも長ける。

そんな彼が、己の行いの非道さに気付かないわけがない。  
それでもどうしても逃れたかった。誰かに押し付けてでも。それほどまでに、切羽詰まっていたのだ。

目の前で身を縮めて震えているこの国の若き最高権力者の痛ましい境遇を想つて、佐波は、小さな吐息と共に呟いた。

「お辛かったのですね」

優しい彼には、どの選択もきっと辛かったに違いない。

ここに来るまでの間も、来てからの間も、ずっと『逃げてきた』己を責め続けてきた。

だからこそ今、誰かに断罪して欲しくなったのだろう。佐波のよくな身元も確かに格下の身分の者でも構わない程に、追いつめられて。

そんな彼を、どうして佐波が叱る必要があるのか。

彼に一番必要なことは、第三者による断罪ではなく、”償い”であると、当人でさえとっくに気付いているというのに。

… その可哀想な兵士の話は、自分の胸の中に生涯留めて、決して口外すまい…

と決意を固め、遠い目で一人頷く佐波。

そんな佐波の様子を、梓星は暫しづかんと眺め

ぼろ、とその磨かれた黒曜石のように美しい瞳から、涙を零した。



堰を切つて流れ出した珠の涙が、白磁の頬に跡を残し、板張りの床に落ちてゆく。

幾筋も、幾筋も、煌めいて佳人の頬を濡らす様は、まるで一枚の美しい絵画のようだ。

紙縛りの炎に照らし出されたその光景を、佐波は啞然と見上げた。

涙…

涙とは、こんなに美しいものだつただろうか。

美しい人が流す涙だから美しいか。それとも、心根の美しさが反映されるのか。

思わずぽんやりと涙についての考察を始めた佐波に対し、当の本人は自分の目から溢れるそれが涙だと気付くまでに、数秒を要したようだ。

零れ落ちた涙を掌に受け止めた彼は、束の間硬直し、

「…つみ、見るな…！」

炎を宿したように、ぼつとその美しい顔を赤面させた。

慌てた様子で涙を拭う梓星に、すっかり魅入っていた佐波はハツと視線を逸らし、小声で「すみません」と謝る。

正直何に対しているのか自分でも定かではなかつたのだが、

泣き顔など男子が見られて心良いはずもない。

ましてや相手は皇帝陛下だ。人前で泣くという行為が『弱音』と同等に非奨励されていることは間違いない。

ええつと…

逸らした視線を不自然に彷徨わせ、

……どうしよう…

佐波は途方に暮れた。

この場合、やはり泣かせたのは自分なのだろうか。

特別傷つけるようなことを言つたつもりはないのだけど、もしかしたら心傷に触れてしまつたとか…

或あるいは、本当に泣く程辛かつたのかも…

いやそれよりも、これって一体どれくらいの不敬に当たるのだろうか…

今日一日ですっかり社会的常識を失いつつある佐波は、麻痺した感覚を取り戻そと、この国で最も高貴とされる御方を盗み見た。しかし彼かの皇帝陛下は、懸命に涙を引っ込めようとしているのか、目拭つたり上を向いたりと、実に愛らしい動きを繰り返している。

確かにこの愛らしさでは、家臣たちがこぞつて仕事を取り上げ、ちやほやしたくなる気持ちも分かる気がしてしまつ。

本人にしてみれば、己の威儀の無さに悄然としてしまうのだろうけど。

もしかしたら、本人が思つてゐる程、周りから邪険にされて

いるわけではないのかもしれない。

肯定的にとれば『可愛がられている』。

敢えて否定的に言つならば『子ども扱いされていいる』という表現の方がしつくりくるのではないか。

もちろんそれを利用していく輩もいるのだろうから、やはり見逃せないことだとは思つが…

現実から逃れようとふらふらと思考を漂わせていた佐波だが、いつの間にかすっかり泣き止み、視界の端でちらちらとこちらに視線を寄せ、時折唸り、頭を抱えたかと思うと、真つ赤な顔で髪を搔きむしり始めた梓星の様子に、さすがに見過せなくなつた。

だ、大丈夫だろ？

「あの…」

心配になつて佐波が声をかけようとした瞬間、梓星は何故だか飛び上がつて驚き、掠れた声で叫んだ。

「そ、そろそろ、戻る！」  
「え、あ、そう…ですね」

考えてみれば、彼がこの部屋に来てもう数刻は経つたはずだ。

何処からか壁をすり抜けて未だ聴こえてくる賑やかな笑い声からして、夜明けまではもう少しはあるだろうが、そろそろ元の部屋に戻つておいた方が無難だろう。

しかし、なんだか最後になつてぎくしゃくしたまま別れなければならぬのかと思うと、自分勝手にも胸が痛んだ。

しかも、もう一度と直接拌顔することも叶わないのだ。

考へて急速に沸き上がつた寂寥を、けれど佐波はゆるりと首を振つて押しとどめた。

「人々、すれ違つはずもない人生だつたのだ。

『たつた一度の邂逅』ではない。一度でも出逢えたことに意義がある。

見誤つてはいけない。勘違いしてはいけない。

互いに生きる場所が違うだけのこと。

朝と共に覚める夢でも、覚えていられるならば、記憶は残る。宝玉のよつな、記憶が。

無意識に右手を握りしめ 佐波は、かねてから気になつていた事をよみがへ口にした。

「…………といふで、どうやつてお帰りに？」

「うう」

痛いといふを突かれたのか、呻きを上げた梓星に、佐波の頬が引き攀つた。

まさか、本当に行き当たりばつたりで来たのか……。その行動力には感心するが、これが一国の皇帝ともなると少し不安にもなる。

目に見えて動搖している彼に、佐波は少し考へ、これしかないかと覚悟を決めた。 痛みに耐える覚悟だ。

「……少し、御手を拝借しても？」

布団から動く右手を出しつゝ、その意味を瞬時に解した梓星は目を見張った。

「お前、起きられるのか?」

「いえ……どうでしょ。でも足の怪我は大したことないと思つので

…」

「足?…まさか、立ち上がるつもりか?」

「はい」

自力では無理だが、誰かに手を借りればどうにかなる…ような気がする。

試してみないことには分からぬけれど、固定されて全く動かせない左腕はともかく、両足は骨折もしていないようだから、痛みに耐えさえすれば立ち上がれるだろう。

と、無理矢理楽観視して半ば自棄で伸ばした佐波の手を、梓星が恐る恐る掴んだ。

「腕を…どうすればいいんだ?」

「あの、ゆっくり上にひっぱ痛たたたたつ

「す、すまん!」

怪我人など触つたこともないであろう彼は、やつぱりといつか、力加減を知らなかつた。

腕をいきなりぐーんと引っ張られ背中の傷が嫌な音を立て、直後脳みそにがつんときた激痛に目から火花が飛んだ。

あまりの痛さに言葉もなく悶絶する佐波を、梓星がオロオロと見下ろし、

「む、無理に起き上がる事はないぞ?」

「……つ、い、いえ、起きます」

喘ぐような激しい痛みをぐつと堪えて力強く言い切り、もう一度腕を伸ばす。

今度は自分の方からも力を入れて、身体に負担をかけないようこして…

ここでき起き上がることが出来れば、自分にひとつも負うことだ。いつまでも寝たきりでは、面倒をかけている早音様にも迷惑をかけることになる。

そう奮起して伸ばした腕を、今度は先ほどよりもっと恐る恐る、そして優しく掴んだ梓星は、そつと身を屈めて佐波の脇に手を入れると、腕全体で背中を支えてゆっくりと佐波の半身を起こした。そのあまりにも自然で献身的な動作に、佐波は心底驚いた。

「あ、ありがとう…」  
「いや…」

照れたのか、頬を赤らめて少し距離を取るように身を離したが、掌で佐波の背中を支えることは忘れていない。

凄いな…

今まで殆ど経験がないことでさえ、彼は本来の優しさと相手の立場を想像することで簡単に実行してしまった。

誰にでも出来ることではない。普段優しさに触れている人間でさえ、相手を慮るもんばかる立場になれば、直ぐにとはいかないものだ。

改めて目の前の彼の才能に敬意を表しつつ、佐波はもう一度、今度は立ち上がる為に尽力を願つた。

端から見れば使用人風情が高貴な御方に世話をされるという、特に彼の家臣が見れば卒倒ものの光景であるが、当の本人達は至つて真剣だ。

互いに意志を通わせ、途中軸を歪ませながらもじりじり立ち上がることが出来た佐波は、体中を駆け巡る鈍痛に堪えながら「お手を煩わせました」と笑顔で礼を述べた。

礼を受けながらも注意深く佐波の脇を支えていた梓星は、並び立つたことで下に離れた視線に驚いたのか、目を見開いて叫びつ。

「……お前、随分小柄なのだな」

「そ、そうですか？」

並んでみれば、確かに梓星とは頭一つ分ほどの差が出来た。座っている時はどこか少女のようにも見受けられた梓星の容貌も、こうして下から見ると、若竹のようにすっと伸びた背が如何にも青年らしい。

それでも、同年代の身体を酷使する仕事を持つ者よりもずっと華奢だし、労働の為の筋肉がついてない所為か弱ったおやかにも見える。

でも性別の違いもあるわけだし、私が特別小柄ということもないはずだけ……

小首を傾げると、梓星は鷹揚に頷き、

「ああ、お前くらいなら俺でもすっぽり……そ、そそそそつい  
えば、歳は幾つだ？」

不自然に話題を変えた。

それに内心戸惑いつつ、答える。

「17です」

「17つ? ..... 見えんな。14、5かと思つていた」

「14、5ですか?」

「これもまた小首を傾げる。年相応だと思つただけど」

「いや、もしかしたら、何が多大な勘違いをされていのでは?」

「何となく嫌な予感を覚えながらも、あまり言及したくない話題だったので、ここは敢えて触れずにおくことにした。」

「梓星様はお幾つですか?」

「氣を取り直して問つと、彼はなんとなくそわそわした様子で答えた。」

「俺か?俺も17だ」

「同じ年なのですね」

やはりそうか、と笑みを零す佐波に、梓星は一瞬動きを止め、

「わうだな……」

ぽやんとした顔で呟く。

心此処にあらずなその表情に不安になつてそつと袖を引けば、再び飛び上がらんばかりに驚かれた。

「なななんだ!?」

「い、いえ……急ぎましょつか」

「そ、そうだな！」

こちらも状況を思い出したのか、気を取り直した表情で、

「それで、立ち上がりつてお前は何をするつもりだ？」

「梓星様の足場になります」

「あしば？」

「お尻りになられるのでしょうか？」

何故だか要領を得ない顔の梓星に、天井を指差してみせる。布団の敷かれた場所のほぼ真上。ぽつかりと一部分だけの闇がこちらを覗いている。

説明するまでもなく彼が降つて来たその穴を、当事者である梓星はぽかんと見上げ????盛大に頬を引き攣らせた。

「まさか…お前が俺の足場になるといつのか?」

確認せずにいられないといった表情の梓星に、思わず「出来れば私も遠慮したいのですが…」と本音を洩らしつつ、佐波は部屋の壁端 四角い潜り戸を指差した。

「そこ」の扉は外から施錠されているようですし、『ご覧の通り、この部屋には他に出入り出来るような場所は…あ、天井以外ですが…ありません」

「施錠?…ああ、そうか、お前はまだ仕置きの途中なのだったか」「え、ええまあ…それに、別の場所から出られるのは危険です」

いくらここが皇族御用達の遊郭であっても?…この若き皇帝の顔を知っている者がそうそう居るとは思えないが?…用心に越したことはない。身分を抜きにしても、梓星は見た目だけでも十二分に高貴な姿をしているのだ。知らぬ場所に出たが最後、物取りや破落戸「いろつき」の獲物となる可能性が高い。

となると、一番安全かつ最短で元の部屋に戻る道といえば一つしかない。

「ほどなく夜が明けます。その時に梓星様が不在とあっては一大事です。加担した男娼にも、とばっちり…じゃなかつた、身代わりとなつた兵士にも罪が及ぶのは間違いありません」

その時は、佐波など問答無用でこの場で首を落とされるだろつ。思わず小さく笑つてしまつたが、笑つている場合ではないなと氣を引き締める。それでもここまで連續して死の危機に瀕していると、感覚が麻痺してくるものらしい。なんとも滑稽な人生だ、と開き直る気持ちすら湧いてきている。

そんな薄ら暗い感情が表に出ていたのか、梓星の表情に微かに怯えが見えて、佐波は慌てて心を隠した。

「そのような惨劇を生まぬ為にも、梓星様にはどうやつても元の御部屋へ戻つて頂かねばなりません」

「あ、ああ… それは勿論」

「どうわけで」

戸惑う梓星の言葉を遮り、今度は頭上にぽっかり開いた暗い天井穴を指差した。

「私を足場にして上つてください」

「……いや、無理だろつー！」

一瞬絶句し、直ぐに声を荒げた梓星に、佐波は「大丈夫です」と請け負つた。

「私も一度で上れるとは思つていません。体格差もありますし…私が足場として役不足であるのは承知しています。最悪上れない可能性もありますが… ですが、とりあえずやってみる価値はあるかと」「ち、違うーそういう意味じやない！」

何故だか酷く狼狽した様子でそう言い、もどかし気に梓星は首を振つた。

「そうじやない…別に上れるかどうかを気にしてくるんじやなくて…だから…あれだ」

「あれ？」

「その…だから、お前を…」

「…私を？」

「…踏み台には出来ないと、そひ、言つてゐるのだ」

あとは分かれ！と顔を赤くして怒鳴られて、佐波はぽかんとした。

わ、分かれと言われても…

…それは、私が役不足過ぎて不安だと言つているのだろうか。いや、上れるかどうかの話ではないと言つていたな。ならば、ただ単に私が足場なのが不満なのだろうか。ああ、それとも優しい彼のことだ。もしかしたら彼は私の身体のことを気遣つてくれているのか

そこまで一気に思考を流して、最後に辿り着いた推測を頼りに言葉を返してみる。

「御気遣いは大変有り難いのですが、私でしたら大丈夫です。確かに多少は怪我に響くでしうが…」

「だから…怪我のことでもなくて…いや、怪我ももちろん気にならぬが！」

「えつ、…違うのですか？」

どうしたことか。梓星の意図が全く読めない。

困つて眉を下げるが、梓星も同じように眉を下げた。まるで「どうしてお前は分からぬんだ？」と言外に言われているよう居たまらない。案の定、彼はふいと横を向いて「もういい！」と一声上げた。正直全然良くはないが、どうやらこの方法が不興を買つて

こいこいとは間違いないようだ。

でもなあ…

他の方法、といつても、すぐに思い浮かぶものは無い。天井までの高さは、佐波と梓星が肩車してようやく上れる程だ。だが体格差から梓星が佐波を肩車することは出来ても、逆は無理だろう。佐波が先に上つて梓星を引っ張り上げるという方法も考えたが、左肩の怪我の所為でそれも無理だとすぐに気付く。せめて梁か何かがあれば、布団を破つて綱代わりにするのだが…生憎天井の穴の先は深い闇で、闇雲にしてどうにかなるとは思えない。

梯子なんて贅沢は言わないから、せめて足場となる台の一つでもあればいいのだけどなあ…

分かつていながらも期待を込めて見回した室内には、やはりというか、当たり前のように何もない。あるのは佐波の布団くらいだ。これを折り畳んだとしても到底天井には届かないし…

…やはり説得するしかないか…と心を構え、口を開きかけた佐波は、ふと、疑問を覚えた。

「…あの、梓星様」  
「なんだつ？」

噛み付くような勢いで問い合わせられて口籠りつつ、どうにか疑問を言葉にする。

「…」の場所を教えたという男娼は、帰る方法については何も言つていなかつたのでしょうか

切つ掛けを掴んだ所為か、言葉にしている間も、まるで水門を開けられた貯水湖のように疑問がどんどん溢れてくる。

そうだ。考えてみれば不審な点は幾つもある。

どうしてその男娼は、皇帝を匿つという大胆な行動をとったのだろう。いくら欲に目が眩もつと、自身にも危険が多い賭けだ。失敗すれば命がないことに、まさか気付いていない理由「わけ」も無い。ましてや、この部屋への着き方を教えておきながら、帰る方法を何一つ教えていないと「うのも…」

いや、そういうえば、男娼はここを『空き部屋』だと言つていたらしい。

その男娼が私の存在を知らないのは至極当たり前のことだから、彼の発言自体には不思議はないが……ということは、私がここに入る前は、天井に上る為の台になるようなものが部屋にあったのだろうか。

もしや、私が部屋に入る為に撤去された、とか…？

ヒヤリと背中を撫でる推測を慌てて振り払つて、佐波はもう一つ別の疑問を提示した。

「それに、梓星様は『中間階』を通つてこられたと仰つていましたが…」

「あ、ああ」

「…天井裏に通じる『中間階』については、もしさ『隠し通路』だったのではないでしょうか

「隠し通路？」

きょとんとした梓星は、だがすぐに「ああ」と納得した表情を見せ

た。

「やうだらうな。道理で妙な道を辿ると思つた」

「…お気づきになられませんでしたか?」

「うふ。そもそも『中間階』なるもの自体、初めて通つたからな」

皇宮にも『隠し通路』はあるが、このよつた木造ではないし、と平然と言られて反応に困る。

そうだった。梓星はただの貴族ではなく、皇族なのだ。一般的の建物…遊郭がそれに倣まれるとは思わないが…の構造についてなど知るはずも無い。

梓星の「そもそも中間階とはなんなんだ?」との問いに、佐波は出来るだけ失礼にならないよつて言葉を選んで、簡単に解説することにした。

「一階と一階、一階と二階…などの建物上下の間に作られる空間です。普通の一般家屋で『中間階』を持つ建物は滅多にありません。無駄な空間をわざわざ作るような余裕はありませんし、管理も面倒ですから。でも、家格が大きくなりますと、中間階を好んで作る者も多いです」

「なぜだ?」

「防音対策といつのもありますが…隠し部屋や物置に使えるからといつのが、一番の理由のよつです」

佐波の暮らしていた貴族家にも中間階はあった。一族の者と少しの信頼を受けた使用人しか知らない隠し通路兼隠し部屋として使用されていてが、一番利用していたのは恐らく佐波だ。兄妹達の執拗な苛めから逃げるのにはうつてつけだつたから。

あの頃は、よく以織と一緒に隠れ回っていたな…

ふと懐かしい記憶が過つて、無意識のうちに頬が緩んだ。

一人でいれば、それだけでどんな苦境も楽しめた。逃げて、隠れて、それでも見つかって、また逃げて。

佐波にとつては有り難い道連れだったが、以織はどうだつただろう。兄妹の側についてさえいれば、彼は他の使用人たちから疎まれることも、大変な仕事を押し付けられる必要も無く、平穀無事に過ぎていたはずなのに。

当時は彼が離れてしまつのが怖くて言ひ出せなかつたが、本当は何度か伝えようとしたのだ。

私の側にいる必要はないと。そこまで呂くしてもらひえる程の価値は、私にはないと。

もし伝えていたら。

心に冷たい風が吹き込む。雪。あの日の粉雪が目前を覆つ。

彼が身代わりとなつて、遊郭に売られる」とはなかつたのだろうか

「 か?  
「 …えつ?」

ハツと我に返ると、腕組みをした梓星が怪訝な表情で見下ろしていた。

いつの間にかぼんやりしていたらしい。未だ霞がかつたような頭を少し振つて、佐波は「すみません、もう一度…」と聞き返した。

「だから」と梓星は続ける。

「IJの郭の『中間階』が『隠し通路』だとして、それが何か手がかりになるのか?」「え、ええ。…手がかりといつよりは、その男娼の話が不審であるいつことの証明になるかと

「不審か?」

佐波は「はい」と答え、気を取り直した。

「『隠し通路』をその男娼が知っていたといったのは、少々理屈にありません」「…そうか?」

遊郭の者なら誰でも知っていると言つていたぞ、と言つて眉根を寄せる梓星に、佐波は首を振つた。

「いいえ。そのはずは…多分、ありません。もし遊郭で働く者が皆その存在を知つていたら、遊郭の秩序が崩れてしまいます」「秩序?…どうと?」

「具体的には窃盗や盜聴…手引きもあるかもしません」

その言葉に、梓星が瞬く。

「手引き…客と逃げ出すといつとか」

「はい。私も遊郭の事情に明るいわけではありませんが…少なくとも、遊郭を経営する側からすれば、遊女男娼にそのような可能性のある道をわざわざ教えるでしょつか」

思い込みは危険だと思うが…当時布津随一とはいえ、田舎の貴族で

あつた佐波の生家でもそつだつたのだから、要人も多く訪れるという皇都の遊郭でその辻がないというのは、逆に不可解だ。

それとも、その『中間階』の入り口は余程見つけ易い場所に誰でも気付けるような場所にあつたのだろうか。と思つて問つと、梓星は眉根を寄せたまま「いや」と応えた。

「男娼が床板を開くまで、そこに扉があることにも全く気付かなかつた。見事に部屋の景観に融け込んでいたしな」

「ならば、自分で探すことはまず不可能ですね……」

殆ど無意識に呟きながら、今まで伝え聞いた『遊郭』についての情報頭の中で並べ立て、一つ一つ弾いていく。

遊女男娼の部屋割りについて？？？確かにこれは、何処からか流れの行商人に聞いたのだつたが、それとも豪商家の使用人に聞いたのだったか？？？とにかく多くの遊郭では、遊女男娼は自分の『部屋』を与えられ、そこで寝起きし、夜にはその部屋で客を取るのだと聞いた気がする。そういう遊女男娼は『部屋棲み』と呼ばれ、他の部屋を与えられない者達よりも良い待遇を受けるのだとか……

だが、それがこの遊郭に……皇国随一の遊郭街に当てはまるかどうかは分からぬ。ここに居る全ての遊女男娼は全州全皇国内最上級で、その意味では全ての者達に部屋が与えられていてもおかしくないのだ。

暫し考へ、埒が明かないと氣付くと、佐波は自分よりもよっぽど詳しげであつた以前の少年に問つた。

「梓星様は、こちらに来られる前は、最上閣にいらしたのでしょうか

「ああ、そうだが？」

「ということは、その男娼といつのは、所謂”大夫「だゆう」” だつたというわけでしょうか」

男娼大夫と遊女花魁。どちらも遊郭の一一番人気、品も格も全てが最上と認められた者のことだ。

当たり前だが、相応に美しく博識でなければ務まらない。彼らは遊郭の生きる看板であるから、郭主はを挙「こぞ」つて飾り立て、贅の限りを与えるそうだ。部屋だつて最上級…つまるところの最上閣に逐「お」わすのが自然というもの。そう思つての言葉だつたが、何故だか梓星は困惑したように眉根を寄せた。

「大夫だつたといふか……大夫になつた、といふか……」

「なつた”？」

「お前、知らないのか？」

不審気に問われて、ぎくりとする。もしかして、何か常識といふ名の地雷を踏んでしまつたのだろうか。

言葉を探して視線を彷徨わせた佐波をどう思つたのか（恐らくまた勝手に推測を働かせたのだろうが）梓星は「ああ……」と同情の視線を寄越し、

「そりが、お前はまだ遊郭「こ」に来て日が短いのだつたな……」

知らないのも無理は無い、と慈悲深い声で呴かれて、佐波は余計に心拍数が上がるのを痛い程感じながら、こくりと頷いた。ここに来て数日なのは嘘ではないし、彼が思つてゐる通り、遊郭に突き出される日もそう遠くない（らしい）。それでもなんとなく嘘をついている気分になつて俯くと、それも梓星は都合良く受け取つてくれた。

「す、すまない…辛いことを思い出させたか…。その怪我も、撻を知らなかつたが故なのだろう…惨いことだ…」

「ええつと、ええつと…そ、それで、”なつた”というのは…？」

どのような惨い想像をしているのか、曲解が進み過ぎて涙まで浮かべ始めた梓星に慌てて先を促す。

梓星も我に返つたようで、表情を引き締めて頷いた。

「ああ、そもそも、この遊郭街には”遊女花魁”はいても、”男娼大夫”は常時存在するわけではない」

「…？いつも居るわけではないと？」

「そうだ」

首を傾げる佐波に、梓星は明確に言葉を紡いだ。

「男娼大夫は、全て皇帝の意向次第？？？皇帝の愛妾を”大夫”と呼ぶのだ」

「皇帝の、愛妾を…」

反芻して理解しようと紡いだ声が途絶える。いや、途絶えたのは現に寄せていた意識だ。

瞬き一つ。それだけで、佐波の意識はあの田に飛んでいた。

君影は大夫だった

陰鬱な声が聴こえる。

薄闇に目を凝らすと、闇に融けるような…いや、闇に浮かび上がる程黒い衣を纏つた男の姿が。

佐波も良く知るその男は、何の感情も伺えぬ陰惨な顔で、再び口を開く。

最期の顧客は、前皇帝だ

「…どうした？」

ぱちん、と泡が弾けた。

もう一度瞬けば、目前の黒い医師は、美しい貴人に姿を変える。記憶の間にいたのは、ほんの数秒のことだったのだろう。

それなのに、まるで数刻は経っているかのような深い疲労感に襲われて、佐波は右手で顔の半分を覆つた。

まづい：

途端に脳天から一気に血が下がる気配がして、へりつとよろめく。

「な、大丈夫かつ？」

慌てて支えてくれたのは、やはり目前の梓星だ。

怪我をしている肩に出来るだけ触れないようにしていいる所為か、殆ど抱きしめている形に近い。

それに気付いて瞬時に頬を染めた梓星とは対照的に、佐波の顔は青ざめて、微かに震えている。

「大丈夫、です」

どうにかそれだけ紡ぐも、チカチカと定まらぬ視界に吐き氣まで襲つてきて、どうやっても身体に力が入らない。

握力も戻らず、しがみつくことも出来ないで腕の中でぐつたりとなつた佐波に、梓星は落ち着かない様子で、

「や、やはり無理だ。今のお前の様子では、俺が踏み台にでもしようものなら、命に関わるぞ」

「……で、すが…」

「いいから無理をするな。…酷い顔色だ」

大きな湿布をした佐波の頬を心配そうに撫でて、彼は佐波をゆっくりと布団に座らせた。

本当は横にならせた方がいいのだろうが、布団の上にへた、と座り込んだ佐波は何かに耐えるように目を瞑つて、微動だにしない。そんな佐波の弱々しい姿に動搖していた梓星が、ようやく落ち着きを取り戻す頃。

どうにか目眩から解放された佐波は、詰めた息を吐き出して言つた。

「…すみません、お手を、煩わせました…」

「そんなことは気にするな。それより、早く横になれ」

「いえ、もう大丈夫です」

「大丈夫じゃないだろ?」

怒ったような口調で言つ梓星に、佐波は情けないような、眩しそうな笑みを浮かべる。

「梓星様はお優しいですね」

「やや…つ優しくな…！」

この期に及んで何故だか必死に否定しようとする少年を微笑ましく思いながら、佐波は「申し訳ありません」と続け、

「話の腰を折つてしましました。…続けて頂けますか?」

「話?……あ、ああ、大夫の話だつたな」

氣を取り直した梓星が、思い出すように言葉を続けるのを見つめる。

「皇帝の愛妾を『大夫』と呼ぶ、ということは話したな。つまり皇

帝が通えば、それが例え下位の男娼であつても、その者は遊郭の最上位である『大夫』と呼ばれることになる

「…では、皇帝が通わなければ…」

「ああ。遊郭に男娼大夫は存在しないことになるな」

淡々と続ける梓星に、佐波はそつと俯く。

『男娼大夫』『皇帝』『顧客』 その意味を、このよつた機会に知る事になろうとは…

いや、それどころではない。もつと重要なことを見過していったのだと、佐波はようやく気付いたのだ。

前皇帝陛下は、梓星様の御身内… 確か、御兄上様でいらっしゃったか…

先帝陛下崩御の報せを聞いたのはいつだつたろう。確かに？？？そうだ。2年前の、春先だつた。

豪族家の下働きの仕事にも慣れ、休み時間に武術を習いながら、日々と日々を過ごしていった頃。今思えば、佐波の人生の中で一番生活が安定していた時期だ。

最初にその報を齎したのは、行商で入ってきた薬売りだつた。彼は「まだ御若いのにねえ。病は氣からつていうし、皇帝つてのも氣苦労が多いんだろうねえ」と頻りに同情の意を陳べながら、熱心に心が楽になるという香を薦めて帰つて行つた。

聞く話によれば、若くして賢帝と呼ばれていた皇帝陛下が崩御されたという突然の報せに、皇都は上に下にの大騒動だつたらしい。だが遠く離れた田舎州の布津では話題になるのも一瞬で、その後すぐに皇位が代替わりしたという話を聞いて、それで終いだつた。

一応、崩御されたまだ若い皇帝陛下に世継ぎの御子がいないという話も上がつたが、弟殿下存在が明らかになつてからは、噂好きの下女達でさえ興味を無くしたようだつた。せめて泥沼の世継ぎ争いで

もあつたならば、もう少し躊躇されていたかもしれないが……

？？？いや、上手い。

頭の中で考えているだけでも、田の前の少年に対して不誠実だ。  
未だに実感がないが、彼は先帝の親族？？？どうか、その後を継  
いだ現帝陛下なのだ。

色々な場所に飛躍したくなる思考を押さえ込んで、今は田の前の事  
に集中すべきだろ。

……すべき、なのに。

心の一部に、青い霧が広がる。

？？？……やうか……以織は……少なくとも、先帝陛下に愛されていたの  
か……

それが彼が望むものであれ、望まぬものであれ。少なくとも、居場  
所に惑つことはなかつたのか。

じわじわと心の湖面を覆つていくそれは、喜びだらうか。哀しみだ  
らうか。

苦しいような、切ないような……少しだけ安堵するようなこの感情の  
名は、なんとこうのだらう。

迫り来る感情に呼吸が苦しくなるほど胸が詰まつて、佐波は意識し  
て深く息を吸つた。

？？？時間が欲しい……

ゆっくりと物思いに耽る時間。過去を整理し、今を正し、未来を探  
る時間が。

考えた所で、職もなく、充ても無く、女の身で？？？しかも今現在無実の容疑をかけられている自分に、明るい未来などありはしないだろうが…

思い返した現実はあまりに情けなくて、思わず笑みさえ零れる。

佐波の苦いその笑顔を訝し気に見ていた梓星は、ふと何かに思い至つたらしい。

急に大変慌てた様子で口を開いた。

「い、言つておくが、別に愛、愛などなくたつて、大夫を指名することとは出来るのだぞ！」

「…え？？」

再びぱちんと目の前で間<sup>あわい</sup>が弾けて現実に引き戻された佐波は、梓星の言葉に驚きの声を上げた。

彼は苦々しい顔で続ける。

「俺だつて、選びたくて選んだわけじゃない。ただ、仕方なく？？？」

「仕方なく？？」

「つ……だから、俺には愛妻など必要なかつたのだ！それなのに毎度毎度勧められて迫られてもう自暴自棄というか、なんというか…！だから、その、いつせつて逃げ出して……」

言い出したはいいが気まずくなつたのか、尻窄みに言葉が消えてゆく。

それでも、何と言葉をかけたらいののかと黙り込んだ佐波の反応に怯え、無理矢理に口を開いた。

「い、今まで…」の一年間、それでもどうにか耐えたのだ。指名な

ど一度もしなかつたし、2度同じ男娼が宛てがわれないように先手を打つ事もした。どうにかすれば、家臣の方が諦めてくれるんじゃないかと思つて……だがもちろんそんなことは、或るはずもなかつた。… 今日初めて男娼を指名したが、郭主も家臣達も大層喜んでな……歴代の皇帝に比べればかなり遅いが、遂に現帝おれにも”愛妾”が出来たと……いや、俺が宣言したわけではないのだぞ！？ただ彼奴らが勝手に騒いで愛妾愛妾と…そもそも俺は全ての男娼達にも一度として指一本触れさせたことはない！いやまあ高杯を受け取る時に指くらいは触れたかもしれないが… つ だが疾しいことは一切なかつたと誓つて言える！誓つてな！

……俺は何で弁解してるんだ！？

「あ、ああ…？」

本当になんで弁解されているのか分からぬが、とにかく梓星が何かしらの『誤解』を恐れていることはその必死な言い分から理解できる。

興奮で赤くなつた顔で乱れた居住まいを正す彼を、佐波は小首を傾げながら見つめ、

「……つまり愛妾とこののは名ばかりの関係でも成り立つ、といふことだしじうか」

「…あ、そうだ！俺が言いたかったのはそれだ！」

我が意を得たりと顔を輝かせる梓星。

表情がくるくる回る彼はやはり愛らしいが、話の内容は少々不安を抱かせるものだ。

？？？愛などなくても……

再び意識が青い霧に覆われそうになつたところで、痺れを切らした

のか、梓星が「だから」と声を上げて我に返つた。

「今日俺が取引をした男娼は、俺の指名を受けて大夫…俺の愛妾となつたのだ」

「はあ、なるほど…」

「それで…」

「…へ？」

なぜだか問いを投げかけられて、素つ頓狂な声が出た。梓星の口がムツと歪む。

「お前が言い出したんだろ」「…」に来る前に、最上閣にいたのかとか、なんとか

「え、…ああ、はい、申しました、確かに」

そういうばそんな話だつたとオドオドする佐波に、梓星はさりと口を曲げた。

「で、どうなんだ。何か思いついたのか？」

「ええ…ええーっと…」

まさかすっかり忘れそつたとは言える空虚ではない。  
確か、どうやつてここから脱出するかとこう話だつたはずだ。  
慌てて記憶の引き出しをひっくり返し、先ほどの会話の中から糸口を探つた。

「…まあ、隠し通路ですが…」

どうとか絞り出した言葉に梓星が頷き、佐波はほつとして続けた。

「大夫という存在が不確定なのであれば、最上閣が大夫の部屋と決まっているわけではないのでしょうか。ならば『部屋棲み』ということもないのでしょうか。となると、男娼が最初からその通路を知っていた可能性は低い……ではその男娼は誰から隠し通路を教えられたのか……これは、恐らく郭主が有力でしょうか。皇帝陛下御用達ともなれば、逃げ道の一つや二つ用意していてもおかしくありません。もしかしたら、歴代大夫にしか教えない通路なのかもしませんね。それなら、大夫が知っていたのも納得出来る????ですが、そうなるとはやはり……」

「やはり？」

「……やはり、その男娼が最上閣へ戻る道を教えてくれなかつた理由がわかりません」

結局問題はその一点なのだ。

夜が開けて、皇帝が部屋にいなくて困るのは男娼も一緒だろう。一瞬、やはり欲望に目先が眩んだか?とも思ったが、仮にも皇都隨一の遊郭街に身を置く高級男娼に、それくらいの分別も備わっていないというのは大問題だ。

ともすれば、いくら皇帝の愛妾という肩書きがあれど、処刑されてもおかしくない失態なのだから。

????それとも、男娼は最初から梓星を部屋に帰さないつもりだったのか……?だとしたら、なぜ……

ふと、思考を掠めた恐ろしい想像にはつとして、佐波はたじろぐ梓星を無視して強く凝視した。

「……梓星様」

「な、なんだ?」

「もし、この部屋にいたのが私ではなく」

「う、うん?」

「…あなた様を亡き者にしようとしている者であつたなら、どうな  
かつたのです」

我ながら低い声だった。

もちろん自分のような使用者崩れが皇帝陛下の行動を咎められるわ  
けもないのだが、この場で彼に進言出来る者は自分しかいないので  
から仕方が無い。

言わんとしていることに気付いて、ひく、と頬を引き攣らせた梓星  
に、佐波は全てを語りて深く息を吐いた。

「……梓星様」

「わ、わかっている! その、軽卒だつたと…」

「軽率で済む問題ではありません。梓星様の御命は、梓星様が考え  
らてているよりも、ずっと重いのですよ」

「わかっている!」

「分かつていらっしゃらない。私は、」

拗ねてそっぽを向こうとする梓星に、佐波は自分でも驚くほど明瞭  
に言葉を紡いでいた。

「梓星様を、心配しているのです」

「……心配、か?」

「心配です」

ビクッと肩を震わせた梓星が、次いで不思議そうに小首を傾げる。  
出過ぎたことを言つてはいるが、一応自覚している佐波は、自分を諫め  
て眉根を下げる。

「申し訳ありません、私のような者が、梓星様にこのようなことを申すのは大変無礼な振る舞いであると承知しています。ですが、もし梓星様が、また次にこのようなことで誰かに嵌められたらと思うと…堪らなく哀しいのです」

「哀しい…？」

頷いて梓星を見ると、彼は瞠目していた。その瞳の中に、夜空の星のような煌めきが幾つも浮かんでいる気がする。

特別なことは言つていないとと思うが…と少々疑問に思いながらも、佐波は続けた。

「今日は、結果的には私のような無力極まりない人間でしたが…男娼がここを空き部屋だと偽り、刺客を忍ばせていた可能性もあつたはずです。…むしろ、そちらの方があり得たかもしれない。遊郭は皇宮とは違うのです。…いえ、例え皇宮であつても…どんなに万全を期した場所であつても死角は生まれます。この遊郭で言えば、まさにこの部屋です。梓星様が今ご無事でいるのは、奇跡的なことなのです。…それに、もしかしたら私がこの部屋に居た為に、刺客が入つてこれなかつただけかも」

脅すように言いながら、…いや、それはないか。と内心でひつそり思つ。

佐波の為に計画を変更出来る程、容易に次の機会に恵まれることだけ思つ。

ましてや、梓星が男娼を『愛妾』としたのは今日この日なのだ。これが計画のうちならば、随分と用意周到で手際の良い、連携のとれた組織が関わつていいはず。そしてやはり、そんな組織が佐波の為に計画を変更するとは思えない。

佐波の存在は彼らには想定外だったかもしれないが、部屋から逃げる事も出来ない怪我人なのだから、もし始末するにしても、それは

赤子を泣かすより容易だつただろう。

ということは、暗殺が目的と考えるのは少し無理があるか…

ならば、目的は皇帝の暗殺ではなく、拉致か…？

物騒な方向に佐波の思考が働いている間に、梓星はそわそわと佐波を見ている。

叱られている真つ最中だといふのに、その瞳は期待に満ちて輝き、頬がほんのり染まつっていた。

「……どうなさいました？」

場違いたれども感じさせる雰囲気を発する梓星に、一咄かえるのを止めて向き合つ。

「…俺がいなくなるのは、哀しい、か？」

「もちろんです」

呟くよつた聲音に強く即答すると、その双眸が…いや、双眸どころか、表情までとろんと融けた。

理由が分からず困惑する佐波に、花に喩えられるだらつ美しい顔かんぱせが、朝露を含んだ薔薇がそつと開くよつた色香を纏わせて、艶やかに微笑んだ。

「…哀しいの反対はなんだ？」

「…くつ？」

「哀しいの、反対は？」

「う、嬉しい…？」

何の問答だらうと身構える佐波に、梓星は満足そうに頷く。

「で、俺がいなくなるのは哀しいんだな？」

「え、ええ、もちりん…」

「なら、俺と共にいるのは?」

「へ、え?」

哀しいの反対なんだら?と艶やかな顔で微笑まれて、佐波はぽかんと聞抜けな顔になつた。

?????や、それは今話すべきことなんだろうか…いやいや、それより何だら?この空氣は。

舌に触れる空氣が甘い。

経験の薄い佐波でも察するほど、場の空氣がおかしな方向に変わつてきているのが分かつて困惑する。

?????わ、話題を変えないと拙いことになりそつだ…

拙い事が具体的に何なのか分からぬまでも、本能で危機を察知した佐波は、無理矢理毒氣のない笑顔を浮かべた。

「と、ともかく無事で何よつです。…といひで、この部屋は最上閣からどれくらい離れてしているのでしょうか?」

「…どれくらい、と?」

「ええつと、その、何階、といつか…」

自分がいる建物が何階建てなのか知らない…というより、自分のいる部屋すら建物のどこに位置するのか知らない佐波が、大変苦しい気持ちでそれを口にする。

怪しまれるかと思つてビクビクしていたが、梓星は普通に視線を上

に向け、思ひ出しあひだついた。

「やうだな……確か、階段を3つ……4つは下りたか

「4つ……え、その前に、階段とは？」

聞き捨てならない言葉に目を瞬かせると、彼は何でも無いことの様に、

「ああ。この部屋に辿り着くまでは、殆ど垂直に階段を下りるだけだったのだ。この部屋の上にきて、急に階段が無くなつたんだが、床板の薄さからこの下に部屋があると察して、男娼の言葉の通りに床板を？？」

「お、お待ち下さー！男娼の言葉通り……！？」

思わず前のめりになつて聞くと、梓星は少し身体を引き、

「あ、ああ。帰る方法は言つていなかつたが、最上閣から降りる際に、『行き詰まつたら床板を外せ』と……」

そしたらこの部屋に辿り着けたのだ、と彼は事も無げに言つたが？

？？

「『行き詰まつたら、床板を？？？』」

佐波の視線が、梓星の来た真上の穴から、そろりと下り、自身の座りこむ布団に落ちる。

うん？と梓星も同じよつて上から下へ視線を降ろし、一瞬言葉が途絶え

次の瞬間。

音のする勢いで同時に互いを見ると、一人は声を揃えて叫んでいた。

『床板！』

まだここが一つで自分でも思います。展開が遅くて申し訳ない…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5840j/>

---

溟樓綺譚

2011年11月24日21時04分発行